〔表紙〕

忠義公史料

文久二年自二月至十月

〔扉に、表紙と同じ文字の外に市来四郎編の記載あり〕

六五 〔毛利慶親書翰〕

外夷鎮撫　御国威更張ノ御処置ニ付テハ、乍憚
公武御深意御合一ニ被為成、速ニ御国是ヲ被成御定、
海内和協御武威海外ニ輝候様被仰付ノ外有御座間敷ト
存付、越俎ノ罪ヲ不顧鄙意申立候処、献芹ノ微志不被
捨置深重ノ御内慮被仰聞、御誠意ヲ奉感戴、微志弥増
不得已、於　京都堂上ノ御方ニマテ前段之旨趣内々申
立候処、恐多クモ被達
天聴、今般私儀上京仕候ハヽ、御沙汰ノ旨モ可被為在
由御密旨被仰下、冥加至極難有仕合奉存候、依之猶又
熟考仕候処、不得止次第トハ乍申、私式外様ノ身分ト
シテ直ニ奉汚
天聴候段、甚以奉恐入候、ケ様ノ義自然列藩并ニ草莽
志士承及、天下ノ公論ト存付候儀、事件ハ公儀ヲ差置、
直ニ朝廷江申上候テ不苦様心得違、自己ノ了簡ヲ以毎
々上書仕候様成行候テハ、識見ノ所及人々小異有之、
可奉惑
天聴、猶又　神州ノ御体ハ、鎌倉以来幕府ヲ被建置候
付、列藩以下直ニ奉汚
天聴仕候テハ、其事ノ得失ハ論ニ遑無之、幕府ヲ軽蔑
仕候筋ニ相当、　御威光不相立候、幕府ノ御威光不相
立候テハ、列藩各
朝廷ヲ戴キ、　勅命ヲ乞請、幕府ヲ要シ終ニ群雄割拠
ノ勢ヲ醸成シ、海内分裂、天下ノ公論モ帰着スル所無
之、却テ外夷ノ侮ヲ招キ、御国威弥及衰弱可申候、乍
憚　将軍ノ御職ハ上
朝廷ヲ御敬戴、下列藩以下ヲ御鎮圧、天下ノ公論ヲ被
成御総括候テ　叡慮御遵奉、御不侮ノ御手段被成御行

届候様可被為在段、申上マテモ無御座御事ニ付、今般公方様御上洛御国初ノ御先蹤ヲ以、列藩予参被仰付、当時御初政ニテ天下ト御更始ノ思召ヲ以、御国是如何相定候テ可然哉、各存意申出候様被仰聞、列藩建白ノ旨趣御熟考、

叡慮被成御窺、　勅諚台命ヲ以、御国是御確定ノ御旨列藩江被仰渡候ハヽ、衆心和協御国威更張ノ御発端過之候儀ハ有御座間敷ト奉存候、万一予参御断申上候欤、或ハ御国是御確定ノ旨違背仕候者有之候ハヽ、　勅諚台命ヲ蔑如仕候儀ニ付、無拠厳譴被仰付候共申分有之間敷ト奉存候、私儀速ニ上京仕、御趣意ノ大要申上ニテ可有御座候、重大ノ事件容易ニ申立候段、千万奉恐入候得共、

神州御安危ノ境、此　御一挙ニ有之御事、且最前深重ノ御内慮ヲモ被仰聞置候儀旁ニ付、不得止申建候儀ニ御座候間、不悪被聞召分可被下候、以上、

五月二日　　松平大膳大夫（毛利慶親、長州藩主）

六六　大原家記鈔

文久二年五月奉勅使于幕府事、詳於伝　勅紀事本末等、

文久二年五月八日重徳卿ニ、　御用アリ参レトノ仰アリケレハ、速カニ参　内セラル、ニ、議奏衆列座ニテ申渡サル、ニ、近頃幕府

朝意ヲ遵奉セサルニヨリ（是ヨリ先キ外夷百邦ニ渡来シ、日々ニ猖獗セリ、朝廷屢詔ヲ下シ、外夷ヲ掃除スヘシト、幕府極メテ奉セス、却テ朝廷ヲ無ン、許可モナキ条約ヲ取結ヒ、僭越ノ事トモ屢々アリ）、天下ノ人心洶々タトシテ穏カナラス、此上如何様ノ変乱ヲ醸シ出サンモ測リ難シ、之ニヨリテ執政ノ幕府ヲシテ

朝命ヲ奉シサセ、世上平穏、海内安穏ノ場合ニ至ラシメントノ御趣意ニヨリ、今度重徳卿ヲ以テ

勅使トシ、幕府ヘ差遣ハサルヘシト（是ヨリ先キ、薩州鹿児島ノ城主ノ父島津久光ヨリ数度ノ建議アリ、シトイフ）

勅書ヲ渡サル左ノ如シ（勅詔三事策略之）　此三事策ハ、初ノ島津氏建議セラル、ノ二事ナルニ、当時長州萩藩ノ士桂、小五郎ナルモノ上京シ、亟徳卿ノ許ニ来リ謁シ曰ク（聞ク、此トキ始テ見ユト）、今度幕府ヘ仰下サル勅書ヘ、此ノ一ケ条ヲ差加ヘサセラレ度旨開陳セリ、夫ヨリ岩倉具視朝臣ノ前ニ入リ進ハン、即時来ラルヘシト、彼朝臣モ何事ナラメト速ニ駕ヲ招ラル、然リ而シテ我邦屋ノ中ニ於テ三名（重徳卿　具視朝臣・桂小五郎）集合シテ、彼ノ大事ヲ談議討論ニ及ヒ、其一事ヲ併セテ即チ三事策トシ、之ヲシテ速ニ奏上セシメラル、因テ之カ　勅詔案ヲ桂小五郎及ヒ堀小太郎ヲシテ作ラシム、成ラス、又久我建通卿ヲシテ作ラシム、成ラス、伏原宣明卿ヲシテ造ラシム、少時立トコロニ起草シ奏上セラル、其詞章勅旨貫徹利害明弁筆端鋭鋒真ニ天工ト云ヘシ、或嘆美シ曰ク、朝廷衰微公卿数多アリトイヘトモ、文章已ニ絶タリト、豈図ラン、今此文章ヲ見ル　未タ朝ニ人ナシトセスト、蓋宣明、重徳卿ノ師ナリ）、重徳卿ニハ素ヨリ正直ナル性質故ニ、談議討論非ヲ是ニナシ、是ヲ非ニスルナト弁陳スルコトユメ〳〵ナシカタク、只幕府ヲシテ此

勅詔ノ御旨趣ヲ貫徹奉命セシメヨト云ノミナラハ、臣不肖ナリト雖トモ勅使タランヲ奉命セン、左ナクハ決シテ臣重徳ノ及フ所ニ非サル旨開陳セラレケレハ、一座ノ人々曰ク、素ヨリ此勅詔ヲ以テ幕府ニ通達シ、之レヲ遵奉セシムルノミト申サル、ニヨリ、速ニ勅使タランヲ奉命セラレス、其翌日口宣下賜フ、曰ク、左衛門督推任ノコト家例之レナシト雖トモ、今度格別ノ御用勤仕ノ間宥許セラル、且費用トシテ黄金二十枚ヲ下賜フ（岩倉具視公ニ聞ケリ、此勅使タルヤ岩倉具視朝臣ヲ遣ハサルニ廟議已ニ決セラル、然ルニ東福寺和尚天真謂テ曰ク、此度ノ使命ノ件容易ノコトニアラス、彼朝臣ヲシテ万々一使命ヲ徹達シ能ハサル時ハ、使命ノ件益重事ニアレハ、次テ奉命スルモノ必アルコトナシ、茲ニ大原重徳卿アリ、正実一片ノ人ニシテ、勅旨徹底ニ至ランコト疑ナカルヘシ、万一彼卿ヲシテ事ヲ過ラシムルモ再ヒ具視朝臣ヲ差遣ハサレナハ、朝旨必徹底セン、今度ノ人撰廟議熟決セラレタント、仍リテ重徳卿ヲンテ勅使トセラレヌ（第六巻建仁寺天章カ建言参看）

六七　演舌〔近衛忠房〕

昨夜忠左衛門〔中山実善〕入来之砌、御書付渡シ置候事、唯今又候従議奏中此　御書附被　出候、右ハ昨夜之　御書附ニ被添被　出候筈之趣ニテ被渡候、早々可達及言上置候、尤其元限他見堅々無用、右之趣モ達シニ候、扨亦三郎ト御改名芽出度安心仕候、仍如此候也、

五月十三日　　〔近衛〕忠房

島津〔久光〕三郎とのへ

六八　寺田屋事件連類者帰麗并達書

文久二年五月十三日達

伏見寺田屋ニ於テ暴徒ノ中、奈良原カ説諭ニ服シタル曹大坂ヨリ乗船、日州細島ニ着シ、是ヨリ陸行、本日福山〔給良郡〕ニ着シタリ、依テ親族ノ者出張列レ帰リ謹慎セシムヘキ旨ヲ達セラレタリ、而シテ寛大ノ　尊旨ヲ以テ処刑ノ沙汰ニハ及ハレサリキ、斯ク寛大ノ処分ナルハ、暴徒ニ左袒セシト雖トモ、巨魁ノ曹ニ教唆セラレ、一時方向ヲ過リタルヲ憫察セラレ、出格ノ寛典ニ出タル者ナリ、

六九　御親書（不時勢揃調練ノ褒詞）

家老中へ

昨日不時致勢揃候処速ニ相揃、其上調練之次第モ混雑無之、畢竟軍役方并物主等之職掌ハ勿論、一同平日之

嗜別テ満足之事ニ候、　三郎様御留守中ニモ候得ハ、
於我等モ昼夜令心痛候、方今之世態猶又銘々尽其職掌、
一同文武相励候様有之度存候事、
五月十六日

七〇〔徳川慶喜松平慶永之儀箇条詔書別紙〕

〔朱〕「五月十八日」

一橋〔徳川慶喜〕刑部卿・越前〔松平慶永〕々中将等之儀、御箇条書之通被
仰出候処、去十五日大樹年頃ニ付、田安大納言〔慶頼〕後見願
之通差許、越前々中将国政可関係被申付候由、　言上
有之、就テハ後見之儀強テハ被
仰出兼候得共、何分内外不容易形勢ニ候間、深被遊
御案痛、以一橋被登用候方可然
思召候、但名目之処可為補弼欤、且越前大老職之事、
為家門之間流例之辺ニテハ可差支候得共、先件非常之
所置ヲ以テ可被申付
思召候、但是以差支候ハヽ、政事惣裁職ト称候テモ可
然
思召候、
但越前々中将儀、
思召之通相成候上ハ、方今内外危迫之時節ニ付、
今年秋中上京有之、国是之議論被
聞食度候、且同人弥上京之節ハ、引続三郎モ可有
上京候、其辺相含可有周旋様ニト
思召候事、

七一〔島津久光出府可周旋詔書〕

五月十八日承知

方今ノ時勢不堪傍観、嶋津家一同挙三国抛身命勤
王攘夷ノ旨趣言上、不斜　御満足　思召候、今般関東江
勅使被指向、偏ニ　君臣御合体、国内一致攘夷之成功
可有之、以深重之　思召被　仰下候ニ付、
勅使ニ引続三郎出府可周旋、去ル十二日以書取被
仰付候処、越前々中将国政関係之儀、於関東取計候段
叡意符合　御安心　思召候、右ニ付猶又別紙之通
御沙汰候間、
叡慮之旨徹底候様、尽力可有之深御依頼　思召候、右
ノ段内々
御沙汰候事、

〔中山〕忠能

〔正親町三条〕實愛
〔飛鳥井〕雅典
〔久世〕通熙
〔野宮〕定功
〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

七二　久世大和守上京停止之趣近衛家報知書

文久二年五月十八日　近衛忠房卿ヨリ御通知ノ趣ニ、久世大和守〔広周、老中、関宿藩主〕上京ヲ停メラル、云々、今朝三條大納言〔正親町三条実愛〕来邸アリテ、六月四日久世江戸出立ノ趣ナレハ、上京ノ上

朝意達セラレシ後

勅使差立ラレ、国父公〔島津久光〕ニモ御下向アリテ、幕議速ニ決定ノ御促等尽力ノ場コソ然ルヘカラントノ御旨ナリシカハ、国父公ニハ関東ノ情実御通貫ノ訳モアラセラレシ故、御答ニハ、久世上洛恐ラクハ速ナルベカラス、又朝議一体御不断ナルカ如シ、今日ノ姿ナルニ於テハ、皇威挽回ノ期何レノ日ニアルモ知ルヘカラス、シカノミナラス機会ヲ失シ、嚙臍ノ悔及フヘカラサルニ陥ルヤ必セリ、此尽多日滞京スルニ於テハ、幾多ノ藩士元来気速キ輩多キカ故、如何ナル挙動ニ立到ランモ測リ難シ、藩邸モ〔錦邸ヲ云〕狭隘ニシテ、多勢維持ノ法モ立チ兼タリ、現今ノ姿ニテ永ク滞京ヲ命セラル、ニ於テハ、一時知恩院ヲ宿陣ニ貸与セラレンコトヲ願ハセラル、旨御答書、及ヒ中山〔尚之助〕ヲ以テ近衛家又ハ両議奏ヘ献言セラレシニ、同日晩景左ノ御書翰ヲ贈ラレタリ、

尚以用繁取紛乱書、専推覧可給候也、

昨鳥、中山忠左衛門江申置候久世和州上京御差止之義、今朝モ三條大納言入来ニテ、段々之咄共一向御睦敷由故、迚モ此上被申立候共睦ケ敷存候間、来月四日和州上洛御沙汰共伺候テ、当地出立之折柄引続勅使被差立、其元ニモ下向ニ不相成ハ、甚役人衆之決談モ甚睦ケ敷候間、和州上洛之上、尚又出立之節其元ニモ下向ト治定被致候様存候、迚モ幾度被申立候共、如何ト於忠房心配候、唯今忠左衛門来候間可申聞候ヘ共、先以書中申入候間、早々御報御頼申入候也、

五月十八日　　忠房

三郎とのへ

乱書御免

〔写上書にて校訂〕

此際
朝廷ニハ、積年幕政ノ横暴ニ懲ラセラレ、優々不断空シク日月ヲ耗セラレシ故、　国父公ハ斯マテ改革ノ端緒ヲ開カレタルニ、如此因循遅緩決行ナキニ於テハ、幕府弥奸計ヲ逞フスルニ立到ラント、頗憂慮セラレ、御膝辺ノ輩ヲ以テ、近衛殿其他議伝両奏ニ向テ頻責セラレシカハ、漸クニシテ五月廿日ヲ以テ、左ノ如ク発表セラレタリ、

方今之時勢不堪傍観、島津家一同挙三国抛身命、勤王攘夷之旨趣言上、不斜
御満足
思食候、今般関東江
勅使被指向、偏ニ
君臣御合体、国内一致攘夷之成功可有之、以深重之
思食被仰下候ニ付、
勅使引続三郎出府可周旋、去ル十二日以書取被
仰付置候処、越前々中将国政関係之儀、於関東取計
候段
叡念符合
御安心
思召候、猶又別紙之通　御沙汰候間、
叡慮之旨徹底尽力可有之頼
思召候、右之段内々　御沙汰候事、

此ノ御書ニ左ノ別紙ヲ添ヘラレタリ、

一橋刑部卿・越前々中将等之儀、御箇条之通被
仰出候処、去ル十五日大樹年頃ニ付、田安大納言後見願之通差許、越前々中将国政可関係被申付候由言上有之、就テハ後見之儀強テハ被　仰付兼候得共、何分内外不容易形勢ニ候間、深被遊
御案痛、以一橋被登用候方可然
思召候、但名目之処可為輔弼欤、越前大老職之事、為家門之間流例之辺ニハ可差支候得共、先件非常之処置ヲ以テ可被申付
思召候、但是以差支候ハヽ、政事総裁職ト称候テモ可然
思召候、

但越前々中将儀

思召之通相成候上ハ、方今内外危迫之時節ニ付、今年秋中上京有之、国是之議論被
聞召上候、且同人弥上京之節ハ、引続三郎ニモ

可有上京候、其辺相含可有周旋様ニト
思召候事、
又同シク御添書ニ
今度
勅使被差向候、
叡慮偏ニ国中一致之
御趣意ニ有之候間、麁暴之儀出来候テハ、深被悩
宸襟候事ニ候、元来是迄被屈
叡慮候モ、全国中平穏ヲ被
思召候御事ニ候間、末々ニ到迄、右之
御趣意不違様可申付候事、
右之御書議奏中山大納言忠能卿・正親町三條大納言
實愛卿・飛鳥井侍従宰相雅典卿・久世三位道熙卿・
伝奏野々宮宰相中将定功卿ノ連名ヲ以テ達セラレタ
リ、
此ノ如ク発表セラル、迄ノ間、
朝議悠々、且御不断ナルカ故、　国父公ハ御苦辛一方
ナラス、御膝辺ノ輩ヲ以テ数回御建議ノ趣アリテ、漸
クニシテ本日発表セラル、ニ至レリトソ（本日迄ハ勅使発京ノ期日ハ達セラレサリシトソ）

七三〔五月十八日近衛忠房書翰〕

〆（外封）

乱書推覧

島津三郎とのへ　　忠房

内用早々

〔朱〕「戊五月十八日」

〆（内封）

島津三郎とのへ　　忠房

早々内用

尚以用繁取紛乱書、専推覧可給候也、
昨烏、中山忠左衛門江申置候久世和州上京御差止メ之
義、今朝モ三條大納言入来ニテ、段々之咄共一向御睦
ケ敷由故、迚モ此上被申立候共睦ケ敷存候間、来月四
日和州上洛　御沙汰共伺候テ、当地出立之折柄、引続
勅使被差立、其元ニモ下向ニ不相成ハ、甚役人衆之決
談モ甚睦ケ敷候間、和州上洛之上、尚又出立之節、其
元ニモ下向ト治定被致候様存候、迚モ幾度被申立候共
如何ト於忠房心配候、唯今忠左衛門来候間可申聞候へ

共、先以書中申入候間、早々御報御頼申入候也、

五月十八日　　忠房

三郎とのへ

乱書御免　〔番号七二に同文あり〕

七四〔五月十九日近衛忠房書翰〕

尚以頭痛差発困リ入、乍例尚更乱毫仁恕頼入候也、

昨夕忠左衛門来、其砌久世宰相入来ニテ御書付被渡候、仍直様忠左衛門江渡置候事ニテ、役人衆論判実以何共平常之心得、非常了簡無之困リ入候、仍忠左衛門ニモ段々申立候趣ニテ、久世和州仮令半途ニ出ル共引戻シ、先上洛ニ不及旨被　仰出候様、尤非常之事ナレハ、尚更若州ニ内々打合セ抔ハ決シテ不宜趣、巨細ニ申遣シ候処、正親町三條ヨリ右様之返翰到来、迚モ中山家江申入候共、取計ハ如何可在哉ト懸念仕候、一向忠左衛門・治郎・市蔵等三人之内誰成共、中山家并岩倉等へ来入ニテ、尚亦手厚ク及論談候テハ如何哉、迚モ夫ニテモ甚懸念ニ候間、何卒此上ハ久世上京之上、御沙汰共相伺、出立之節ニ至リ、　勅使其元ニモ出立ニ可相成、勘考之方ニ被定無テハ不相成哉ニ被存候也、

五月十九朝　　忠房

島津三郎とのへ

内密々　〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

七五〔五月十九日中山忠能書翰〕

拝承仕候、御書之趣御尤ニ承存候、何分此比之所望ハ、各武家へ代所司申通シ候半テハ、不奉行事共ニ候間、両役申談ニ相成候、其内ニハ色々有之、実ハ昨日ノ論決下官等ニハ十分之精力ヲ尽シ候事ニ候、流例之仕来トハ余程ハツレ候取計ニ候ヘトモ、忠能等咎ヲ受候義ハ少モ不恐候間、精々取計候事ニテ、実ニ此上ハ当惑、所詮不行哉ニ存候、併三條トモ得ト可談候、嶋津之誠忠少分ナリトモ可扶勤心中ニテ、色々尽誠力候ヘトモ、実ニ六ケ敷場合ニ及、苦心之至ニ候、且今朝堀入来之趣、書付ニ相見候ヘトモ、其節ハ久世可被差止トノ事ハ一向不申居候、委細ハ明朝可及言上候、少々痛所増長大ニ苦居、呈粗札偏御宥免奉希上候也、

五月十九日

忠能

左大将殿

家司中

(外封)寺院借渡候事ニ付テハ、先日已来京師之意味自岩倉得ト申入候由ニ承居候、嶋家精勤ハ実ニ感佩之至ニ候ヘトモ、朝廷ニテモ何レ難被行義ヲ申候テハ、イツ迄モ埒明不申ト存候、宜申上頼候也、〔同上書にて校訂〕

七六　久光公関東御下向布告（舊邦秘録鈔）

当月中旬、大原(重徳)三位様関東へ為
勅使御出立ニ付、同日
和泉様ニモ当所　御発駕可被遊　御出府旨、被遊
御承知、今日　御沙汰被為　在候条、可承向ヘ可被申
渡候、

但御日限ハ、追テ　御沙汰可被為　在候、

五月　御家老座

右ノ通被仰渡候条、此段申達候也、

五月十九日　谷川次郎(久武)右衛門

七七　〔関東勅使差向ニツキ詔書〕

今度関東江　勅使被差向候儀ハ、方今之時勢深被悩
叡慮、偏　公武御一和、国内一致攘夷之成功可有之、
以深重之
思召、別紙之通被決三事、速其一群議之所帰可有奉行
被
仰遣候、天下ノ重事ニ候間、
叡旨徹底候様周旋之儀、内々松平大膳大夫江被
仰含候、於島津和泉モ出府大膳大夫申合、先件御趣意
相心得、為　公武宜有配慮頼　思召候事、
別紙之通被為在御沙汰候事、

忠能
實愛
雅典
通熙
定功

〔忠義公史料影写（東京大学所蔵）にて校訂〕

七八　〔五月二十日近衛忠房書翰〕

七八ノ一　口述

中左衛門昨日持参ノ御書面、早速議奏衆ヘ差出置候処、
尚篤ト熟覧可仕トノ由申来候、其後愚拙所存、議奏第

一中山家へ申立候処、右之通中山家ヨリ返翰到来候、仍入覧候事、

五月廿日辰刻計認　　忠房

嶋津三郎とのへ

内啓

七八ノ二
上封

嶋津三郎殿　　忠房

内要用

実々在体申入候、御密覧頼入候、入覧後投火〳〵頼入存候也、他見無用〳〵、

元来外夷一件、不容易義ハ申迄モ無コト、其上幕府ヨリ去ル午年以来、　天朝尊奉之道理無之、唯以権威奉軽蔑、実以テ一朝一夕之次第ニ不在、深被悩　玉体、種々ト御配慮已被遊、何共有志之輩ハ悲歎ニ迫リ候次第、然ルニ去申年ヨリ以来、諸浪人トモ蜂起シテ、幕役人トモ度々之損亡、　夫ニ不心附、　兎角　権威已相震ヒ、正論難相立、実以徳川家長久モ無覚束、唯々此上ハ夫々大国之大名国家之為抛身命、正論不相立ハ後后如何ト懸念ニ存候処、旧臘尚之介（中山文善）当春市蔵（天久保利通）被差登、巨細ニ忠誠之心底被申越、実ニ感佩不過之候事、乍去前左府ニハ隠居、殊ニ落飾迄被　仰付候身体、且参　内モ被止置候義、於愚拙ハ若年且短才未熟之仕合、其上天子玉座ニ奉近候義ハ、容易ニ難相成次第、甚残懐不一方、依正親町三條内覧ニ及候義ニテ、前左府愚拙ニハ、今度其モト建白之条々、当然之良策ト存込候、乍去過日来御承知之通、議奏衆一致六ケ敷、其上ニ久我（建通）内大臣・久世（通熙）宰相・千種（有文）・岩倉（具視）両中将各姦佞之人物、種々以偽恐多モ主上ヲ奉欺、夫ヨリシテ主上ニモ国忠之者ト思食被込、且又中山・三條等ヲモ誠忠ト被存込、　実以甚々悲歎無際涯、　天朝之有様遺恨ニ存候、夫故当節前左府在職ニテモ痛心已ニテ、是ト申功ハ無之哉ト、実ニ御悲歎之御事、且又和州上洛之上御沙汰共伺、　夫ヨリ出立ト申節、　勅使其モトニモ出立ニ及候様、於半途行逢之節引戻シ候様トノ事ハ、余リ慕（暴カ）ニ相当、如何之事、迚モ夫ハ六ケ敷、何卒篤ト勘弁ヲ加ヘ、来月十日前後迄滞在之侭在度トノ評定之由、最早幾度被申立候共強上ニ相当、却テ如何ト被存候、智恩院之義ハ、是ハ於此方ハ非常ト存候節ニハ、何トカ勘考可有哉ニ存候ヘ共、是迚モ甚六ケ敷次第之由、何卒

此上ハ表向武伝へ願立候カ、亦ハ所司代へ申込、智恩院借受候カ、両様之内ナラテハ埒不明ト存候、和州モ引戻シニ不相成上京ニテハ、其元滞在ナクテハ、何共朝廷御案申上候事篤ト御深考ニテ、後刻忠左衛門入来ノ砌御報頼入候也、

五月廿日認　　左大将

島津三郎とのへ
内用

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

七九〔岩倉具視書翰〕

昨夜ハ御苦労、先別紙之通御治定候間、為心得早々申入、此外ハ明朝面会何モ可申入存候也、

五　廿

〔伊地知貞馨旧名〕
堀小太郎とのへ　　〔岩倉具視〕富妍

八〇〔近衛殿密翰〕

文久二年五月廿日、近衛家ヨリ贈ラレタル御内書左ノ如シ、

当時

朝廷ニモ異議紛紜ノ形況、此御書意ニ就テ知ルニ足レリ、

〔元来外夷一件…、番号七八と同文により削除〕

八一〔五月二十一日近衛忠房書翰〕

外封　　忠房

嶋津三郎とのへ
内々

〔朱カ〕
「文久二年壬戌五月」

内封　　忠房

嶋津三郎とのへ
内用

尚以御道中壮健之様祈入候、当秋上洛待入候、尚於東武周旋慥ニ頼入候事、

弥御安康珍重候、扨昨夜野宮〔定功〕宰相入来ニテ、別段御書付不被為在、御使ノ演舌ニテ被申渡候ハ、明後廿二日勅使弥発遣御治定、就テハ三郎ニモ引続キ出立ニ及候様、且又久世和州ニモ東海道通行之義、行逢候節穏便ニ可仕様、凡テ途中質素ニ可仕様被　仰出候事、

右被　申渡候間申入候、御請書在之候様存候、且亦昨夕忠左衛門江渡シ置候両卿之書状御返却頼入候事、

五月廿一日　　忠房

嶋津三郎とのへ
要事

〔同上書にて校訂〕

八二　近衛殿内書

文久二年五月廿一日近衛殿ヨリ御内書ヲ以テノ趣ハ、

昨夜野々宮宰相中将入来ニテ、内話ニ明後二十二日関東ヘ

勅使御差立ノ御発シ相定リタリ、因テ差副御下向（御下向之儀云々ハ国父公御差副御下向ヲ云フ）之儀モ達セラル（朱）「ナル」ヘシ、久世和州東海道通行之由ナレハ、仮令ヒ行逢ニナリテモ穏ニ致スヘシ、スベテ途中之事質素タルヘシトノ趣ナリシトソ、御承知ノ御書左ノ如シ、

今度関東江

勅使被差向候儀、方今之時勢深被悩

叡慮、偏ニ　公武御一和国内一致、攘夷之成功可有之、以深重之

思召、別紙之通被決三事、速ニ其一群議之所帰可有奉行被

仰遣候、天下之重事ニ候間、

〔頭註朱〕「島津三郎モ出府大膳大夫申合セ云々」

叡慮徹底（旨カ）候様周旋之儀、内々松平大膳大夫江被

仰含候、於島津三郎モ出府大膳大夫（長州侯）申合、先度之御趣意相心得、為　公武宜可有配慮頼

思食候事、

〔忠義公史料影写（東京大学所蔵）にて校訂〕

右御書中三事件トハ、即チ左ノ如シ、

第一　大樹早ク諸大名ヲ率ヒ上洛アツテ、

朝廷ニ於テ、相共ニ国家之治平ヲ計議シ、万人之疑ヲ散セシメ、

皇国一和之正気トナシ、速ニ蛮夷ノ患難ヲ攘ヒ、

上ハ

祖宗之　神慮ヲ慰メ、下ハ義臣ノ帰嚮ニ従ヒ、万民ヲ化育シ、天下ヲ泰山之安ニ比セラレ度事、

第二　豊臣ノ故事ニヨリ、沿海五ケ国ノ大藩ヲ以テ五大老トシ、国政ヲ諮決シ、夷戎ヲ防禦スルノ所置ヲナサシメハ、環海之武備堅固確然トシテ、必ス夷戎ヲ掃攘スルノ功アラント

思召候事、

第三　一橋刑部卿ヲ後見トシ、越前々中将ヲ大老トシテ、幕府ヲ扶ケ政事ヲ計ラシメハ、戎虜ノ慢ヲ

受ケスシテ衆人ノ望ニ協フヘクト
思食候事、
右三ケ条ノ中ニ就テ、第三ケ条目ノ事分テ　御尽力アラセラレ、幕府異議申立テサル様ニト之趣、御沙汰之旨　御承知アリタリトソ、而シテ議奏衆ヨリ御達書左之如シ、
浪士鎮静之儀、島津和泉江被
仰付置候処、同人出府被
仰付候ニ付、浮浪取押方之儀難行届、深　御不安心被悩
宸襟候、万一京師及動揺候テハ、諸国可蜂起哉ト深被悩
叡慮候、就テハ修理大夫被　召登度候得共、差支モ有之候ハヽ、島津石見(久徳)率人数、上京ニハ有之候得共、猶又今一人嶋津圖書(久治)(朱付箋)(太守公御二弟宮城一万五千七百五十二石余ヲ領ス)(本書大ニ可書)将士ヲ率ヒ神速入洛有之、被安
叡慮候様可有尽力、早々申達上着之様被遊度
思食候事、
(忠義公史料影写(東京大学所蔵)にて校訂)
右之趣御承知、至急一隊ノ人数ヲ呼ヒ、御東下中非常之御警衛　御依頼アリシカトモ、在京ノ人員多数ナルカ故、
禁闕之御守護差向キ不足ニアラス、又諸浪士カ仮令ヒ暴発ストモ、何程ノ事カアルヘキ、此ノ上多数上京シテハ、却テ事ヲ惹キ起スノ患アラントノ
尊慮ニテ、其旨被　仰述、若モ不虞ノ事起ルニ当テモ、現今在京ノ人数ニテ少シモ差支無之　御安心アラセラルヘクトノ趣言上セラレタリトナム(此時警衛ノ人員上下千五百人ニ余レリ、関東従ス五百人トシテモ一千人余在京ナリ)

八三　久光公関東御下向御発途

八三ノ一
文久二年五月廿二日、　国父公ハ辰ノ上刻錦街ノ藩邸御発駕、
勅使大原左衛門督重徳卿ト同日　御発京、関東ヘ御下向アラセラレタリ、当夜ハ大津駅ニ御宿泊ナリ、
大原殿ヘハ御警衛ノ為メ、我藩士十名ヲ従セシメラレタリ(吉井仁左衛門友実・野津七左衛門鎮雄・山内一郎・鈴木昌之助・仁礼平助・松岡善助・赤塚源六・上床八十右衛門・野津七次・小川小次郎等ノ十名ナリ)
当日ハ御通街拝観ノ者群ヲナシ、尺寸ノ隙地モナカリシト、市街ノ説ニ正副両
勅使関東ヘ御下向、殊ニ薩州ノ老公副使タルハ前代未聞ノ盛事ニシテ、日ナラス

皇威燿クノ初メナリト、洛中ノ貴賤歓喜ノ声喧シキニ至レリトソ、従駕ノ輩ハ御上洛ノ人員ニ異ナルコトナシ、

此日近衛殿及ヒ両三條又ハ岩倉殿ヨリ、御使者又ハ御書翰ヲ以テ御発駕ヲ祝セラレ、或ハ関東ニ於テ御尽力ヲ依頼セラレタリトソ、

八三ノ二　五月廿二日

上意之趣

近来御政事向姑息ニ流、事虚飾ヲ取繕ヒ候ヨリ、士風日々軽薄ヲ増、

御当家之御家風取失ヒ、以之外之儀、殊ニ外国御交際之上ハ、別テ御兵備充実ニ無之候テハ不相成、就テハ時宜ニ応シ候御変革被取行、御簡易之御制度、質直之士風ニ復古致シ、御武威相輝候様被遊思召候間、一同厚相心得可励忠勤候、

申渡之趣

只今

上意之趣誠奉恐入、難有御儀ニ候、何レモ厚ク相心得思召之行届候様一途ニ心掛、抛身命可被抽忠勤候、猶追々被仰出候品モ可有之候間、心得違無之様可被致候、

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

八三ノ三　尚々、昨烏折角帯刀ヲ以贈物喜悦仕候、其砌愚拙櫻木丁へ参上中面会ニ不能、残心ニ候事、

弥勇健珍重候、先達来長ク滞在御苦労ニ存候、先々今朝ハ発駕令安心候、石見義上京之由ニ承知仕、定テ先達来段々之次第心得候、被申含候事ニハ候へ共、昨日来甚懸念起リ候義ハ、石見事尤被申含候故、何カ承知仕候事ニハ候得共、和州上洛之上之処、甚懸念ニ存候間、先達来

朝廷御模様辺、議　奏衆之工合現在篤ト心得居候人残リ居候ヘハ、大ニ安心仕候間、何卒帯刀・忠左衛門・小太郎・市蔵右四人之内一人御残シ置ニ候ヘハ、大ニ〳〵安心ニ存候、最早今朝各出立之事故、困リ之辺ハ十分ニ察シ入候得共、トフモ能々愚案候処、一人ハ残リ居候方ナラテハ甚不安心ニ存候、何卒一人之処引戻シ滞在被申付候様仕度存候、呉々発足後之段気毒ニ存候得共、宜勘弁御頼申入度存候事、

五月廿二日

取紛乱書、其上書損モ可在之、推覧頼入候也、

忠房

乱書推覧

嶋津三郎とのへ

内々急用

〔同上書にて校訂〕

八四　鵜木上田特別注意達書

京都詰見聞役

鵜木孫兵衛

上田郡六

右ハ此節

三郎様御出立、就テハ当時柄不容易砌ニ付、

御跡之儀大事ニ

思召候間、何篇心懸出精相勤候様可申達旨

御沙汰候間、

御趣意之程奉汲受、致精勤候様可相達、帯刀殿ヨリ被

仰渡趣承知仕候、即右両人江相達置申候、此段御方迄

御返答候、以上、

在京

五月廿三日

本田彌右衛門

大久保一蔵殿

〔本田親雄書翰（大久保利謙氏所蔵）にて校訂〕

八五　岩倉殿ヨリ三郎様へ御文箱云々照会

岩倉殿ヨリ被為召候付、今朝

参殿仕候処、御文箱壱ツ被相渡、

御所ニテ御承知之御趣モ被為在候間、被差遣候付、

三郎様御中途江早々差越候様御頼之段、御直ニ承知仕

候、外ニ大原殿御荷物紙包壱ツ御取残ニ付、被遣度候

間、便宜ヲ以御届申上候様、岩倉殿江兼テ御頼入相成

候間、同断差遣呉候様、是又御直ニ承知仕候、右二品

差廻申候間、着次第御披露之儀共宜取計、此段及掛合

候、以上、

五月廿四日

京都　本田彌右衛門

御中途

中山中左衛門殿

大久保一蔵殿

〔同上書にて校訂〕

八六　〔大原重徳久光ニ往復書彙〕

〔第一巻番号五六七ノ一二と同文により削除〕

八七　岩下方平島津石見カ病気危篤ヲ大久保ニ報ス

島津石見〔久静〕病気極々大切ニ相成候ニ付テハ、右役人共（石見家来重立タル輩）并旅用達丸田彌七左衛門（城下士）ヨリ相談ニテ、我々共并藤井良節〔正徳〕致下伏呉候様、諸事吟味ヲ以差図イタシ可申旨承趣有之、我々共ニモ直様罷下、且京都詰見聞役鵜木孫兵衛ニモ致下伏万事相談之上、都之城方へ申達候儀ニテ、藤井儀ハ跡京都之御用筋不時到来之節罷居候様申談、於伏見御仮屋守旅宿へ、右丸田并役人北郷平左衛門・用人北郷清兵衛召呼、当分之御趣意且

三郎様御見込之筋合申聞、別紙之通申上越候間、何分疾速御返事相達候様御取計可被給候、此旨貴公方迄御掛合申進候間、帯刀殿江御伺之上、何分早々御決着有御座度奉存候、以上、

五月廿六日　　本田彌右衛門〔親雄〕
　　岩下佐次右衛門〔方平〕

堀　小　太　郎殿
中山仲左衛門殿
大久保一蔵殿

追テ、本文別紙之儀ハ帯刀殿御方江向差出置申候、〔岩下・本田書翰（大久保利謙氏所蔵）にて校訂〕

八八　〔田中綏猷父子被誅殺顚末〕

暴徒ノ中ニ中山大納言〔忠能〕殿御内ノ侍田中河内〔綏猷〕之介、同人長男左馬〔嘉猷〕之介（本年十四歳）及ヒ青木頼母、京都ノ侍千葉郁之介ノ四名ハ説諭承服ノ後、奈良原ナル者総人員ト偕ニ、京師錦街ノ藩邸ニ引致シ謹慎セシメ、而シテ我カ藩士ハ日ナラスシテ下麗命セラレタリ、〔朱〕然ルニ〔前記参照〕田中父子・青木・千葉ノ四名モ中山殿ヨリ御倚頼ノ趣アリテ、偕ニ下麗ヲ命セラレタリ、佐土原・高鍋両藩士ハ各其藩主ニ引キ渡サレ、而シテ下麗ヲ命セラレタル人員ハ大坂ヨリ乗船、日向ニ向テ発航〔朱付箋〕セリ「本書大ニ昔ク」（此ノ大船ハ、日州赤江港ニ在テ大坂藩庁ノ運送船ニテ、諸県郡内ノ米穀、其他産物ヲ大坂ヘ廻漕ノ用船ナリ、従来同港ニ数艘ノ大小船ヲ置キ、産物廻漕ノ弁ヲ誤リ、赤江ノ地ニ一局ヲ設ケ、物品仮納ノ倉蔵アリ、之ヲ赤江囲場ト称ヘ吏員在勤セリ）而シテ右ノ曹護送ノ吏ニハ、澁谷彦助〔国安〕・蓑田新平〔ママ〕等ヲ附セラレタリ、然シテ田中父子・青木・千葉ノ四名ハ、日州海ニ於テ我カ藩士（寺田屋ニ於テ、奈良原カ説諭ニ仍テ謝罪シタル曹ヲ云フ）為メニ誅殺セラレタリ、其ノ顚末ヲ聞クニ、初メ大坂ニ於テ田中等ニ欺瞞セラレ、国憲ヲ犯シ、不忠ノ名ヲ負ヒタルヲ遺憾トシ、忿懣ニ堪ス、遂ニ斬殺

シタリトナン、田中ナル者ハ暴動ノ主謀者ニシテ、中山殿御父子密勅ヲ奉セラレシ等、種々ノ説ヲ以テ偽曚セシヲ、我カ藩ノ暴徒等ハ、真ニ朝意ニ出タル者ト信シタリシトナン、然ルニ寺田屋ノ始末ニ及、後チニ田中等ト両橋口・有馬・柴山ノ輩カ詐謀ナリシヲ覚知シ、忿懣ニ堪ヘス誅殺シタリシト、〔吉田市右衛門・柴山竜五郎・永山万齋等数名カ斬殺シタリト云フ〕〔本書大ニ書ク〕〔朱付箋〕是枝万助而シテ後田中カ行李ヲ検査セシニ、錦旗類似ノ者モアリ、或ハ中山忠光朝臣ノ書翰或同志盟結ノ連判書類モアリシトナン、〔頭註朱〕「柴山景綱紀事参証」

八九　寺田屋ニ於テ伏誅人名及ヒ年齢

本藩士ニシテ暴動ノ人員中伏誅ノ輩ハ、悉ク壮年ニシテ、主謀者ニ教唆セラレタル者ナリ、其年齢左ノ如シ、

二十五歳　柴山愛次郎〔道隆〕

父ヲ圓貞ト云フ、医ヲ業トス、

三十歳　橋口傳蔵〔兼備〕

父ヲ典三次ト云フ、

二十三歳　橋口壮助〔隷三〕

父ヲ彦次ト云フ、

二十五歳　弟子丸龍助〔方行〕

父ヲ高城七郎ト云フ、

三十八歳　有馬新七〔正義〕

父ヲ四郎兵衛ト云フ、旧ト伊集院郷ノ士ナリ、

二十三歳　西田直五郎〔正基〕

父ヲ彌兵衛〔ママ〕ト云フ、

歳　森山新五左衛門〔永色〕

父ヲ新蔵ト云フ、

三十二歳　田中堅助〔盛明〕〔謙〕

父ヲ池田勘助ト云フ、

以上八人説諭使ノ手ニ罹リテ誅セラレタリ、此人員ノ中、柴山・両橋口ハ江戸邸ヨリ脱走シ、有馬・田中・西田・弟子丸四名ハ従駕警衛ノ人員ナリ、森山ハ鹿兒島ヨリ脱走シタリ、又河野四郎左衛門・永山萬齋・木藤市助ノ三名ハ江戸邸在勤中ナリシカ、両橋口等ト偕ニ脱走シテ大坂ニ出、暴挙連中ニ加リタル者ナリ、又町田民部〔久成〕・岩下佐次右衛門カ率ヒタル警衛人員ノ中、鈴木武五郎・山口三齊ノ二名モ同シク暴徒ニ加ハリタリ、其他ノ輩ハ悉ク従駕警衛ノ員ナリ、

九〇　島津石見兵ヲ率テ上京ス

文久二年五月〔ママ〕日島津石見二百余名ノ手勢ヲ率ヒテ上着ス、則チ

輦下警衛ノ諸事ヲ命セラレタリ（島津ハ石見、航海中ヨリ流行ノ痧疹ニ惑ノ京着ノ後数日間臥褥、国父公ヘ拝謁スルコト能ハス、御東下御発駕ノ前日拝謁セント入谷セシニ、再惑シ、遂ニ危篤ノ症ニ変シ、後数日ニシテ死ンタリ、○同人ハ　国父公御嫡女ノ夫ナリ、本年二十九歳）

九一　中島健彦詠歌

中島健彦西田村ニ居住、父ヲ喜右衛門ト云フ、国学ヲ好ミ、和歌ヲ能クス、健彦モ又和歌ヲ好ム、丁丑九月廿五〔ママ〕日城山ニ戦死セシトモ、或ハ遁レテ行ク処ヲ知ラストモ云フ、因テ官軍大ニ捜索ス、其如何ンヲ知ルニ由ナシ、久光公初メテ上洛セラレシ時勅ヲ奉シ、大原公ト関東ニ下向アラセラレシ時、中島ハ中小姓役ヲ以テ従駕シタリ、

雲の上に立登るとは夢更におもひもかけんけふのことほき

都をは千度百度かえり見て君はいかにと云ハぬ日そなし

九二　〔久世廣周上京停止之趣近衛家報知書〕

戊五月

添書〕

今度　勅使被差向候、

叡慮偏ニ国中一致之御趣意ニ有之候間、麁暴之儀出来候テハ、深被悩

宸襟候事ニ候、元来是迄被屈

叡慮モ、全ク国中平穏ヲ厚被

思召候御事ニ候間、末々ニ到迄、右

御趣意不違様厚可申含候事、（島津忠承氏蔵本にて校訂）

九三　〔将軍上洛ニ関スル届書〕

九三ノ一

一筆令啓達候、近年之内御上洛可被遊ト被　仰出候、尤御頃合之義ハ追テ可被　仰進候得共、先此段達

叡聞候様、伝奏衆江可被申入候、恐々謹言、

六月朔日　　老中四人連名

武伝両卿宛

九三ノ二

六月朔日

上意振

近来不容易時勢付、今度政事向格外ニ令変革候間、何

モ為国家厚相心得心付候儀ハ可申聞、猶年寄共へ可申談候、

今日

上意之趣誠以厚

思召、国家之御慶事無此上難有事ニ候、昇平殆三百年其流弊綱紀モ相弛ミ、武備御行届ニ相成兼候折柄、近来外国之事務頻ニ御差湊ヒニ相成、右御取扱振ヨリ自然天下之物情ニ差閣、終ニ奉悩叡慮候ニ至リ、深々恐入

思召候、素ハ

公武之御間柄、聊モ御隔意被為在候御事ニハ無之候得共、何トナク御情実

御通徹ニ相成兼候故ヨリ之儀ニ付、速ニ

御上洛万端

御直ニ被　仰上度トノ

思召ニテ、則御内々被　仰出ニ相成候、併

御上洛之儀ハ、寛永以来御廃典ニ相成候御式ニ候得共、万端之取調急速ニハ御行届ニ難相成候付、暫ク之処年寄共ヨリ御猶予相願候処、此度之儀ハ御旧例ニ不被為拘格外御省略、御行粧等万端御易簡ニ被　遊候

思召ニ付、急ニ取調次第ト被

仰出、甚御急

思召御事ニ候、万事御誠実ニ

思召、　御直ニ被　仰上、

御合体御熟算之上、従来之弊風御一洗、御武威被遊

御振張、

皇国ヲ世界第一等之強国ニ被遊候

御偉業ヲ被為　立、各

天朝之

宸襟ヲ奉安、下ハ万民ヲ安堵為致度トノ

思召ニ候得共、何レモ厚奉得其意、

御政事向御変革之筋等、各見込之儀モ可有之候得共、聊モ不憚忌諱、国家之御為第一ニ相心得、心底ヲ尽シ可被申上候、猶追々被

仰出候儀モ可有之候間、飽迄モ其意ヲ体シ、可被抽忠誠候也、

六月

〔同上書にて校訂〕

九四　〔六月三日近衛忠房書翰〕

緘（外封）

嶋津三郎とのへ　　忠房
極秘用

〔宋〕「戌六月三日」

緘（内封）

嶋津三郎とのへ　　忠房
極秘密独覧

尚々時気専保護〳〵祈入候事、

向暑ニ候、弥平安旅行尚承度候、抑去ル廿九日、鷹司御父子・前左府等還俗被仰出畏々存候、即時御請被仰上候、近々当職御沙汰之御時宜、此上ハ御沙汰次第、即時御請之思召ニ候、於忠房モ畏々候、其元御安心可被下候、但先月其元発駕後ハ、若州ヨリ親敷堂上ヘ殊外々々手厚取入別懇之由、風聞歎ケ敷存候、実以若州ヘ親敷堂上ニハ困リ〳〵入候、実ニ何カ岩倉抔アヤシキ事共ニ候、御洩シ御無用ト存候、九條殿下此頃之成行大立腹、是ハ全近衛家ヨリ開発之義顕然ニテ、甚遺恨疑惑顕然之由、若州ニモ大疑念之由、極内々有志之堂上ヨリ被洩候、且亦島田・長野其辺之邪物申合セ、事ニ寄レハ前左府・愚拙等、途中之折ヲ見合セ、以人狼藉不方之義ニ可及哉、甚種々風聞共承候、自然狼藉ニ出逢候節ハ、麁軽何之手覚無家臣召連、甚アヤウキ事心配ニ存候、乍去右辺論シ候ハ、必竟小人之論、仮令不意之狼藉ニ出逢候節ハ、甚迷惑夫限リ之事ト決心、且亦天下国家之御為ナレハ、元ヨリ抛身命候了簡ニテ、更々論スルニ不足候、尤々訳無邪論愚拙ヨリ御咄シ申入候義ハ、更々御洩シ御無用、全億心ニテ其元江勘考抔頼込候様ニ聞エ候テハ、全九條関白参内抔之節々、彦根・酒井之人夫召連警衛之義、実以億心不進退不外聞末代之恥辱、　朝威ニモ拘リ候義不面白事、且又薩州ヨリ人夫召連、堅固ナラテハ出兼候様ニ相聞エ候テハ、天下ヘ之恥辱不好候、尤々小人之論ト聊懸念不仕候ヘ共、余リ之風聞故、誠之御一笑迄ニ申入候、且又東武追々正議相立候様子、精々御周旋在度、祈々存居候、脇坂再役之由、是ハ定テ正論哉ト存候、尚御承知之事共ハ、速ニ〳〵御注進被下候ハヽ、安堵仕候事ニ候、要用已如此候也、

六月三日二更過認、乱書御免可被下候也、

忠房

嶋津三郎とのへ
極秘密々

〔同上書にて校訂〕

九五 〔大原重徳久光ニ往復書彙〕

〔第一巻番号五六七と同文により削除〕

九六 〔正親町三條實愛書翰〕

追日暑威相加候処、御平安珍重不斜奉存候、弥御旅中
モ御勇健、七日ニハ定テ御着府ト遠察仕候、関東動静
モ追々御都合之趣ニ承知仕、実ニ
皇国之大幸
天朝御洪福、是全御忠誠之令然処ニテ、誠以
御満足、於如小生モ雀躍之至ニ存候、猶段々御周還ヲ
以
神州安泰
聖上被安　宸衷、万民娯楽之御時節到来、偏ニ御尽力
奉仰候、於左金吾〔左衛門督大原重徳〕モ無事到着ト存候、道中以下万々御
扶助給候事安悦仕候、尚宜冀存候、於当地モ近衛前左
大臣殿ニモ去七日還俗、即日御礼参　内之処、直ニ関
白職御内意被
仰下、速ニ御請被成、当月下旬ニハ表向　宣下被奏、
慶賀候事ニテ、一同安喜之事ニ候、獅子王院〔朝彦親王〕宮ニモ六
日参　内被召於
御前至極　御懇話共被為在候テ、先年来聊御違却之義
共全御氷釈、於宮モ大安心被成事ニテ、於拙子モ大慶
仕候、右等之義共モ定テ御煩慮ト恐察仕候間、為御休
意申進候、姫路上京之義ニ付テモ彼是心配モ仕候処、〔酒井忠績〕
於同人ハ全正義之趣御探索、猶又於途中　勅使尊敬之
義共御示教被成下段、藤井良節〔正徳〕ヨリ委細伝承仕候テ、
大ニ安心仕候事々、厚御配慮感伏仕候事ニ候、藤井・
本田ニモ厚心懸無透間周旋有之候、於当地モ鎮静之段
御安心之様ト存候、右等之趣乍荒涼啓上仕度、呈愚札
候、猶又万々期後音候、恐惶頓首謹言、

三條大納言
實愛

六月十日

島津三郎殿
呈帳下

尚々何分ニモ御堅固ナラテハ難相成候儀、追々大暑
之候ニモ相成候間、折角御厳衛被成、御安健ニテ万
々御成功、吉左右　勅答被仰上候、期奉待候、拙筆
之上、乱錐不敬之段、御宥恕可被下候、以上、

壬戌六月十日巳剋〔内封〕認封

嶋津三郎殿　　三條大納言
内要　　〔同上書にて校訂〕

九七　〔六月十日中山忠能書翰〕

追テ、風土モ相違之義一入時候、御自愛専一存候、
中山忠左衛門始致面会候人々ヘモ、乍憚宜御伝声可
給候、何レモ苦労千万ニ存候、下官少々時病困居甚
候、乱書々損短札高免御推覧可給候也、

追日向暑候、先以
禁中御始弥御機嫌克被為渡候、貴公無御滞御旅行、去
七日御着府之儀ト珍重存候、段々御苦労之程令恐察候、
勅使ニモ定テ無難下着、何カト御世話之義ト存候、尚
又、宜々御頼申入置候、然ハ今日宜敷御便有之候由ニ
付、此間已来之次第荒々申入候、

一老中上京ハ弥御差止ニ相成候、
一酒井〔忠義、京都所司代、小浜藩主〕若州去月廿八日自大樹被召候由、今月四日言上、
同七日御暇参　内之処、因所労不参、九日発足モ所労
御理之旨ニ候、此仮辞役願候様ニ聞候、
　但当人御役不任之由、伝奏ヘ申来候、
一酒井〔忠績、姫路藩主〕雅楽頭帰国掛ケ京都在留、当地御取締被申付候由
申来候、併未京着無之候、

一御所附武家従来二人之処、今一人被申付候由申来候、
若ハ一人町奉行ヘ転役哉ニ候ヘトモ、差当リ趣意難分
候、
一長門〔毛利元徳、長州藩世子〕守尤在京、　御安心之御事ニ候、父朝臣ニモ此比
上京之旨ニ候、此朝臣之説ハ、第一大樹上洛ヲ被庶幾
候由ニ候、夫モ宜候ヘトモ、陽明ニテ御噂之通一橋・
越前弥在役之上ニ致度事ニ存候、右大膳大夫上京ニテ
被申立候トモ、精々其辺差含御掛合ニ可相成候、一・
越之処無御助才候ヘトモ、何卒御周旋ニテ、一日モ早
ク役付ニ相成候様致度候、何レモ奉為
皇国丹誠之義故、夫々之見込之辺モ失望ニ不相成候様、
御所置無之候テハ不叶事ニ候間、深致心痛候事ニ候、
一陽明前左府御出仕之義、実ハ度々被固辞心痛候処、再
三押テ之
御沙汰ニモ相成御勧メ申入、　漸七日御還俗、　同日於
御前関白以下　御内意申渡相済、先々一事ハ致安心候、
表向宣下ハ同日拝賀先例ニ候、装束類地紋モ替候ニ付、
今月下旬　宣下被相願候、日限ハ未定候ヘトモ、先々
御安心可給候、
一御家来本田〔親茂〕彌右衛門・藤井〔正徳〕良節面会、何カト申談、皆

々苦労之義ニ存候、
右等絶テ無益之義ニ候ヘトモ、申入置度如此候、暑之比苦労之段、毎々
御沙汰被為在候御事ニ候、追々御都合宜敷義共示給候事ト相待申候、呉々モ広大之御丹誠深以令感佩候、猶々宜御頼申入候也、

六月十日

嶋津三郎殿　　忠能

内用

〔同上書にて校訂〕

九八〔六月十日大原重徳手控書〕

十日晴　辰刻比出門登城、
先殿上ノ間ニテ宮ノ御言伝物目六〔録〕相渡シ、其次第如例之ヨシ、夫ヨリ大廊下上ノ休所対顔ヲ待、扨高家来リ御用談、対顔之砌、會津・越前出頭候テモ宜哉ト申候付コヽソト存、太平尤政事ニ預ル人ニハ誰ニテモ不苦ト相答候、扨帯刀之事、
勅使伝奏衆トモ被撤候故ニト申ニクソウニ申候間、一向不存候、伝奏衆モ左様之儀ナラハ、是ニ可抜置候、併我等左衛門督在官故、
主上ノ御前ヘモ帯剣之身分、大樹公ノ前撤シハ如何ニ候得共、御仕来リトアレハ其事ト申候、少時其方様ハ武官ノ御事御尤、其侭ニテ不苦ト申出候故、帯刀ナリニ対顔出頭候、一笑々々、先白書院対顔如常、御言伝物口上目六直ニ相渡拝戴丁寧也、猶帰京ニテ可申述、
自分礼了テ家人目見ヘ、引続人払、直ニ同所ニテ
勅詔申述、至極晴ケ間敷候得共、コヽカ一番大事ト誠心ヲ励シ、随分静ニ分ル様ニ申述タル心持ナリ、其口状ハ、先年以来外夷一条ニ付、兼テ被仰出候通神宮御代ニ被為対被為恐入御事故、時々
叡慮ニ不被為叶事ノミニテ御憂苦絶サセラレス候、何卒外夷拒絶ニ被為遊度被思召候ヘトモ、公武御一和ナラテハ相成兼候付、何卒
和宮ヲ御降配被為遊、御一和ヲ天下ニ表シ候得ハ、十年内ニハ必掃攘可致トノ願ニ付、天下ノ為トナラハト被思召御治定被遊、則去冬御入城被為在候故、十年内ニハ必掃攘可有ト被安
叡慮候御事ニ候、扨当春毛利大膳大夫〔慶徳〕公武之間ニ立入、為天下周旋イタシ候事有之、御満足ニテ往復ニ相成候処、豈料也、西国筋中国辺之浪士共蜂起イタシ、不容

易事共相唱、已ニ天下擾乱ニモ可至形勢ニ候処、島津三郎程好鎮静イタシ、先治リ候得共、元来外夷一件ヨリ之事ニ候ヘハ、外夷之事イカニモ方付不申テハ、実ニ治リタルト申者ニ無之候間、国難之増長イタシ候ヲ深歎キ被思召候、国難ハ天下ノ不幸、国難ナキハ天下ノ幸、天下之幸ハ則徳川家之幸ニテ、徳川幸ナレハ朝廷ノ御安心被遊候御事申迄モ無之候、右故深被回宸衷数々御廟算被為在候内、人選登庸之事最上ト被思召候故、則此趣被仰出候ト申テ、一紙ヲ懐中ヨリ出シ、大樹ヘ相渡シ候、大樹扞見イタシ載キ被納候様子故、一同江拝見可被為致ト申候得ハ、其侭會津ヘ被渡、會津請取扇ヲ開ケ可置様子之処、越前御台ヲト申候故宸筆ニテハ不被為在旨申候得共、勅詔故ニト申テ、三宝ヲ取寄、其上ニ乗セ、上段ニ置、下ヨリ各拝見、會津・越前・老中四人・若年寄等ニ候、其中ニ拝見了候ハヽ、又可申述事アリト申テ待候、一橋モ度々登城ニテ隔意無之、又越前モ日々登城ニテ政事相談イタシ候ト被申候中ニ拝見了、大樹公手元ヘ返却、其時ニケ様ニ被　仰出候事、

禁中ヨリ御勢ヒヲ以　仰ラルニテハ決テ不被為在、只々公武御一和、国内一致ナラデハ外夷掃攘モ不相成事故、重徳御実情ヲ被仰達候故、必心得違無之様、何分公武御一和国内一致ニシテ、外夷掃攘、天下太平ノ基源ヲ開カレ候様ニト思召候、且又一橋後見ノ事、頃日大樹公年頃ニテ田安大納言〔徳川慶頼〕被差免、間モナク又今日後見モ如何ニ候得ハ、名目之処輔弼タルベク、其実ハ後見政事御談合可有之候、又大老ハ家臣之事、越前ハ家柄故名目之処差支候ハヽ、政事総裁職ト称シ候テモ、是以其実ハ大老職ニテ政事可被取計事、右等之事徳川家二百余年ノ事、何卒中興ヲト思召サレ候故ニ　聖慮ヲ回サレ、一橋・越前之事ヲ被仰出候間、自然差支之儀候トモ、非常出格之儀ニテ登庸セラレ候事、速ニ御請ニ相成候様ニト云々、

右申述候得ハ、大樹公自口ヲ開段々之仰承リ、猶篤ト勘考イタシ、迹ヨリ御請可申上旨被申述候、夫ニテ一同退去、小子モ退キ候、

〔同上書にて校訂〕

九九　〔六月十二日大原重徳書翰〕

今日ハ快晴、暑サモ強候、愈御清康珍重存候、陳ハ過刻高家来臨、明日未刻為　御用談登城可致トノ事ニ候、

此段御心得迄ニ申入候、何ニテモ可相心得事モ候ハヽ、御示教可給候、此段申入候也、要用耳、不乙、

六月十二日

追テ申、昨日ハ中山御遣、何モ申承リ候、御返答催促之事、堀ニテ越〔松平慶永〕へ御申之事ハ如何哉、若哉其辺之移リニ候欤トモ存候、何分明日　御用談ト申儀、如何様之事哉ト存候、内々越公へ御問合被下候ハヽ、様子モ可相分哉、左候ハヽ、心組ニモ可相成ト只今存付候、不苦候ハヽ、明早朝ニテモ御問合給間敷哉、此段御頼申入候、越公屋敷何レ欤不存候ヘトモ、帰リカケニ立寄被呉候ハヽ、重畳ト存候、早々、以上、

嶋津三郎殿　　重徳　〔同上書にて校訂〕

一〇〇〔六月十三日大原重徳口上〕

口上

京都へ之文只今書了候故、別ニ書申上不申、委細使之人ニ御聞可被下候、以上、

六月十三日

嶋津三郎殿　　重徳　〔同上書にて校訂〕

一〇一〔六月十四日大原重徳返書〕

〔第一巻番号五六七と同文により削除〕

一〇二〔六月十六日大原重徳口状〕

口状

別紙之通ニテ只今高家衆へ差遣候、右御承知可被下候、扨昨夜堀小太郎来入之処、小子最早イネ候故、遠慮ニテ直ニ被帰不得面談残心ニ存候、遠方気毒ニ候ヘトモ、不承テハ不相叶義ニ候ハヽ、今日御遣シ下サレ候様願入候、早々不典、乍例実ニ乱書失敬御免可被下候也、

六月十六日

嶋津三郎殿　　重徳

猶御承知必不及御答候、　〔同上書にて校訂〕

一〇三〔島津久光面談ニ付大原重徳呈書〕

方今之時勢不堪傍観、島津家一同挙三国抛身命勤王攘夷〔御承知之事故下略ス〕

前書之御次第ニ候得ハ、嶋津三郎ト直面談不致テハ不相叶儀有之候、右ニ付御馳走所江相招度存候得共、御差支之有無不案内ニ候間、御尋申入候、御用便ニ候間、

来入相成候様御取計被成下度存候也、

六月十六日　　重徳

老中
御中

一〇四〔六月十八日大原重徳書翰〕

今日モ暑気甚敷難凌候、誠昨日ハ遠方御苦労ニ相成候処、何之風情モ無之気毒千万、嘸々御草臥察入候、愈御平康珍重此事ニ候、陳ハ今日登城之処、越公不参残念、様子如何ト存候処、何之子細モ無之、政事総裁職ニテ御請ニ相成候、尤越公出席ナク候ヘトモ、御請之趣各被申述候、則内々可及
奉聞旨申述候処、承知ニ候間、早速書状飛脚ヘ差出候、扨先一事ハ御請大ニ〳〵安心、全一昨日之御文、又昨日之御書ガ重畳間ニ合候ト、深々辱仕合ニ候、扨一橋殿儀ハ一事案外之事御座候、子細ハ禁錮ハ被免候ヘトモ、隠居被申付有之、隠居之身分之由、右ニ付依
勅諚一橋再職被申付、扨田安殿同様ニ相成候、此隠居之事ハトント不存事ニ候、夫ハ更再職ト有ハ夫テ宜敷候、処テ一事申事有之候、子細ハ先比田安殿後見被免、又コヽテ後見ト申輔弼ト唱候トモ、其命御座候テハ、主人ハ互ニ異存モ有之間敷候ヘトモ、又家来向何ト欤有之候テハ、如何ト甚心配イタシ候由ニ付、再職ニテ後見同様ト申処ト申事ニ候旨、各被申候ニ付、輔弼ナラテハ　勅命モ立カネ候振合ニ存候ヘトモ、再々貴所モ御咄シ之通リニテ同様ナレハ宜、且ハ田安殿トノ事モ何欤見トメタル子細モ可有ト存候ニ付、後見同様ニテ可然旨相答候処、大ニ安心之様子ニ候、然レハ後見同様ト申儀、更ニ御書取ニテモ御所ヨリ可被下旨申述候処、只再職被申付候ニテ、後見同様田安殿ト御一緒ニ何欤御相談有之候ニテ宜様子ニ各被申述候ニ付、夫テハ何ト欤御請ノ廉ナクテハ、畢竟徳川御一家丈御承知之事ニ相成候故、夫テハ重徳モ御宜トハ難申候ト申述候ヘハ、成程ト申事ニ候間、其辺能々御勘可被成（考脱カ）、何分後見同様可相心得、蒙　勅御請申上候ト申様之事ニナラステハ不相済旨ニ申述置候、右様ニテナクテハ小子宜トハ難申ト存候、如何可有哉御相談申入候、乍御面倒御存意モ候ハヽ、御答可被下候、仍早々如此候也、

六月十八日

嶋津三郎殿　　重徳

〔同上書にて校訂〕

一〇五〔六月二十四日大原重徳書翰〕

過刻兵部ヲ以申入候書取ハ、差越シ候書取ノ不日ニ後見ト申下ニ張候積リニ候、昨日ハ御申越之儀承知イタシ、又御心切ニ御書取トモ辱、大ニカヲ得候、然ルニ御示喻之通、先方被越候書取ニ、此侭ハ御示喻之文面難差出ク存候ニ付、勘考イタシ御相談申入候事ニ候、能々御覧御存意モ候ハヽ、必々無御遠慮朱ニテ御加書可給、呉々御頼申入候、扨御答次第ニ老中相招トテモ、輔弼御請ニ不相成テハ、　出格被立候　勅使ノ詮不相立候間、尚以勘考御詞可有様ニト存候、右ニ付書取之趣ハ一覧候ヘトモ、付札之イタシ候次第ニ候間、能々熟考御請有之度存候、且又全体ノ趣意モ差述候テ、昨日御遣シ之書取朱書之様ニイタシ相渡シ候ハヽ、如何ヤト存候、此儀便ニ御(更カ)勘考、御示教可給候事、今朝兵部ニ為持可上之処、大急キ此文認候間、ナカ〳〵故従迹掛御目候、御勘考御示喻可被下候、御返事次第ニ老中相招、申聞出書取モ相渡シ、猶御勘考、早々御返答承度ト可申ト存候、早々、以上、

六月廿四日

三郎殿　　重徳

〔同上書にて校訂〕

一〇六〔六月二十五日松平慶永返書〕

貴酬

一昨夕ハ貴書忝致披覧候、如諭暑気相増候処、弥御堅勝珍重存候、陳ハ先般ハ初テ得面晤、御賢慮之趣モ承之、乍憚御同意ニ御座候、就夫段々之御挨拶殊ニ御赤心充分御吐露ニテ、委縷御教示忝感荷之至ニテ候、御書中之巷説ハ兎モ角モ、素実ニ傍観之存念ニハ決テ無御座候間、御安慮可被下候、熱気強ク平臥中、不能委縷候、貴酬早々、不一、

六月二十五日　　春嶽

三郎様

二伸、御端文忝、尚又御自愛専一存候、佳品御投与忝、此品乍麁軽致進上候、早々、以上、

一〇七〔三策ヲ群臣ニ諮詢スル沙汰書〕

朕惟、方今時勢、夷戎恣猖獗、幕吏失措置、天下騒然、万民欲墜塗炭、　朕深憂之、仰恥祖宗俯愧蒼生、而幕吏奏曰、近来国民不協和、是以不能挙膺懲之師、願降

嫁　皇妹於大樹、則公武一和、而天下戮力、以掃攘夷戎、故許其所請焉、而幕吏連署曰、十年内必攘夷戎、朕甚喜之、抽誠祈神、以待其成功、昨臘和宮入関東也、使千種少将・岩倉少将諭天下大赦之事、且告曰、国政仍旧大概委於関東、至如外夷之事、則我国一大重事也、係其国体者、咸問　朕而後定議、或使二三外藩臣、預聞夷戎之処置、幕吏対曰、宸意事甚重大、遽難奉行、請暫猶予、〔衍カ〕既而頃日列藩窃有献謀議者、〔十カ〕如薩長二藩、殊親来奏事、且山陽・南海・西国之忠臣既蜂起密奏曰、幕吏奸徒日多、正議委地、而蔑王家、睦夷戎、物貨濫出、国用乏耗、万民困弊之極、殆至受夷戎之管轄、不日而可知也矣、冀挙旌旗、奉　鸞輿於函嶺、誅幕府之奸吏、或曰、為除太平浸潤游惰之弊、誅京師之姦徒、又曰、不顧幕府、下攘夷之令於五畿七道之諸藩、如其衆議、畢雖出忠誠憂国之至情、事甚激烈、使喻薩長之輩鎮圧、其他召幕老吏久世大和守、往復歴日、未告唯諾、而先行昨臘所喻之大赦、夫大樹猶弱、何失之有、但幕吏因循偷安、撫馭失術、如是則国家傾覆、可立而待也、　朕日憂懼焉、所謂偷一日之安、忘百年之患、聖賢之遺訓可鑑矣、当内修文徳、外備武衛、断然建攘夷之功、於是斟酌衆議、執守中道、欲使徳川興祖先之功業、張天下之綱紀、因策三事、

其一曰、欲令大樹率大小名上洛、〔公卿大夫〕議治国家攘夷戎、上慰祖神之宸怒、下従義臣之帰嚮、啓万民和育之基、比天下於泰山之安、

其二曰、依豊太閤之故典、使沿海之大藩五国、称五大老、為咨決国政、防禦夷戎之処置、則環海之武備、堅固確然、必有攘夷之功、

其三曰、令一橋刑部卿援大樹、越前々中将任大老職、輔佐幕府内外之政、当不受左衽之辱、此万人之望、恐不違、　朕意決于此三事是以下使於関東、蓋欲使幕府選三事中之一以行也、是以周詢群臣、群臣無所忌憚、各啓沃心丹、宜奏讜言、〔孝明天皇紀巻三・歴代詔勅集にて校訂〕

一〇八〔関東江勅使差立ルニ当ツテ決セラレタル三事〕

〔番号八二の第一大樹早ク……と同文により削除〕

一〇九〔徳川慶喜江之書付探索依頼〕

御問合之趣承知イタシ候、然ハ大原様ヨリモ勅答丈ハ相分候得共、諸向江御当リ、一橋江之御書付早々

御探索被下度、〔安宅、老中〕脇坂・〔勝静、老中〕板倉之両所之内江同役之内御壱人御差出相成候テハ如何可有之哉、
御国元并京江之飛脚モ召留置候付、早々御聞繕給度候、
此分極急キ申越候、

七月朔日　　中山中〔宝善〕左衛門

堀小太郎殿
御請極急キ

一一〇〔酒井忠義進退ニ関スル近衛忠房密翰〕

外封一一〇ノ一

嶋津三郎とのへ　　忠房

極密啓

七月五日認

内封

極密翰

投火々々

兼テ御歎願モ有之、右御歎願之通被　聞食候、
勅約モ頂戴被致候義、九月十月頃ニハ退職之義被願候
侭、兼テ暫時ト申義ハ其元御承知之義故、呉々深々御
含置之程、偏ニ御頼被成度旨被命候、仍極密々被申入
置候事、

一一〇ノ二

紙

嶋津三郎とのへ　　忠房

密々

〔朱〕「戌七月五日」　十七日達ス

尚々当年ハ日照リ続キ格別之暑気、其地ハ如何哉、
御自愛専一ニ存候事、
大暑之節弥勇健、尚承度存候、抑幕府正論之次第追々
伝承安心候、先月廿三日関白宣下無滞被為済、畏々入
安心候、乍併廿三日前迄ハ
朝議彼是ニテ、是ニハ困リ入候事ニ候、若州出府モ申
来、先々安心ト存込居候処、日ヲ経レ共少シモ発足様
子無之、如何之事哉一向合点不行、色々ト探リ候処、
以手筋深歎願仕、夫故歎ケ敷モ
朝廷ヨリ御救ヒ之　御沙汰、関東江御達シニ相成候由
伝承、何共驚入候、中山・正親町三條辺ヘ尋問仕候処、
尤相違無之工合之返答、何共歎入驚入候事、全両端之
叡慮ニ相成　勅使并其元出府之詮無之、嘸々其元立腹

之事ト、深々殿下忠房ニハ大ニ悲歎〳〵痛心仕候事ナカラ、関白　宣下以前之事ニテ、関白忠房〔近衛〕ニハ少シモ〳〵不存、何共心悪敷悲歎已ニ毎日打過候、何分早々出立之義達テ〳〵申来候様呉々存候、実ニ余リ之義何共申条無之、歎入候事ニ候、尤真実之　叡慮ニハ不有、是全心当リ之邪物之業ト口惜存候、何分　御膝元ハ表裏両舌多端、是ニハ十分歎入候、唯々口惜事已ニ存候、関東ニハ追々正論之衆出頭深々安心〳〵〳〵候、第一　皇国之御為ト深々安堵仕候、岩倉ニハ先月末ヨリ引入候、何分表裏之衆多テハ何事モ困リ入候、若州御救辺之義ハ、大原ヘ中山ヨリ文通ニテ心得ニ被申入候様子故、自然其元ヘ大原ヨリ咄合有之候節ニハ、当方ヨリモ其元ヘ文通ニテ巾越候ヘ共、全関白ニハ御承知無之故、甚御当惑被成候趣ニテ、荒々申来リ候由、御返答ニ被及候様存候、尤巨細文面御洩シ、決テ〳〵御無用〳〵〳〵〳〵実ニ歎息已ニ候、仍御咄申入置候、嘸々驚入之事ト察入候、先ハ右申入置度、例之拙乱書御覧分可給候也、

七月五日

投火々々

嶋津三郎とのへ　　忠房

極密翰

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一一一〔岩倉具視来書ニ関スル大原重徳口上書〕

越前上京、　朝議被相伺テ、於関東衆議、大小名献白可被召様ノ御運ニ相成度儀ニテハ無之哉、此御返答申候、能々御覧御勘考、

全体ノ御事ハ仰ノ通リニ候ヘトモ、左様ニテハ最初ニ立戻リ、午年ノ御仕直シ被遊候様ノ御事ニテ、夫テハ事手間取埒明申間敷、却テ又人心動揺可致欤ト存候、且又　朝廷ノ御国是ハ先年ヨリ被為立有之、別ニ今更被伺候ニハ不及事ニ候ヘトモ、其御国是ノ拒絶等ノ事拝服無之故ニ、彼是ト今日ノ世体ニ罷成リ候、夫故ニ一橋・越前ヲ被登庸候ハスヤ、此二人真正之政事被行候事ハ不及申候、其真正ノ政事施シ行ハレ候ハ、、　朝命遵奉ハ元ヨリノ儀、外夷ノ処置モ　叡慮ニ基付カレ候儀ハ申迄モ無之御事ト存候、左候ハ、今別段被伺候ニモ不及儀ニ候ヘトモ、種々ト相成来リ候末ニ候故、彼違　勅ノ廉御理ノ為ニ上京イタシ、扨国是ヲ被伺候事

ニ候、左候ハヽ、此処略治定イタシ、ケ様〳〵ニ可致候、併思召モ被為在候哉否被相伺候、其時　思召ニ違候ハヽ、屹度ケ様〳〵ニ可致ト被　仰出候ハヽ、　朝命相立可申、是迄ノ仕来リトハ違候ト存候、且国是ノ論諸藩囂々ト思ヒ〳〵ニ申出シ、其旨言上、扨於　禁廷其囂々ヲ御判断被遊候御儀ハ、如何可被為在哉、甚御案シ申上候、扨大名ヲ率テ上洛ノ事、先日御覧ニ入候三郎書中ニモ有之候通リ、大樹大名ヲ率ヒ上洛イタシ候諸説紛々、囂然タル事ニ可有之、其囂々タル内真ノ国是タル処、御見込御治定ハ却テ御六ケ敷カルヘク哉之趣、此儀小子モ至極同意ニ候、越前上京ハ大樹大名ヲ率ヒテトハ違候ヘトモ、畢竟同様ニ候欤、左候ハヽ於関東茲ガ国是ト云所ヲ相定メ、未行シテ相伺候処、　思召被為在候ハヽ可被　仰下、則御請申上候ヘハ、即朝命遵奉之場所ト存候、如貴命ニテハ午年ノ御仕直シニテ、中々手間取埒明事ニテハナク、人気モ立、種々ト相成急ナ事テハ調不申、諸説紛々却テ治定六ケ敷候半ト存候、併是迄ノ奸吏共ニ候ハヽ、御示之通リニナクテハ、正路ニハ成間敷候ヘトモ、其為ニコソ十目十指ノ一・越登庸、要路ニ在職候上ハ、何ノ御案思無之事ニ候ハズヤ、夫テモ御案思候ハヽ、一モ越モイラヌ事、政事御取カヘシ、貴公執政シテ天下ノ為ニ辛苦ナサルカヨシト申者也、是ハテキヌ事、左候ヘハ先治定御サシ被遊可然存候、乍恐是迄ノ仕来リ御任トハ申者ノ、実ハ御トラレ遊シタモ同様ノ事ニテ、違　勅調印ノ御正シモ難被遊、追々我侭カ長シテ今日ニ至リ候、今日一・越出頭、薩モ気張居候、今日以後ハ真実ノ御任ニテ、常々ノ事ハ是迄ノ侭（併有取捨欤）、国是天下悦服聊私論ナク、真正ノ処ヲ相定不行シテ相伺候ハヽ、則御決断ハ　禁中ニテ被遊ルヽト申者也、左候ハヽ是迄ノ訳トハ違申候、

譬テ申セハ、

悪党者ヲ召捕候ヘハ、其下役ニ取調、罪状ヲ頭分ヘ申出ス、奉行頭分ノ者是非ヲ考ヘ、的当ナレハ其分ニテ治定、若不当ナレハ勘考シテ、当然ノ罪ニ行フ事ニテ、下役ノ云分ニセネハナラント云事元ヨリナキ事ナリ、併訳ノ分ラヌ奸吏ナレハ、任セテ議論モ致サセネトモソノ為ニ一・越ヲ登庸候ハヽ、正路申出サルヽハ的然ト存候、左候ハヽ事速ニシテ相調、衆庶モ悦服疑念無之ト存候、

但シ、国是ハ両人共ニ胸中ニ兼々可有之事ト存

候、

以上、岩倉ヘノ写シナリ、

大体此様ナ事ニテ可宜哉トハ存候ヘトモ、後々之処ニテ、何事モ於関東治定之上伺ト申ノト、凡テ伺テ取計ノトハ大違ニナリ申候、御委任ノ廉モ候故、凡テ伺テ取計ト申様ニハ迚モマイリ申間敷、又於　禁中甚御六ケ敷可被為在哉ト存候ヘハ、何レトモ決心イタシカネ候、御英断偏ニ御頼申入候、以上、

七月八日

嶋津三郎殿　　重徳

〔同上書にて校訂〕

一一二〔七月九日正親町三條實愛書翰〕

七月朔日御認御状昨八日到着令拝見候、此比炎暑酷烈候処、先以御勇壮珍重御儀存候、然ハ去月十日粗略之一書進上候処、御念篤御答翰事々御細示、殊ニ其地御都合委曲示給、段々御尽力ニテ、去一日勅答御請ニ相成、御安堵之旨実以御同慶、

皇国御洪福

天朝御威光相耀候段、

御威徳令然処ニハ可有之候得共、全御尽力御周還故之義ト、感戴恐悦之至此事ニ奉存候、御掛合之趣左衛門督ヨリモ委細被示越、御丹精之程令承知、感悦仕候事ニ御座候、今九日右之次第内　奏之処、実以叡感被安

宸衷候御事ニ御座候テ、一同不堪雀躍候、先ハ猶又御答旁呈愚札候、恐々謹言、

三條大納言

七月九日　　實愛

嶋津三郎殿

再啓、於松平大膳大夫モ、去二日上着有之候得共、今以往復之運ニモ不相成事ニ候、何様之次第申立候哉難測候得共、譬何事ヲ申張候共、兼々御発駕前御談之通、於　朝議ハ何国迄モ御変動不被為有儀ト奉存候、定テ色々遠境之事ニモ有之、御配慮ト存候、右

朝議御確定之段ハ、御放念之様ト存候、陽明公ニモ御賀式万々被遂行御精勤被成候間、是又御休意之様ニ存候、申述度義海岳ニ候得共、御便急ニ相成差急不尽心事候、猶大暑御保護専一奉祈候、早々乱毫海恕所仰候也、

〔同上書にて校訂〕

一一三〔七月九日中山忠能書翰〕

去一日之御状拝披候、炎暑難凌候、弥御壮健奉賀候、
抑東武之事情巨細御示聞忝承候、一橋・越前両家之義
弥朔日御受ニ相成、先以
叡旨御貫徹之条恐悦存候、
天朝御洪福之令然処トハ乍申、偏ニ被抽御丹誠、種々
御周旋故之義ト深令感佩候、
勅使ニモ厚配之程令察候、併万事被及御内談候由、先
達被示越内外御配慮御苦心、御遠察申候事ニ候、則剋参
朝逐一言上、御書状モ内々奉奏覧候処、
御感不斜候御事ニ候、将又若州ニハ弥免役之義言上有
之候、代大坂城代ヨリ転役、右城代替等人体ニ付、且
此比一橋ヘ被附候人等之義、種々之説有之、有志之輩
一向不同心、京師ヲ不安心ト頻ニ申唱候、尚厚御勘考
奉願候、長門上京ニ付テモ色々評議有之候ヘトモ、是
ハ何レ初ヨリ御約之通申切候間、御安意可給候、於學
習院両役面談ト被　仰出有之、不日可面談存候、長説ハ凡々候ヘトモ、何分在京先文所司・
坂城代・一橋附等之人体ニテ、甚異説蜂起令心配候、

（酒井忠義、京都所司代）
（毛利元徳）
（粗子細モ相分、大原ヘ申遣候、御聞取可給候）
（淡路守同様）

宜賢考可給候也、

七月九日夜

島津三郎殿　　忠能

内々

追申、今日ハ当番彼是御用多之上、先日已来之肩手
痛益増長、一向苦痛之仕合、大ニ乱書且短札御分兼
ト恐入候ヘトモ、荒々申入候、略札等可令免給候、
御推覧可給候也、

（外封）

参番中且痛所等ニテ実粗略之短札、呉々モ御理申入
置候也、

〔同上書にて校訂〕

一一四〔政事総裁職ニ関スル大原重徳書翰〕

今日ハ殊之外暑気強候、愈御清壮珍重存候、誠ニ昨夜
ト申、又今朝モ御細答被下辱存候、然ハ今日之御用談
別事ニ無之、越前々中将大老之儀、彼是ト申ニテハ無
之候ヘトモ、名目之所大老トナリ候テハ、譜代ト同様
ニ相成、何欤キツイ心配之容体、全家来共不承知ヲ申
候様子モ候哉、并自分モ何ト欤家ヘ対請カタキ様子ニ
モ有之、何欤キツイ困リ之様子、扨実事之処ハ如何ニ

モ大老之事ヲ則今致居候テ、日々老中同様ニ心配イタシ候事ニテ、実事之処ハ頓ト異心ナク、御請モ可被申様子、只々名目大老之処、キツイ困リト相見候故、左候ハヽ、政事総裁職ト被仰出有之候事故、政事総裁職ニテハ各目(名カ)モ則替リ候事故、如何哉ト申候ヘハ、老中衆ノ口状ニ何欤唐メイタル名ニテ如何、一向政道ニ名之勘考ハ有間敷哉ト申候間、実事サヘ大老之儀ヲ勤ムル心ナレハ、名ハ如何様ニテモ不苦事ト存候、既ニ大老并支候ハヽ、政事総裁ト被仰出有之候カラハ、トント不苦儀ト存スル旨、再三申候ヘトモ不落合、脇坂(安宅、老中)カ一向政事別廉御用掛ト被仰出テハ如何哉ト被申候故、小子存候ニハ、夫テハ名目ニモ難成哉ト申候ヘハ、ナル程ト申様ノ事ニテ、一向不落合、越公又被申ルニ、ケ様ニ申セハ則違　勅ト申者ナトヽ、自カラ罪セラレ候故ニ、小子夫ハ違　勅ト申者ニテハナク候、子細有テ御理ヲ述ルガ違　勅ナレハ、何事ヲモ辞退ハデケヌト申者、夫ハ小子如何様ニモ申上ルト申テモ、左様ナラハト云テモナシ、何欤是ハ訳之有事欤ト察シ申候、越公ヘ極内々聞膳(ママ)候ハヽ、可相成ト存候、小子モ致方無ク、左候ハヽ、一向其由急使ヲ以相伺、矢張政事総裁職ト欤、又政事別廉御用掛ト被　仰出者欤、又別ニ名目ヲ被下モノ欤、可相伺哉ト申候ヘハ、猶マア御勘考可被成ト申ス事ニナリ候故、先左様ナラハ勘考可致ト申候故、如何可致哉、明日ハ可及返答申置候、此文ニテハ御分兼ト存候、何卒堀ニテモ小子方ヘ可被遣事ハ相成間敷哉、左候ハヽ、越ヘ内々尋ニ可遣ト存候事ニ候、トテモ今日ノ事ハ出取(書カ)カタク候、何卒明日堀御コシ御頼申入候越ヘ遣ス便ニモ相成哉、早々大乱書実ニ失礼、御推覧可給候、早々、以上、

此麁肴ハ従大樹公被下候故、御スソ分申入候也、

嶋津三郎殿　　重徳

一一五〔七月十五日正親町三條實愛中山忠能書翰〕

残暑難凌候処、愈御壮栄珍重存候、抑所司代跡役ニ宮(本荘宗秀、宮津藩士)津伯州被申付候由、去十日言上有之候処、諸有志之徒不服之趣ニテ、追々申立、頃日ニテハ激烈之議論切迫ニ相成、甚難治之形勢ニ候、万一於

輦下騒動等有之候テハ、何共無心元存候ニ付、

勅使江先御内々被仰談候儀有之候間、乍御労煩自左金(左衛門督大原重徳)吾御聞取ニテ、何レトモ御為御宜敷様御勘考、何モ無

御獲(腹)蔵金吾江御内談有之候様トノ　御内沙汰ニ候、自
小子共右宜々賢考奉頼候、仍如此候也、
七月十五日　實愛
忠能
島津三郎殿　(島津忠承氏蔵本にて校訂)

一一六　(七月十八日十九日大原重徳書翰)

一一六ノ一
口上
昨日ハ両士ヲ以、巨細御示喩承リ候、御尤之御次第ニ
ハ候ヘトモ、一端御同席ナクテハ、奉対
朝廷恐入候テ書付出シ候事故、在□(欠)甚六ケ敷心
配□(欠)可有事故心配仕(中山ニ御聞可被下候)、一酌
イタシ目覚思案ト□(欠)枕頭ニ一物有之、能見候ヘ
ハ、京都便リ之品、速ニ開封候ヘハ、誠ニ
皇天之御助ニ候欤、
御沙汰之趣ニテ、両人御請之儀御満足ニ被
思候ハ、従素右ニ付、両人江兼テ之　叡慮ハ元ヨリ、
更ニ被
思召(此事共ハ、難ヲ□面上ニ有之候)、申進シ候御事モ相添、右両人江
可申聞、又所存モ可承トノ御事申来リ候、右ニ付幸両
人越一計相招可談事ニ相成候間、右之処ヘ御出頭ニ相成
候様取組候積リニ候間、今日直様申立、廿日未半剋両
人被成候様申達候間、於貴兄モ御出会可給候、右申入
候、尤老中ハ不相招候、不量ケ様之次第ニ相成都合ト
存候也、
七月十八日　尤貴兄御出之事ハ臨期ノ積リニテ、
未申通ス候、
追テ
貴兄勤　王ノ精心通徹之事、深々御満足ニ被　思召
候段、宜可申入被達候、且又周旋ノ四人嘸カシ心配
苦労ナルヘク、宜可申入被示□、
嶋津三郎殿　重徳

一一六ノ二
(別紙)
以拝刷被示候儀承候、如御示御手狭之辺ハ御尤ニ存候
ヘトモ、被申越候御旨ト申候程之儀ニテ、屹度廉立候
事ニテモ無之候故、致登城申述候ヘハ、却テ表立如何
哉ニモ存候、尤御馳走ハ御手狭之事ハ御尤ニ存候ヘト
モ、御趣意柄御内々申入、又御所存等モ承リ、御熟談
可申入トノ御事ニ候間、表立登城ニテハ被　仰渡候事

ニモ相立可申哉ニ存候、　迹御カヘシ

（別紙ウラ）

原ノ

植松與右衛門

右之書状相認、昨日可申入存候処、何等之沙汰無之、至今朝高家来リ御馳走所ハ手狭ニテ、御用漏候テモ如何ニ候間、登城イタシ呉候趣申越候間、別紙（草稿之儀失礼御免）御目ニ掛候、然ル処越前家来参リ、詰リ趣意ハ内々春嶽ノ所存ニ候、御登城不被下テハ不相叶儀有之候由、登城ニテ面会候ハヽ、其次第モ相分候事ニ候間、何卒登城イタシ呉候様申越シ候間、御用向ハ相達シ、相談ニ相成其次第モ分ルト申事ニ候ハヽ、強テコジ付ルニモ不及、又々彼方ノ申分モ相立候ヘハ、崇

王攘夷旧弊ヲ破却候事モ申述、ヨク請ネバナラヌ処モ可有之ト存候故ニ、何欤訳ヲ御申越可被成、左候テ登城之事承知可致旨申答遣シ候、右故明日欤明後日登城之事可申来候間、明日登城可致ト存候、面会候ハヽ、被申越候御旨ハ勿論又所存モ承リ、崇

王之道大変革之道等ハ、小子相心得候丈ハ十分ニ可申述ト存候事ニ候、扨一橋殿ノ口上ニテ、小子・春嶽・三郎殿等御招被申候ト申事ニ候、日限無之候間、明日面会ニテ可承ト存候事ニ候、御出会可給候、昨日ヨリ可申入、中山モ案シタラ〳〵ト存候ヘトモ、不定分ヌ事ヲ申テモ如何故、暫待々々イタシ候内、御尋ニ相成無申分候、右之次第真平御免可被下候、早々、不乙

七月十九日

嶋津三郎殿　　重徳

追テ申、前日至極之都合ト存候処、ヘンナ処ヘ参リ、何トモ残念ニ存候ヘトモ、一橋ヘ集会候ハヽ、御本懐モ可達ト存候事ニ候、猶其節万々可申述候、乍例乱書御免被下候也、

（同上所蔵原本欠損多）

一一七（七月二十日正親町三條實愛中山忠能書翰）

残暑難退候、愈御安全令賀候、陳ハ一橋刑部卿後見并越前々中将政事総裁職等之事、如

勅命御請之儀、去朔日左衛門督登城、大樹公対顔言上有之、尚又去六日・九日等申渡相成、御請相済候旨、早速左衛門督飛札到着、即令言上候処、深御安心　御満足被　思食候、貴将専周還不一方、凝丹欤被尽精勤候ニ付、如斯速遵奉相成、不容易大切之旨

御沙汰ニ候、弥奉行此上恐悦可申承、猶宜々頼入候、
謹言、

七月二十日　　實愛
　　忠能

島津三郎殿

尚以小松帯刀(清廉)・中山中左衛門(実善)・堀小太郎(伊地知貞馨旧名)・大久保市(利通)
蔵其余、左衛門督(大原重徳)江被附置候吉井中助(友実)以下六人ニモ
段々煩労之儀、宜々御伝声頼入候、

一一八〔七月二十一日大原重徳書翰〕

此比ハ意外御無沙汰無申条候、朝夕ハ大ニ秋気相催候、
愈御安全珍重存候、陳ハ来廿三日、一橋刑部卿・松平
春嶽御馳走所江被参候、其節嶋津三郎ニモ出席候様可
申入トノ儀申述候、此段申入候、刻限ハ明日可被達旨
ニ候、御出会可被下候、早々要用耳、不典、

七月廿一日

二白、刻限知リ次第早々可申入候也、

嶋津三郎殿　　重徳

一一九〔七月二十七日近衛忠房書翰副書〕

尚々大原ヘハ御洩シ御無用御頼申入候事、

書副申入候、嶋田左兵衛尉(維章)去ル廿日落命ニ及候、右ハ(本ノマヽ、権大尉カ)
余程々々風評モ甚、定テ御聞ニ相成候事ト存候、扨去
月廿三日後連々之御参朝ニテ、関白深御周旋之御事ナ
カラ、兎ニ角ニ御承知ニモ候通リ、深入組口外難仕義
多端在之、実ニ不一方御痛心御苦慮ニテ、中山・正三(正親町三条)
之両卿ニモ深心痛之次第、乍去甚口外難仕義段々種々
在之、関白并両卿ニモ大痛心之至、関東可然改革、就
テハ甚恥ケ敷義、何卒再其元上京迄ニ、屹ト被立直
度義共多分在之、右ニ付テハ浮浪之士申立候義共モ在
之、甚々御痛心之御事ニ候、本田・藤井両人ニモ心配
之事共ニ候、実ニ両人共誠忠之義顕然頼敷存候、迚モ
朝廷唯今之次第ニテハ、何共口外ニ不及歎息際限無之
次第、乍去入込何カ不分明之事共モ在之、兎角御所置
難被成日々御苦慮、此姿ニテハ折角被蒙関白職候所詮
モ無之、何卒々々被立直度御懸念、乍去兎ニ角ニ御取
扱難被成入込、何共々々御苦慮実ニ口外難及義数多ニ
テ、御悲歎之御事不一方候、此上御所意通弥御取扱難

被成場ニ及候ハヽ、兼テ御歎願モ在之候義、旁来八月ニテ当職三ケ月ニ及候事故、兎ニ角辞表被申上度御心底、何卒当方ニハ格別古来ヨリ之其元ニハ親敷続柄、何卒御辞表自然被出候節ニハ御取持被下、御差止メニ不相成様、浪士之向モ騒立不申様御含置、深々御頼被成度、右故実々在体打明申入置候事ニ候、且亦関白退職被　聞召候上ハ、一條左大臣（忠香）江当職（輔熙）宣下ト被存候へ共、全体差次ハ鷹司前右大臣之事故、此次ハ暫時タリトモ前右府公へ　宣下ニ相成候様、併朝廷ニテハ讒言兎ニ角ニ　御採用ニ被為在、甚々此人体ハ御六ケ敷候得共、元来之性質正直ヨリシテ、却テ暴ニ不心付、夫ヨリシテ身上ニモ拘候次第モ在之、甚気之毒成義、併入道准后当職ニテ、何カ巨細ニ職辺（庭）勤仕向ハ承知可然人体故、此侭讒者之偽ヲ被受、生害ヲ被経候テハ、不一方気毒々々御不憐愍之義、一條左大臣ト被　仰出候共、此次ハ為暫時共前右府公へ　宣下可被為在、関東ヨリ勅答ニ相成候様仕度呉々御含置、一橋・越前辺程克承知ニモ候ハヽ、安堵仕候、仍極密々申入置度、長文乱書御推見偏ニ御頼申入度候事、

七月廿七日　　忠房

島津三郎殿

内密々

長文ニテ書誤書損等其侭、御免々々可被下候也、亦候認申候、関白御辞職ハ決テ〳〵唯今之事ニテハ無之、自然御所意通ニ御取扱御六ケ敷節之事ニ候、何モ御承知置可被下候也、

（島津忠承氏蔵本にて校訂）

二〇〇（七月二十七日近衛忠熙書翰）壬戌七月二十七日　八月九日達ス

二〇〇ノ一

尚々残暑専御用心之様存候也、

御書中承候、兎角残暑難去候処、弥御勇猛珍重不斜存候、此辺無異ニ候条御安意可給候、誠ニ此程ハ関白宣下拝賀等無滞相済深畏入存候、実々兼テ申入候通、当今之御時勢重職恐々入候而已ニ候、右祝シ給御丁寧之御書中、殊ニ重宝之御品肴等恵給、目出度忝々存候、誠ニ好候御品一入御心入深々忝存候、右御礼御答迄荒々申入候、扨ハ此品甚以麁末之至ニ候得共、御答礼申入候迄ニ令進入候、御笑留給候ハヽ、忝存候也、

七月二十七日　　忠熙

御報

島津三郎殿
御下

一二〇ノ二
書添

尚々取紛大乱書可免給候、申入度儀品々在之候得共、荒々申残候也、

書添申入候、忠房江御細書之趣委細承り候、段々之御周旋其御地之御次第、実ニ感悦不過之候、其御方御骨折筆紙難尽候、委細御答へ可被申入候処忠房へ申含置候、御一覧可給候、此度ハ家来進藤式部権少輔〔長義、近衛家家士〕〔ママ〕御用之儀申含、勅使左金吾〔左衛門督大原重徳〕迄差下シ候、幸便御尋旁申入候、良節〔藤井〕ニモ下向候儀、何モ申聞置御聞取可給候、

朝廷之御次第日夜心痛ニ不堪候、御察可給候、其上兎角所労勝繁務甚以恐々入存候、何卒辞表相叶候様ニ偏ニ願候外無他、何モ口外難致次第ニ、何卒々々御察希度存候、中山・正三之両卿実精勤、当時此両卿無之候テハ、実ニ何事モ御不都合ト可相成ト存申候テ、何モ〳〵荒々乱書可免給候也、

家来差下候幸便此品進入候也、

七月二十七日

〔同上書にて校訂〕

一二一〔七月二十七日近衛忠房書翰〕

尚々残暑難堪、御自愛専一ニ存候事、

残暑難堪候、弥勇健珍賀候、尚承度存候、於此方モ打揃無異之条、御安意可被下候、抑今度　勅使江御内用ニ付、家来進藤式部権少輔罷下候ニ付、時候御見舞申入候、先以不容易御周旋、段々御整ニ相成、皇国御為且公武御栄久之被開台源候義顕然之至、深々安堵之至ニ候、大膳大夫〔毛利慶親〕上京後先々差当言上之義無之、先々関白ニモ御安慮之御事ニ候、併自最初御沙汰之義故、押テ大膳大夫再出府其元申合セ周旋可在被仰出候得共、段々之次第モ在之候テ、長門守〔毛利元徳〕近々出府仰付候事ニ候、長州周旋被　仰付候義ハ、水府故前黄門・尾前黄門気毒ニ被　思召候ニ付、水故黄門ハ贈官、尾前中ハ昇進被　仰付度義、且亦先年落命仕候可然輩、夫々家統相立候様、格別之大救〔救力〕被　行度　思召候、右辺蒙　御沙汰、出府ニ相成候事之由ニ関白被命候、仍内々申入置度、且亦何カ承度存候事ニ候、扨此亀軽之品、乍赤面便ニ序セ令笑覧度存候、少々所労逆上気、尚更拙乱書御推覧可給候也、

七月廿七日

忠房

嶋津三郎殿

極内密

〔表紙〕

忠義公史料

文久二年自八月至九月

〔扉に、表紙と同じ文字の外に市来四郎編の記載あり〕

一二二〔八月六日大原重徳書翰〕

兎角不揃之時候ニ候、愈御清康珍重存候、陳ハ昨夕京師ヨリ御便有之(毎々御達シ御セワ辱存候)、此一封御達可申旨、議奏中ヨリ被示候、早々御達可申之処、来状彼是読得候中及深更候間、漸今朝進候、御拝読可有候、自余貴兄江従四位下中将等可賜旨被示越候、尤内々御沙汰ト申ニテモ無之候ヘトモ、七月廿七日立ニテ、近衛殿諸大夫并藤井良節(正徳)等罷下リ、巨細ハ被申含候趣ニ承候、右ニ付御咄シテモ申度、御家来四士之中誰ニテモ可遣様イタシ度存候、自余ニモ申来リ候事有之候、早々申入候、扨御推任叙之儀、誠ニ珍重之御事、不取敢御悦申入候、全此度之御精忠莫大之御規模無申条珍重存候、以上、

八月六日　重徳

嶋津三郎(久光)殿

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一二三〔勅書推戴ニ関スル幕府請書〕

一筆致啓上候、〔省略カ〕

然ハ是迄関東御不都合ノ儀ハ在之、深恐入候次第ニ付、此度以

勅書被　仰出候通、今後ノ義ハ只管奉推戴

勅意、心力ヲ尽シ誠精ヲ励シ、偏公武御一和上下一致、万民致安堵候様取計、何卒奉安

叡慮度ト刑部卿初一同日夜心痛罷在候、未事業ニ施候義無之故、被安

宸襟兼候御義モ可被為在ト奉存候、幕府新政不容易次第ニテ、百思千慮尽評義候故之事ニ候間、此段御指含在之候様致度、扨又春嶽上　京被仰出候ヘ共、前書ノ通万般政体篤ト見据相付候上ナラテハ、上京仕候テモ可奉

叡慮様モ無之ニ付、此義暫
御猶予相願度候、是迄深被為悩
宸襟候義モ、畢竟久世大和守〔広周、関宿藩主〕・安藤對馬守〔信睦、磐城平藩主〕不束ノ取扱
有之候事故、
大樹公ニモ深恐入思召、私共一同ニモ不堪恐懼奉存候、
自今以後ハ偏以公武御一和ノ義、誠精粉骨仕候条、尚
宸衷モ被為在候ハヽ、以各方私共一同ヘ被　仰出度
御至当ノ御義ハ何分ニモ尊奉可仕、自然於時勢難被行
御義ハ、乍恐従是御断可申上候、此段其許迄厚御含在
之候様致度候、以上、

八月七日

板倉周防守〔勝静、老中、備中松山藩主〕
水野和泉守〔忠精、老中、山形藩主〕
松平豊前守〔信義、老中、亀岡藩主〕
脇坂中務大輔〔安宅、老中、竜野藩主〕
松平春嶽〔慶永、政事総裁職、前福井藩主〕
徳川刑部卿〔慶喜、将軍後見職〕

廣橋一位殿〔光成〕
坊城大納言殿〔俊克〕

一二四〔閏八月十三日近衛忠房書翰〕

尚々時節御自愛専一ニ存候事、
兎角難晴陰定候、弥勇健珍重候、抑一昨日ハ忠左衛門
来御伝言之趣何モ承知候、其砌何寄之御品々被下、御
丁寧々々之事喜悦候、参朝出来御挨拶、是亦御丁寧御
心入成事別テ〳〵忝ナク、不残御礼申入候、殿下雅君・
信君等ヨリモ宜被仰入度由ニ候、呉々御心入厚々御礼
申入候事、

閏八月十三日

追啓
中山・正親町三條辺ヘモ御丁寧之御進物之由ニ伝聞
候、右ニ付内々御心得迄ニ申入置候、堂上抔ヘ余リ
過分之御進物ハ、却テ方今衆人之気合ニ拘リ不宜候
間、御心得置之様存候、近日青蓮院宮ヘモ御出殿之
事ト存候間、何モ御承知置之様存候、夫共御由緒在
之格別也、先ハ御丁寧ニテ不差支候事ニ候、一寸御
心得ニ申入置候事、

緘

内密入覧後投火

嶋津三郎殿　　忠房
御下

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一二五 〔松平慶永上京沙汰ヘノ答書〕

私儀、上
京仕候様
御沙汰之趣承知仕候上ハ、不取敢参上可仕ハ勿論之義
ト相心得罷在候得共、奉蒙重
命候以来未タ日浅ク、不肖之私故、廟堂之事情モ篤ト淵(判)
底(カ)難仕、諸有司之賢否モ聢ト相弁ヘ不申候、依之国是
之議モ一定ニ帰兼候次第モ有之ニ付、唯今之処ニテ上
京仕候テモ、奉応
叡慮
御安心
思召程之御請答モ難仕時宜ニモ可相成哉ト、深以奉恐
入候間、上
京之儀、当分御猶予被成下候様、可然御執成之程奉願上
候、元来微力不才之義ニ候得ハ、諸向居リ合、国是之
廟算相定候迄ハ、多少之日月ヲ費候半ニテハ難相適可
有御座ト奉存候得ハ、急度上
京可仕御内意等御座候ヲ及御請候上、段々延引仕候様相
成候テハ、奉対
京師従前之食言ニモ相当リ、愈以奉恐入候次第ニ御座候
故、目前之処有体之侭申上候事ニ御座候、勿論此表之
儀粗定見出来候得ハ、於私モ是非共上
京仕候儀志願ニ御座候得ハ、精々尽力仕、一日モ早ク御
請出来候運ヒニ仕度被奉存候間、此段厚ク御含置被下
候様奉伏希候、以上、

八月十八日　　松平春嶽〔同上書にて校訂〕

一二六 西郷隆盛木場傳内ヘ与ル書翰

当月十一日付之御懇札、仝廿三日朝相届、難有拝読仕
候、実ニ御馴ケ敷繰返シ巻返シ候、私斯ク罷成候形行
ハ、決テ不申上考ニ御座候得共、如何様之御疑迷モ難
計、御安心成兼候事ト、無拠委細申上候間、御一覧後
丙丁童子ニ御与ヘ可被下候、嶋元ヨリ相考候ヨリハ雲
泥之違ヒニテ、御府内都テ割拠之勢ニ相成居、頓ト致
シ様無之模様故、暫之間観察仕候処、当時之形勢少年
国柄ヲ弄シ候姿ニテ、事々物々無暗ナ事而已出候テ、
政府ハ勿論諸官府一同疑迷イタシ、為処ヲ不知勢ニ成
立、ケ様之事ハ是テ引□(元ノマヽ)ヒ、(結カ)此処テ成ルモノトイフ事
ハ全ク不知、志ハ能ク向候テモ所置ニ至テ疎ク、俗人

之笑フ事多ク、君子之賦ニ候得共為ス処至テ賤敷手而
已相見得、君子之所行ニ無之候、所謂誠忠派ト唱候人
々ハ、是迄屈シ居候モノ、伸候テ、只上気ニ相成、先
ツ一口ニ申サハ、世ノ中ニ酔ヒ候塩梅、逆上イタシ候
模様ニテ、口ニ勤　王トサヘ唱ヘ候ヘハ忠良ノモノト
心得、サラハ勤　王ハ、当時如何之処ニ手ヲ付候ハヽ、
勤　王ニ罷成候哉、其道筋ヲ問詰候得ハ、訳モ分ラヌ
事ニテ、国家之大体サヘケ様之モノト明メモ不出来、
日本之大体ハコヽトイフ事モ全存知無之、幕之形勢モ
不存、諸国之事情モ更ニ弁ヘ無之、ソフシテ天下之事
ヲ尽ソフトハ、実ニ目暗蛇ヲヂズニテ、仕方モナイ儀
ニ御座候、然処小弟儀、
〔島津斉彬〕順聖公之被召仕候トノ趣、世間ニ相響居、此モノカ
帰リタラ、決テ事柄モ変ロフト、アテニ相成候塩梅ニ
テ、モフハ博奕モ打ラレ候向ニ無之、是カ幸中之不幸
ニ御座候、余リ高ク直段ヲ付ラレ込リ切タル事ニ成立
候、
〔島津久光〕泉公御参府ニ付、御大策ト申儀有之、是ハ三四輩之処
ニテ極秘密之事ニシテ有之候由、然処着涯〔帯刀邸、鹿児島
市〕小松家〔実善〕江会シ候様承リ、大久保〔利通〕同伴参候処、中山尚之介参会有之、
四人会席ニテ御大策之趣承候処、此節ハ
京師迄ニテ、〔徳川慶喜〕一橋・〔松平慶永〕越前御後見御政事御相談役ト申、
勅御申下シノ御事ト承候付、委敷承候処、頓ト返答サ
ヘ出来兼、随分之御大策モ取処無之塩梅ニ罷成候、私
ヨリ問掛候ハ、右之
勅ヲ御下シ相成候ニハ、手ツルト申モノ無之候テハ、
迚モ出来不申、夫ハ閣老之処江委敷申込候テ、ケ様ニ
成サレ候ハヽ、請合テ尽スト申事、能々地盤ヲ居ヘ不
申候テハ出来申間敷、夫ハ如何ニ候哉ト承候得ハ、全
ク手ハ付居不申、左様ナラ幕府ニテ甘ク御返答申上候
テ、始終
勅ニ不応候ハヽ、如何之御策相立候哉承候得ハ、其時
ハイツマテモ　京師御滞之賦、　京師江一年モ二年モ
トハ御滞相成間敷、若不応日ニハ違　勅之罪ヲ御責不
被成候テハ、名義モ相立申間敷、又　京師御保護ニ付
〔京都薩摩屋敷〕テハ、只錦之御屋敷共ニ被為在候テハ何共知レヌ事、
所司代ヲ追退、井伊之固メヲ除不申候テハ相成間敷、
違　勅之罪如何御正シ可被成哉相尋候処、一言之返答
モ出来不申、時日ヲ移ス内異人ト相結、大坂口ヨリ軍
船ヲ差向候ハヽ、其時之御手筈如何相付候哉、一々難

論仕掛候処、返答サヘ出来兼候人々、御大策トハ余リ
気強ク、シマリハ、夫故私ヲ相待候事ニ御座候間、任
シ呉候様承候得共、是ハ私ニテハ迚モ出来不申、イマ
タ御内評中之儀ニモ有之候ハヽ、如何様共尽シ様有之
候得共、都テ仕クサラカシテ仕様ト被申候テハ、出来
不申段返答イタシ、是ハ案外之次第、貴公方々ニテハ
御論モ出来不申、其上甚以疎事ノ御策ト相考候間、
泉公之処如何御居被遊候哉、拝謁仕度申出候処、自然
拝謁被仰付賦ニ候間、両三日中被召出トノ事ニ御座候、
然処四月十五日旧務ニ被復、直様被召出候処、一々右
之難論申出、其上私愚考トハ大キニ違ヒ申候、只今之
御手数ハ、　先公方被遊候御跡ヲ被為蹈候御事ニテ、
其時ヨリハ時態モ相変、
順聖公ト一様ニハ成サレカタク、江戸ニオヒテモ御登
城モ六ケ敷、諸侯方之御交モイマタ無之、一体成サレ
方相変不申候テハ、弥成シ応候処見留付不申、イツレ
大藩之諸侯方御同論御成リナサレ、合従連衡シテ其勢
ヲ以成サレ不申候テハ相済間敷、此　御方様ヨリ　京
師御保護被遊候ハヽ、
勅ト一時ニ諸大名俄ニ御登城ニ相成、速座ニ御扱不被
成候テハ、迚モ出来申間敷、又
京師御滞ニ付テハ、必ス変ヲ生シ可申ト委敷理ヲ尽シ
申上候処、尤成ル訳ニテ今更致シ方モ無之、此度之儀
ハ御届捨ニテ最早延引モ難致、是非平常之処ヲ以成サ
ルヽトノ事ニ御座候得共、非常之備ヲ成シ、非常之事
ヲ被成候ニハ、平常之処ヲ以出来不申、若合従連衡之
策出来不申候ハヽ、固ク御守被遊候処、相当之御所置
ニテハ有御座間敷哉、是非
御病気之処御申立被遊御参府御断被成、ツマリニツマ
リ候ハヽ、割拠ト申御腹合ニテ被為在度、愚考之形行不
残申上候処、二月廿五日　御発駕被召延、三月十六日
ト相成申候、然処只今之処ヲ以策ヲ立候様承知仕候ニ
付、二策書取ヲ以申上候、第一策ハ是非御参府御延引、
幕江ハ参府ニ差掛候処、非常之世態ニテ国中之人心動
立、号令ヲモ不顧人々踏出候勢ニ成立、騒動可致候間、
当年之処ハ相延、家老ヲ以名代差登候趣ヲ以テ被召延
度、御国中江ハ御家老中ヨリ御危申上候テ、御引留申
上候趣、被仰達度トノ所置モ相付申上候、第二策ハ是
非御延引之処不被為出来候ハヽ、天祐丸ヨリ関東迄御
乗船ニテ御参府被為在度、左候ヘハ違変軽重相計候得

ハ、

京師ニオヒテ変動可致ハ案中ニテ御座候故、難易之処海上ニテハ軽ク御座候付、右之計被遊度趣申上候処、二策共御取用無之、実ニ仕方ナキ事ニ御座候故、一日出勤仕候テヨリ直様足之痛ニテ引入、夫ヨリ湯治ニ差越、何様ノ事ニテモ足引上ケ不申考ニテ隠遁之賦ニ御座候処、諸国ヨリ有志之者共御国元之様参、私ニハ湯治留守御座候処、罷帰リ承候ヘハ、右之次第ニテ、一夕大久保参リ実ニ心配イタシ居、弥変ヲ生シ候トノ趣承候故、不得止出足仕候事ニ御座候、是ヨリ先キ御国家之人心不平ニテハ、治モ変モ出来不申候、尤君子ノ争大幸ニテハ無之、是非両全之策相立、久留米ニオヒテモ、君子之争ヨリシテ混乱ニ及候前車之覆轍モ有之候間、是非一致シテ御国中勤　王ニ相成候様被成度、頻ニ切論ニ及候処、是カ畢竟一番悪事ト相成申候、又豊〔島津久宝〕州之一党ニオヒテモ起テハナラヌト二度押、甚以君子之為スヘキ業ニ無之、小人ノ党ハ利ヲ以相結候故、党中之内頭立タルモノ一両人モ、不差障処江被為出候ハヽ、一党致疑迷悉ク崩立可申、頓ト先無シ小路江追込候ハヽ、決テ小人ト見コナシ候テモ、面々之知慮丈ハ又外ニ働キ可申、決テ恐レ居不申ト委敷解立候得共、一体土台頻少ニテ増々小ク罷成候事計ニテ、如何成明智之人出候テモ、今通ニテハ今日之処サヘ六ケ敷勢ニ成立申候、来春御帰府之上親敷御覧可被下候、

一村田新八同道ニテ下之關江参考ニテ、尤他国江出候儀、大監察方大キニ六ケ敷、漸ク下之關迄ハ差支有之間敷ト申事故、夫ヨリハ被召列トノ御内達モ有之候、然処〔福岡県〕飯塚ニオヒテ森山新蔵〔薬園〕方ヨリ差立候飛脚江逢ヒ、又々下之關之様急候様トノ趣有之、又々相急候処、三月廿二日朝白石方江参着申候処、豊後岡藩二十人参会居、卒度面会イタシ、右之人数ハ直様大坂之様出船有之候、新蔵ニモ船手当イタシ居、既出船之処江参付、跡江一封相残シ、其暮方出船ニテ、同廿六日大坂江着イタシ候処、宿屋江モ難相付、新蔵案内ヲ以テ、加藤十兵衛方ヘ相付、潜匿イタシ居候次第ニ御座候、大坂ニ出候処、諸方之浪人等都テ、堀計〔伊地知貞馨旧名〕ヲ以御屋敷江御潜メ相成居候、關ニテ筑前浪人〔国臣〕平野次郎ト申モノ、此以前月照和尚之供イタシ、御国元江参リ、臨終之時モ同処ニ罷在候人ニテ、夫ヨリ方々江徘徊イタシ周旋奔走、勤王之為尽力イタシ、艱難辛苦ヲ経候人ニ御座候、右之

者至極決心イタシ居候故、又其方ト死ヲ共ニ可致我等ニ相成候、イツレ決策相立候ハヽ、共ニ戦死可致ト申置候、勿論皆死地之兵ニテ、生国ヲ捨、父母妻子ニ離、泉公之御大志被為在候段、奉慕出掛候付、都テケ様ニ申候テハ自負之様御座候得共、私ヲアテニイタシ来候故、私死地ニ不入候テハ、死地之兵ヲ救フ事出来申間敷、何篇諸方之有志ハ、大坂ニテモ都テ私ヨリ引シメ置候処、有村俊齋(海江田信義旧名)阿久根ヨリ極々急ニテ京師江参リ、早々御中途迄又々踏返申候、其折平野ト川下リ一緒ニイタシ候処、私之決心ヲ平野ヨリ相咄候由、然処俊齋ヨリ右之趣直様申上候処、至極之御立腹ニテ、ケ様ニ罷成申候、畢竟下之關江罷在候ハヽ、彼処ヨリ被差下賦ニテ有之タル由、其時迄ハ両全之策ヲ立候ハヽ、左州之一列ト与合、何篇　泉公ヲ御悪敷申入、私出立之前晩桂右衛門殿宅江参候儀共、大不都合相成候由ニテ被差下筈之処、又々右之俊齋口上ニテ大咎ニ相成申候、右咎之趣ハ四ケ条ニテ、〇浪人共ト与合決策相立候一条、〇年若之者共江尻押イタシ候二条、〇御滞京相計候三条、〇關ヨリ大坂江飛出候四条ニテ、一向胸ニ落不申、大坂ニテハ加藤所江潜匿、伏見ニテハ御仮屋江潜居候事ニテ、京師江モ出掛不申、其上大坂ニオヒテ面会之人々ハ纔之者ニテ、右様之儀相計候人江モ取逢ヒ不申、堀次郎咄ニ、イツレ此節京都御滞ニテ御尽不被遊候テハ不相済、関東江御下リ相成候テ、何ニモ不相成トノ咄ハ承申候、全御滞京ヲ計リ候覚無之候、〇浪人共ハ始終私方ニテ押付居候テ動カシ不申、又年若之者共ハ尻押所ノ事ニ無之、始終私江ケ様ニ言聞シテ呉レ、ケ様致シテハナラヌカラセンヤウニ申聞テ呉レト被頼、始終叱付置申候、先生方之人々ハ十分ニ二才衆ニサヘ言兼、只我身構而已ニテ、偽謀ヲ以テイタシ居ラレ候事共ニテ御座候、乍然堀江久々振於伏見面会イタシ候処、昔日ニ変只智術ヲ以仕事イタシ居候間、ヒドク面責イタシ申候、自分之身カオソロシク成ルト、術ヲ不用候テハ致方無之候間、都テ取止メ候様、大事ニ懸候テハ只誠心ヲ以不尽候テハ決テ不相成、譬仕損候テモ誠心サヘ相立候ハヽ、感慨シテ起ル人モ出来候間、術ニテハ決シテ不相済、尤長州永井雅楽(時庸)ト申大奸物ト腹ヲ合セ、与合居候間、ヒトク其儀ヲ責、若永井ト同論トイタスニ於テハ、永井儀ハ長州之有志共ヘ可刺申置候間、同論イタサハ、此方ニオヒテモ汝ヲ亭主振ニ可致、其

時ハ二才衆其脇ニ居合候故、右之人々江可打トハ申事ニ御座候、是モ今更相考候得ハ、大邪魔ニ相成候筈ニ御座候、永井ヲ打ノ策ハ、実ニ手荒ヒ様ニ御座候得共、天下之奸物ニテ御座候、京師江罷登候訳ハ、幕ヨリ御頼ヲ以出居候、夫ハ是迄之御扱振宜敷無之、前非ヲ悔テ御改被成トノ趣ヲ以テ、　朝廷ヲタマシ付候策ニテ、書取ヲ以　朝廷江差出候書面有之、其内ニハ第一異人交易　勅許相成候様偏ニ申立、黄金ヲツカイ九條殿下ヲダマシ、開港　勅許ニ相成候ハヽ、直様堂上方御寃罪ヲ解、又諸侯方モ同様可致抔ト誠ニツマラヌ事計書建ニテ、薩摩ト同意ニテ申上候、長州侯ト連名ニテ可差上候得共、急速之事故其儀モ不相調候間、其証拠ニハ堀次郎被召呼御聞取可被下ト申上、御聞取相成申候、堂上方有志之御方々御論ハ正敷、　和宮様御下向ニ付テモ、御願通御縁談被為済候ハヽ、早速異人之所置可相付ト申上、其通御許容相成候、イマタ舌モ不乾ニ、開港ノ一条甚以不届之次第ト、永井ハ見出サレ候由ニ御座候、夫故無拠打方之儀、長州之有志江申含候、尤長州ニオヒテモ、永井之党ト有志之党ト両立イタシ居候、

一長州江ハ　朝廷之御取持、諸藩トハ格別之御訳合モ有之、当時一向御頼ニ相成候訳故、　主上御直筆ヲ以御書取相下リ候、右ハケ条書ヲ以、上記之者共モ　皇朝之御為メニ尽シ候儀ニテ、誠忠ヲ旌表イタシ候様、堂上方ヲ御初有志之諸侯方モ、一向　皇国之御為ニ被為尽候処、都テ御打込ニ相成候間、本々之通被復、右之取扱イタシ候役人誅罰イタシ候様、又右之　勅令通不応候ハヽ、有志之諸侯ヲ　京師江被召、違　勅之罪可正候間、其通可出来哉否可申出トノ趣、十五ケ条有之候由、其儀ヲ悉ク永井ハ可打崩策ニテ相働候向御座候間、ヒドク黄金ヲ相仕ヒ候由御座候、此儀ハ慥ニ長州大坂御留守居宍戸九郎兵衛（真澄）ト申スモノヨリ承候、宍戸ハ直々拝見イタシ候由ニ御座候、決テ行先我国之為ニモ、永井邪魔ヲ可成ハ案中ニ御座候、是ハ畢竟幕ノイタヒ処ヲ程能致シ成シ、自分之功ヲ立、天下之権ヲ可取計謀ト被察申候、余程幕府ニオヒテハ、此節之勅使御同伴之御一条ヤカマシキ由ニ御座候、○浪人共御屋敷江御引受ニテ、御構ヒ相成候儀、　泉公御不合点ニテ御座候処、堀申上候ハ、私御受合申上候ト御返答申上、夫ニテ御安心相成候由、夫々伏見ニテ之混雑到

来イタシ候テハ、如何之申訳イタシ候哉、奸人之舌頭可畏モノニ御座候、又決テ此儀モ私江打カフセ候半ト被察申候、私四月十日罷下候様承知仕、早速船江乗付申候、至極穏密ニ被致、人気混雑可致トハ相考候由、然シナカラ私ヲ置候テハ、実ニセワラシク故落シ候向ト相見得申候、落サレ候期ハ堀ハ大坂ニテハ宿屋江臥候儀モ不出来、若哉被打候半欤ト臆心ニテ、御屋敷内御納戸江潜臥イタシ候由、可笑之甚ニテハ有之間敷哉、大坂見聞役中私ヲ落シ候儀、不合点ニテ御側役江突掛、大キニ論判イタシ候由ニ御座候、御国元ニオヒテハ御供之役掛中ヨリ、又大キニ議論相起候由ニ御座候、大監察・小監察之処一円承引不致、厳敷申立、是非対談ヲ懸申度被申立候由御座候得共、喜入(久邁)不受入夫形伏見ヨリ申来候ナリニテ参申候、夫ハ面白モノニテ、只徳之嶋江被遣ト計ニテ、羽書ヲ以被相達、何之罪状モ不相分候、決テ此節ハ御助米共被下候向ニハ無之、島元ニオヒテモ相慎候様、嶋代官ヨリ可申達トノ趣ニテ御座候故、仮屋本ヨリ五里隔候岡前ト申所江潜居仕候、頓ト世事ヲ忘却仕候処、何之苦モ無之、尤御助米不被下儀難有次第ニ御座候、先ツ右等之形行ニテ、細大書尽シカタク、又自心(身)申ニテ能キヤウニ相見得候間、其処ハ御推読可被下候、御存之通暴言ヲ咄候儀ハ多ク有之候、其罪ハ難逃候間、安然トシテ罷在申候間、御安堵可被下候、

一森山儀、私ニハ眼病相煩ヒ、養生方ニ上陸イタシ居候処、及自刃候段承リ、驚キ候次第ニ御座候、私ト村田儀ハ嶋方相分候得共、森山儀一向不相分、尤先年之一向宗又々発起イタシ、六ケ敷向ニハ承居候事ニテ、夫等之処ヲ以、御吟味六ケ敷相片付兼候半欤委敷不相分候、勿論三人共大嶋江ハ不差遣様伏見ヨリ申来候由、是ハ畢竟桂氏(久武)江聞カセヌ賦ト相見得申候、婦女子之所行ト片腹痛ク御座候、私儀ハ愚痴ニハ有之候得共、片贔負共イタシ候考ハ全ク無之候処、中山奸謀ヲ以左州(島津久徴)一列ト結合候テ、事ヲ計ト申成シ、其罪ヲ以被落申候、此中山(実善)ト申スモノ我意強ク、只無暗ノモノニ御座候カ、一番寵ヲ得、大久保(利通)抔ハ私一件ヨリ大キニ被忌、位ヲ保候儀モアブナキ儀ニ御座候得共、私ヲケ様ニ致シ、又大久保迄落シ候テハ、人気混雑可致迚、漸ク助ヒ候向ニ御座候カ、只今共ハ如何之振合ニ罷成候哉、頓ト相分不申候、

一田中河内〔綱歟〕之介ト申スハ、中山家之諸大夫ニテ、　京師ニオヒテ有名之人ニ御座候、右之人　粟田宮〔尊融親王〕様之　御令旨ト申スモノト、錦之御旗ヲ捧居候由、右ハ偽物ニテ、是ヲ以人々ヲアサムキ候ト申スモノニテ、　御国元迄被差下トノ趣ヲ以、船中ニテ私ニ隠然ト、父子三人外ニ浪士三人都合六人被殺候由、譬偽物ニモセヨ朝廷江被差出、真偽明白御取捌キ可被為在処ニ、私ニ天朝之人ヲ被殺候儀、実ニ意〔恨〕恨之事ニ御座候、モフハ勤　王之二字相唱候儀出来申間敷、此儀ヲ若哉　朝廷ヨリ御問掛相成候ハヽ、如何御答相成候モノニ御座候哉、頓ト是限ノ芝居ニテ御座候、モフハ見物人モ有之間敷ト相考申候、

一此度　勅使御下向ニ付テハ、余之儀ニモ有之間敷、勿論大原三位公ト申セハ、聞ユル慷慨家ニテ、如何様之御議論出候儀モ難叶、若哉幕ニオヒテ猶予イタス儀モ有之候ハヽ、益憤言出候儀相違有之間敷、迚モ黄金共ニテハ打付被申間敷、弥

勅之通相調候得ハ、　御国家ニオヒテモ御大幸、　泉公モ御大切ニテ、此上モナキ御事ニ御座候、幕役ハ中々一ト通之スレモノニテハ手モ突掛ラレ候丈ケニ無之、イマタ幕情　御不案内之事ニ御座候間、チョットシタ事ニ御乗リ被成候ト直ニ突込、夫ヨリ見コナシ候間、一藩之力ニテ平押ニ押候テハ、弱居候幕ニモセヨ些六ケ敷、此方之御勢ヒ御扱次第ニテ、

勅之立ト立ヌトニ有之訳ニ御座候、余程幕府ニオヒテ六ケ敷申立候トノ評判ニ御座候、如何罷成候モノニ御座候哉、今共ハモフ相分居候半、遠海之事故全ク通不申、残情此事ニ御座候、私ニモ大嶋江罷在候節ハ今日々々ト相待居候故、肝癪モ起リ一日カ苦ニ有之候処、此度ハ徳之嶋ヨリ二度出不申ト明メ候処、何之苦モ無之安心ナモノニ御座候、若哉乱ニ相成候ハヽ、其節ハ可罷登候得共、平常ニ候ハヽ、譬御赦免ヲ蒙候テモ、滞島相願ヒ可申含ニ御座候、骨肉同様之人ニサヘ只事ノ真意モ不問シテ罪ニ落シ、又朋友モ悉ク被殺何ヲ頼ニ可致哉、老祖母一人有之、是計気掛ト相成居候処、大嶋ヨリ罷登候節迄存命致居候テ、満悦イタシ候ニ付、モフハ心掛モ無之罷登候テヨリ死去仕候ニ付、何モ心置コト無之候、迚モ我々位ニテ補ヒ立候世上ニテ無之候間、馬鹿等敷忠義立ハ取止申候、御見限可被下候、

〔大西郷全集第一巻所載写真にて校訂〕

一二七 〔仝上二〕

尚々当島代官三ケ条ノ仁政相発申候、一ケ条ハ大島同様書役ノ姦計ニテ、御注文品宜キ物ハ御渡シ不足ト相唱、当人ヘハ不相渡自侭ニ申受候処、其弊ヲ改人々注文品ノ通帳ヲ以テ御渡ノ節、引合候様罷成候由、二ケ条ハ寒中砂糖煎方頓ト取実モ無之、実ニ作人共込入候由御座候処、十分熟シ候上、春正月ニテモ宜敷候間、作人ノ心次第、煎方取付候様トノ趣ニ御座候処、一同雀躍イタシ候由ニ御座候、三ケ条ハ当島ハ大島トハ引違、正余計砂糖ハ過返シト申テ、三合代米被下候由、然処惣勘定不相済内ハ、右之過返米不被成下候処、手短ノ作人共ニテ、右之正余計ハ羽目ヲ以テ取引イタシ、惣テ一斤モ不作姦商ニ謀取ラレ候処、此度ハ内斤ヲ以正余計ノ者ヘハ、速ニ代米被成下、全不作人ヘハ不相渡、直ニ自分正余計ノ者ヘ配当相成筋ニ相決シ、是以大ニ勢立候向(本ノマヽ)ニ御座候、当島ハ小島ニテ一体弊モ薄ク、豪族モ無之、其権全無之申通ヲ以ナシ候塩梅ニテ、至テ仕安由ニ御座候、勤方内意ニ付テモ、前以進物等イタシ候儀ハ決テ無之、内願ハ申出候由ニ御座候得共、其弊無之由御座候、〇仮屋本ヘハ一度モ出懸ケ不申、度々申来候得共、却テ面働クサク掛リ合不申候、五里計モ相隔居候故、頓ト物音モ聞ヘ不申候、至テノ田舎ニテ仕合ノ事ニ御座候、大島ヨリハ余程夷ノ風盛ニ御座候、此度ハ遠島人同様掟抔ヘモ様付ニテ畏リ居申候、乍然島役迚モ大島ノ様ニハ無之、遠島人ト申テモ余リ卑劣ニハ取扱不申向ニ御座候、頓ト夷ノ風ハ取馴居候処、不馴(イ)不遠始終始テノ振合ニイタシ居候故、サセ(ス)ガ取ニクリ様子ニ御座候、〇当島ハ米国ニテ茶等少々持参候処、惣テ米ニ相成、二石許(計)モ相成候付、飯料等ハ全ク差支不申、乍残念品替等不致候テハ、此度ハ出来不申候故、俗人ト相成、雅風ハ出来不申御一笑可被下候、

一二八 仝上〔三〕

七月十八日付ノ貴札、八月十九日相届、御懇札難有拝見仕候、残暑無御痛御勤仕之段、大慶奉存候、随テ野生無異儀、岡前ト申辺鄙ニ罷在候間、乍憚御降意可被下候、陳ハ一橋・尾(越)ノ二公御出世ノ段雀踊此事ニ御座候、先便長文差上候付相届候半、若哉間違難計、当所

詰役方ヨリ上封イタシ貰候間、相違ハ有之間敷奉存候、其節申上候一件ノ趣ニテハ無之哉、又相変　登城ニテモ相成、御政事向御相談ニテモ御聞被為成トノ趣相成候哉、夫迄ニハ至リ申間敷、　粟田宮参　殿相成候様罷成候ヨシ、左様ノ向ニハ些六ケ敷、当分相國寺之房中廃庵ニ御住居ニテ、三度ノ御食事サヘ　伏見宮様ヨリ御続ニテ、御付一人罷在候由、長歎息ノ至ニ御座候、○先便長キ不綴之夢物語差上候通之時勢ニ御座候間、来春御参府ノ上ハ、決テ私儀一言モ御咄被下間敷、尤平常ノ訳ニテ御召返共御座候テモ、再上国ハ仕不申了簡ニ御座候、此世ノ中如何様保薬ヲ当候テモ、内症外邪不可治之極ニ至リ候間、三五年ヲ不出シテ変乱ニ入候義相違無之、其内ハ決テ当島ヲ出不申考ニ御座候、又当時余程奇虚之取扱而已有之候間、何レ二度押之御手数モ難計、其カラキコトハ酒塩ナトニテ追付丈ノ事ニハ無之候、御遙察可被下候、中々島元ヨリハ、御府内ノ事書面共ニテハ察スル所合不申候、ケ様ノ体ニ罷成リ、三十日モ我家ニ不在シテ、又遠島ト申ハ誠ニ稀成モノニ御座候、此場ニ相成、憤激シテ変死共イタシ候テハ、残恨ノ次第ニテ、決シテモフハ行迫ラス、命ヲ奉シテ死ヲ賜トモ、如何様共従容トシテ畏ル考ニ御座候、御安心可被下候、変事ニ当リ、色々了簡モ変ルモノニ御座候、マタ命モオシカルカト申人モ有之筈ニ御座候得共、惜ムヘ（キ時カ）（二字磨滅）ハ何ケ度テモ惜シム考ニ御座候、御一笑可被下候、○膝素立之御扱誠ニ驚候次第ニ御座候、夫迄ハ迚モ出来不申候儀ト相考居候処、案外ノ訳ニ御座候、先生カ先生故決テ冠ヲ振リ可申ト明メ居候処、実ニ御蔭ヲ以テ先生モ先生ニナリ、後世ニ残リ可申候、此度ハ昔日ニ打変リ何モ聞不申、当島ノ事ナトハ丸テ夢ニモ見不申候、乍然此度ノ代官ハ、余程最初ヨリカユキ処ニ手カ付模様ニテ、一同悦（ヒ）ミ居申候、○宮登喜一条色々御世話成シ被下難有御厚礼申上候、○女子出生ノ由、是ハ考ニ相違ヒ申候、先便ニハ決テ男子ト推計申上候処女子ノ由、何ニテモ乍幽囚モ祝敷御座候、召使置候女ノ儀決テ渡海不致様、尚又御頼申上候、桂氏（久武）滞島中ハ少シモ懸念無之候間、安心致シ居候様御申付可被下候、尤桂氏若哉上国共相成候ハヽ、大島迄ハ島替被仰付候筋御周旋相願申上候、桂氏大島ヘ罷在ラレ候テハ六ケ敷由承レ（リ候ヒ）（是ハカ）（文字不分明）奇妙ノ事ニ御座候、此旨御礼答如此御座候、恐々謹言、

八月廿日認　　大島三右衛門
木場傳内(清生)様

一二九　松木弘安より川本幸民江書翰第一

四月十六日貴書此書四月廿七日発、八月廿日比特堡(ペートルゴルク〔Petersburg現レニングラード〕)に相達置、拝見仕候、御揃益御安康奉欣賀候、生無恙去六月十九日ガラーヘン(Hague, オランダ名 's Gravenhage)ハーグヲ発し、廿二日別林(Berlin)到着、七月十日発別林、海路ニて十四日比特堡に着仕候、和蘭より一書差出、既ニ届候半、別林ハ存外奇麗なる都にして、広さハ巴里(Paris)・龍動(London)の様に無之候得共、人家の美成事ハ却て越可申、殊ニ諸学術ハ欧羅巴中第二ニハ下リ不申、且病院外所々へ参リ結構ニ驚入申候、既ニ此地へ参リ、帝城の近辺の別宮ニ一同旅宿仕、所々へ参見候所、ハブリーキ(Fabric)は英・佛の様盛に無之候得共、病院・貧院類ハ格別盛成事ニ御座候、右故ハシベリヤ(シベリヤカ)に人民甚稀にして、縦令人を殺せる罪有る者といへとも、刑せずして其他へ移し候程の事故、格別植民の事ニハ心を付居候由、且他術よりも医術ハ盛にして、此府に医甚多候故ニ、禄なくして医を業とせる者は容易に流行し難き由、○府中人口五十万の内七八万ハ、日耳蔓(German)人種なる由、実ニ市中を徘徊するに俄人(ロシヤ人)ならさる顔色の者多し、○此邦の婦人甚醜(Cathanna)、たま〳〵美なる者ハ他国の人なり、俄人の昔カタリナ外国ニ出られし時外国の婦人の美成を見て、所感有りて謂く、婦人の美なるハ人口の集散にかゝわるとて、他国の人を多呼れしとなり、今も其企有りて他人の入るを免し、出るを容易に免さず、是人口を増し、兼て魯人を他の欧羅巴人種ニ化さんとの企なりと云、○婦人の美成ハ和蘭辺多し、○此地ニて義経の事歴を探り候処、一向分明ならず、或時ミユゼンム(museum)博物館に参見るに、此館ハ禽獣を乾し堅め、左右の棚様の所ニ入置、玻璃を蓋ひ、諸人をして縦観せしむ、其外鉱類・貝類まで天地間万有の物を蔵せり、此内百物の有所にタルタリア(Tatar)のヂンキュスカン(Chunggis Khan)の城趾より堀出せりと云物有、金物或ハ土器の類なり、此諸品を熟視したれとも、何分日本めかしき物は見えず、偶蝦夷辺の物と見ゆるも有たれとも、韃靼ニも此様のもの有べし、蝦夷ハ多く韃の者に似て、物を造る故に証としかたし、或時シーホルト(Siebold)の言を以、辨慶の長刀の事を伺ふに、ツアルスコキーセロ(Tsakojeselo)セロハ村ノ義と云処に武器の博物館有りて、長刀様の物も有といふ、但此処ハ比特堡より

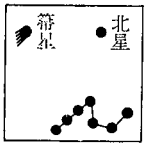
二三十里外にして往て見るを得ず、可憾チンキュスカンは俄帝の先祖なる事猶なしと云（俄語似韃ハ甚多）、四五日前魯人北京より帰る者あり、此人陸地より帰る旅行三月を経たり、北京より長城を越へ砂漠を渡る、洋中無人家テント家とする布也を以て寄宿し、キャクタ（Kakhta）より汽船ニて、貝加原（Lake Baikal）を渡りイルコッカ（Irkutsk）に至、イカザン（Ekaterina）云々の道筋なり、皆馬車ニて行、モスコウ（Moscow）近辺少許の所より汽車始て有り、○此頃北京ニハ英佛の兵皆退、唯三十人の洋兵残る、是ミニストル（minister公使）所属の人なり、○南京賊を助て南京賊を攻む、賊屢（破）被る、然れとも未た殲滅に至らず、新聞紙に合戦せる支那地名多けれとも、支那訳字を知らされバ、不（マ）載に此（マ）、○此地へ着後手をあぶりタシと思ふ程の寒さハなけれとも、綿入一枚より薄き事なし、常に六十四五度上下なり、但外出の時毛髪にてハ暑に堪へ不申候故、蓋ひなしの車ニ乗る時は笠を冠り申候、英・佛・蘭・孛・魯の間、其外出毎に車に乗りて出さるハなし、其内四五度も歩行せる事有り、○カラフトハ界論甚難し、五十度にて定むるを不好、終に両方よりカラフトに会して議せんと云、○魯ハ五ケ年定海（上）に有る佛のミニストルを害せしより、英・佛北京を助て南京賊を攻む、賊屢（破）被る、然れとも未た殲滅に至らず、新聞紙に合戦せる支那地名多けれとも、支那訳字を知らされバ、不（マ）載に此（マ）、○此地へ着後手をあぶりタシと思ふ程の寒さハなけれとも、綿入一枚より薄き事なし、常に六十四五度上下なり、但外出の時毛髪にてハ暑に堪へ不申候故、蓋ひなしの車ニ乗る時は笠を冠り申候、英・佛・蘭・孛・魯の間、其外出毎に車に乗りて出さるハなし、其内四五度も歩行せる事有り、○カラフトハ界論甚難し、五十度にて定むるを不好、終に両方よりカラフトに会して議せんと云、○魯ハ五ケ年延期の事を他国の意に従ふと云、其他の論も亦然り、○江戸に大成アカテミー（蕃所調所）を建たる事、既に此地へ聞へたり、○五月頃英のミニストルを殺さんと謀る者有りて、之を日本政府ニて捕へ、刑したりと云新聞紙を見たり、是如何成事やらんと皆案居申候、○来廿四日頃ニハ此地出立、汽車にて陸地より別林に再到し、是より葡のリスポン（Lisbon）に至り、佛船ニてシュエス（Suez）を越へ帰朝に及ふへし、右ニ付、最初パリスにて余程早き積なれとも、何れ十二月中ニ相成可申候、旅中目撃の次第悉く記し度候得共、尺紙ニ尽し不申候故、投筆仕候、謹言、

一三〇　仝上第二

八月廿一日比特堡レセルフヌパレース（Reserve Palace 冬宮）にて記ス、右パレースはネツ河（Neva River）に望めり、常に前川に汽船往来し、汽を漏す声ピイ〳〵、冬ハイヘンブル（evenveel）の月より水凍り、通船し難く、今ハ船橋所に懸り居候得共、冬ハ之を除き氷上を往来す、或夜窓を開き頭を出し、天を望むに北辰頭上に有り、暁ハ三時に日出、晩ハ九時に日没す、故に冬の昼夜の長短の差可思、○西洋田米（回カ）行不相調し

て、蘭行に弁すへき由、御伝聞候得共、此節欧中巡視の上始て知る事有り、曽て和蘭へ参り書を買んとするに、全備せる寄書一本も無之、且本国の人といへとも、皆仏書・独書等を読、小児といへとも仏語・独語を学ひ、蘭語を知らさるを恥トす、故に、蘭語ニて著述する物偶召(有カ)よりといへとも、買て見る者無き様なれは、自然書も減し、其国外へ出れは、蘭語を知る者壱人もなく実ニ衰微驚入申候故ニ、蘭にて格別の書無之、強て尋れは、仏書抔を持来り、書賈も亦自ら嘆キ居候、又此地の諸学校に至り見れは、書生の読む書ハ皆他国の書なり、其他のハブリーキ等(Ubliｏ公衆図書館カ)も甚小ニして見るに堪えす、蘭の諸事を英・佛・獨に比すれは百分一より下るへし、故生等帰朝の後も再ひ初学の者ニ蘭学を勤(勉)むるの意なしと存居候、曽て英・佛・獨の間にて我等蘭書を読メりと云時、学者之を聞て眉をひそめし事多け(異通)れは、後は云を恥て蘭書を読と云事を云す、故ニ津田・西(周)決して和蘭に到るへからす、其上蘭人の性容(底カ)にして胆小、国貧にして物価貴し、生等始て其学と人の賤きを知申候間、右両氏決して此国へ到るへからす、其他の国ハ皆佳なり、龍動甚宜し、但書の価巴里斯最廉にして著書最多し、

八月一日夜十二時、北方彗星を見る、前日より出たりといへとも、此夜初て見る、御国ニて如何、



一三一　仝上第三

一三一ノ一　松木弘安より川本幸民へ贈る書

別紙、ヘトルヒュルクより差出候積ニ御座候処、御用状出不申候ニ付、此巴里斯より差上申候、偖前別紙八月廿一日認、廿四日ペトルビュルグ(Petersburg)発足、別林へ二日滞在、廿九日巴里斯着、来十二日晩此都発辺仕、葡へ越候積ニ御座候、ペートルヒュルクを発候時分ハ、蘭へ立寄候様子ニ御座候得共、蘭より強て相断ニ及、談判向残之事、書簡を以て返奏ニ及ひ申候、別林より直ニ巴里斯ニ差越候事、○此都へ着後我国の評判甚宜しからす、此新聞紙の訳ハ、箕作(秋坪)より箕作(阮甫)先生方へ差送リ候趣ニ付、御借覧可被下、右様の義ニ付、佛にて大君の上にセイネマエスティの語を加へ不申、其外の取扱も先度差越候時より、至て軽蔑致し候様子ニ相見へ

申候、右新聞紙の様子ニても、軍艦を差向る手筈ニ相成居、既にシュエスを発し候由、内実承り候処、是欤京都ニ差越、皇帝を責て免許を乞候由、彼れ京へ参り候ニハ船を大坂へ寄セ、大坂より書翰を取次、されは直ニ京へ差越候積、〇此節佛ニて五ヶ年開港延期済て、代りとして薫を交易の為に開き度申候外、右の代りとして種々の望有之、いつれにしても今日の我国ノ状態にてハ、平穏の計ひ甚難くと存候、欧羅巴にて最怒り候処ハ佛なれは、兵端を起すも最、〇前書申上候津田・西其外都合廿人許、此中ニハ医師有之哉ニて、和蘭アムステルダム(Amsterdam)江造船其外の伝習として差越候様子、慥に承り申候、書中ニて未俄ニ御決定とハ不存候故、和蘭へ伝習御遣しの事御取止ニ相成候由申上度、既ニ発程ニてハ無拠次第ニ御座候、撰師善悪の事を御一統御心にも可有之候得共、初日伝習の事なれは、取慣御国より先へ参り見御方可然様の評議ニて、御遣しに相成候事と被成と愚評仕居候、〇兼て御頼の舎密試薬類、此地ニて昨日御買入願置候、試薬不残揃居候ニ付、帰朝の上御試験御果可被下、謹言、

一三一ノ二

閏八月十日巴里斯ガラントホテルにて相認む

欧より通信仕候此書最後ニて、蘭より御書差上申間敷、且此書御覧の頃ハ、既ニ帰朝前ニ相通可申、余事絮々申上候より、近日拝顔の上剔燈会談を相果申候、帰朝ハ早けれハ十一月中旬、遅けれは下旬と相察申候、欧羅巴を現視仕候得ハ、益我国の危難怖度候処に、近頃の風習ニてハ、如何とも帰朝迄之間無事トハ被存不申、無思て鄙従井底に在て此文明の彊国を不知、吉度幢臂を張らんとするとて困り入申候、慨談尽不申候故、拝晤迄申残申候、

一三二〔八月二十一日近衛忠熙書翰〕

尚以莫大之御用繁ニテ、乍毎代筆仁恕可給候也、

秋暑難去候、弥勇健珍重候、抑先便申進置候彼四姦臣一件、実ニ不容易、心配段々周旋ニ及候得共、中々六ケ敷　御次第、不一方大心痛、尚亦段々之周旋ニテ、漸　御承知ニ相成、夫々御咎被　仰付候事ニ候、久我〔建通〕内府公并千種〔有文〕少将・岩倉〔具視〕中将・富小路〔敬直〕中務大輔等各蟄居辞官落飾等被　仰付候間、先々安心仕候、其許ニモ御安堵可被成候、誠ニ先時ハ心痛之余リ、御勘考之儀

厚御頼申進置候得共、先々右之次第ニ相成候尽右辺御懸念給候ニ及不申候、何モ御安心之様、早々申入度如此候也、

八月廿一日　〔近衛〕忠熙

嶋津三郎殿　内密々早々

御右

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一三三　近衛家御両殿様ヨリ御直ニ御渡之御書取

天覧之外決シテ他見致間敷候間、御趣意在体ニ打明、御書取給候様、呉々不洩段、御安意可在存候事、

〔閏八月カ〕廿一日　忠房

忠熙

三郎殿

一三四　徳川十五世紀抄

〔一三四ノ一〕

茲ニ又英国ノ女帝ハ、文久二年八月廿一日〔神奈川県〕生麦村ニ於テ、島津三郎ノ為メ撃殺ニ逢ヒタル国民ノ仇讐ヲナサントシ、先ニハ幕府ヲ責ハタキ、遂ニ贖金四十五万元〔金数誤レリ、前キニ記シタルカ如シ〕ヲ奪ヒ、再ヒ自国ノ軍艦十艘〔十艘ハ誤レリ、七艘ナリ〕ヲ薩州鹿児島ニ来シ、六月廿八日応接ニ及フ次第ハ、去年八月廿一日、閣下ノ父タル島津三郎駕籠脇ノ者、東海道ニテ罪ナキ自国ノ商人ヲ殺セシ事、閣下已ニ好ク知ル所ナリ、然ニ其事ニ関セサル外二名ヲ斬リ、一名大傷ヲ蒙リ、又一人ノ婦人ハ漸ク逃延ヒタルモ、是又閣下ノ知ル所ナリ、此人名ハ左ニ記載ス、〔Charles Lenox Richardson〕カルレリ〔Borrodaile〕キスリチャルドソン死ス、〔Woodthrope〕ホルデイレ逃去、〔William Marshall〕ウイルレムカラルケ〔Charles Clark〕深疵、ウイルレムマルセル深疵、右ニ掲載スル所ノ死亡人、又斬掛ケラレテ逃レシ者ノ為メニ、三郎ガ行列中ノ罪人ヲ求メ出シ、我等ガ前ニテ其首ヲ斬落シ、又切害ニ逢タル者ニ分配スベキ金トシテ、四万五千ポンド〔誤レリ十二万元ナリ〕ヲ贖フベシト、談判書ヲ島津侯ノ執政川上但馬〔久通〕ヘ渡シケルニ、薩藩ハ兼テ覚悟ノ事故、更ニ恐愕ノ体モナク、同廿九日英国軍艦提督ニ答ヘケルニ、人ノ生命ヨリ貴キ者アラサレハ、人ヲ殺ス者ハ必ス捕ヘ死刑ニ行フ、是当然ノ理ナルニヨリ、我カ方ニモ昨年来罪人ヲ捕ヘントスルニ、方今日本国諸侯ノ中ニ乱ヲ起ス者アルヲ以テ、斯ノ如キ罪人ヲ隠スニヨリ、未ダ捕ヘサルナリ、又島津三郎江戸ニ到ルハ、外人ヲ殺ス為ナラズ、国王ト政府ノ仲人ナラントシテノ往来中ユヘ、殊更人ニ殺害ヲ命セサル事分明ナリ、右

ノ罪人ヲ捕ヘタルトキハ早速長崎・横濱ノ英国船将ニ告知ラセ、自カラ来ツテ其刑ヲ見ベシ、此事我方ニハ先祖ノ神霊ニ誓ヒ、国辱ヲ思ヒ毫モ偽ル事ナシ、然レドモ元来貴国ノ人民、我国禁ヲ犯スヲ以テ事ノ此ニ及ヒシナリ、去リナガラ人ノ生命ヲ害スルハ、尤モ大罪ナルハ知レリ、総テ指揮スル江戸政府ニテ、外国ノ条約中ヨリ、古来ヨリ我方ハ旧律ニ従ヒ計ヒタル者ナリ、畢竟大君政府ノ我等ヲ苦シマスル策ナルベシ、若シ然ラサレバ、必ス御老中ヨリノ書翰アルベ（シ脱カ）、斯ノ如キノ悪計アルヲ以テ、貴国ト我等トノ間ニ争論ヲ醸セシ事、誠ニ恐愕スル所アリ、蓋シ此大事件ヲ決センニハ、江戸政府ノ役員ト我政府ノ役員ト互ニ君ガ眼前ニテ是非ヲ論シ、罪人ノ一条ヲ取局メ、償金ノ事ヲ決スベシ、総テ我政府ハ江戸政府ノ命ニ従ヒ、諸事ヲ取行ハントス、君等ガ書翰ニ載スル所、我方ニハ隔意ナク、明カニ答フル事斯クノ如ク、薩摩島津修理大夫執政川上但馬自記ト書キ認メシ書翰ヲ英国公使ニ送ルト雖モ、文章皇国文字ナル故、訳官ヲシテ翻訳シ、其文中ヲ推察シ、予シメ変ノ起ルヲ知リケルニ、七月朔日再ヒ島津侯ヨリノ使節小船ニ乗リ来リシニ、水師提督ハ使節ニ面会セスシテ帰シ（編者曰、使節ト倶ニ刺客乗入ラントセシヲ言フ乎）、又島津侯モ愈々変ニ至ルヘキ由国中ニ布令シ、海陸共ニ準備ヲナシ、何時ニテモ交戦ナスベキ彼ガ様子ヲ伺フニ、英国軍艦ハ其夕方一備甲比丹ノ命ヲ得テ、合図トトモニ乗廻リシガ、翌二日未明ノ頃鹿兒島之城下近ク（編者曰、城下近ク云々誤レリ、城下ヨリ凡三里余隔リタル重高郷ナリ）進ミ来リテ、英船コケット号（Coquette）ハ島津侯ノ蒸汽コンテス号（コンテスト号、白鳳丸）ヲ奪ヒ、アルキュス号（Argus）ハシルジョルジク（青鷹丸）レー号（Racehorse）ヲ奪ヒ、レーホルス号（天祐丸）ハエンケラント号ヲ奪ヒテ遙カ沖ノ方ヘ退キケルヲ、島津勢ハ海岸台場ニアリテ、此有様ヲ見ルヨリ、合図ヲ定メテ撃発ス、然ルニ英艦ヨリモ発出ス、大砲之音天ニ響キ、潮ニ逆波ヲ起シケリ、這ノ日俄ノ大風雨ニ、島津勢ハ天幸ナリト勇ミ悦ビ、第一番ニ台場ヨリ次第ヲ追テ打出ス、其弾丸彼レカ軍艦ニ中リテ多ク破裂スルニヨリ、英人大ニ恐レヲナシ、先ニ奪ヒシ三艘ノ船ヲ残ラズ焚ケリ、此時城下ノ辺リ、彼レガ打出ス弾丸ノ頻リニ破裂シテ、人家一度ニ燃上リ、折柄南東ノ烈風（南東風ニ非ス東風ナリ）ニ炎焔ハ空中ニ散乱シ、港ニ五艘（琉球船大小三艘、和船大小二艘ナリ）備ヘタル琉球国援兵ノ大船ニ吹着ケルニ、忽チ黒煙空ニ覆ヒ、瞬間隙ニ焼滅スルヲ、勇気烈シキ島津勢少シモ撓マス、打出ス尖キ

数発ノ大砲ニ、英船半ハ損害シ、又甲比丹ショスリン(Joshing)ク、指揮官ウイルモット(Wilmot)ノ二人戦死ナシケルニゾ、英船ハ錨ヲ上ケ、急ニ港ヲ退キツヽ、人ナキ浦ニ(編者曰、人ナキ浦云々、桜島小池村ヲ言フ)碇泊シ、同三日未明(未明ニ非ラス、午前ナリ)ニ再ヒ、雨中(編者曰、雨中ニ非ラス、此日ハ晴天ナリ)ヲ厭ハスシテ英船備ヲ正シ、港ノ方ヘ入来ル(編者曰、港ノ方ニ入来ル云々誤レリ、退去セント出航シタルモノナリ)ヲ、島津勢ハ昨日ノ如ク、暫シ烈シク打合ケルニ、英船今ハ叶ハジトヤ思ヒケン、城中見懸ケテ曰砲(曰砲ニ非ラスアルマストーン砲ナリ、海軍雑誌ヲ見ヨ)ヲ打放ツテ、錨ヲアケテ引退クヲ、猶ヲモ得タリト台場ヨリ頻リニ砲発ヲナセシカハ、這ニ一艘ノ英艦ハ弾丸ヲ避ント狼狽シ、錨ヲ抜クニ暇ナク、遂ニ其錨ノ鎖ヲ切捨(錨索ヲ断タルハ退クトキニ非ラス、前日開戦ノ前頃ナリ)逃去リケルニ、薩兵ハ其錨ヲ奪ヒ錨ハ後日、奉ヒタリ、三度凱歌(編者曰、諸所砲台各衛隊毎ニ捷声ヲ揚ゲタルハ、其数ヲ知ラス)ヲ挙ケタリケル、其後両国和親ヲナシ、島津侯ヨリ人ヲ殺セシ罪人償ヒ金二万元ヲ英国ニ与ヘ、又英人等先キニ奪ハレタル錨ヲ請ヒケル事屢ナルニヨリ、戻シ与ヘラル、然ルニ万国共ニ敵艦ノ錨ヲ奪ハ、是ヲ新聞紙ニ掲載シ、四方ニ布告シ、其戦争ノ勝利ヲ示スニ、敵人ハ深ク之ヲ恥トス、和議成テ後、敵人其錨ヲ求ルニ若干金ヲ出シ、之ヲ賜ヘキヲ、今英人ノ一銭ヲ費スシテ取戻セシ故、島津侯ノ高義ニ感セリト言フ、未聞ノ時ニ当リ、島津侯モ各国ノ公儀ヲ知ラスシテ容易ニ錨ヲ返セシハ、鎖港攘夷ノ一徹心ヨリ起リシナラン、去程ニ島津中将ハ、今般英艦ト戦ヒノ始末ヲ落モナク奏聞アリシカハ、叡慮斜メナラス、薩長ノ両藩ヘ御感状ヲ賜ハリ、重ネテ島津三郎(去年四月御退京後、重ネテ上洛ヲ促サル、事数回ナリ、之レ長藩横暴鎮静、其他内政整治ノ為メナリ、詳ニ第十八巻ニ記載ス)ヲ輦下ニ召レ、這ハ夷狄親征ノ事ナルベシ、

一三四ノ二

八月二十二日(編者曰、廿二日ニアラス、廿一日ナリ、同日前後ニ発ス)大原卿ニハ、江戸ヲ発シテ帰洛アリシニ、島津侯ハ勅使ニ先達テ、去ル廿日(編者曰、廿日ハ誤レリ、廿一日ナリ)江戸ヲ発シ、武州生麦村ニ至リシ時、英国ノ士官(編者曰、士官或ハ商人ト言フ、分明ナラズ、蓋シ商人ナラン)馬上ニテ駈来リシカ、頓テ島津家ノ行列ヲ乗切ケルニ、先供ノ士卒其無礼ヲ怒リ、即座ニ二人(編者曰ク、三人ニ非ラス、一名ヲ斬殺シ、一名ニ傷ケタリ)斬殺シ、英夷ガ無礼ノ大略ヲ幕府ニ届テ、其侭威気整々トシテ、京師ニ赴キケリ、

又曰ク、七月英国軍艦十艘(十艘ニアラズ、大小七艘ナリ)ヲ率ヒ、薩州鹿児島ニキタリ、逼テ曰、生麦之事日本政府ト我英国之間ハ事已ニ成ルト雖モ、戒害ニ逢フ士官ノ妻拏ヲ養ン為メ、又貴藩ヨリ贖金二万元(金数誤レリ、前ニ記シタルカ如シ)ヲ得ン、敢

テ問フ、何ヲ以テ我英人ヲ殺ス、薩藩将ニ答フル所アランントス、英人妄リニ我カ兵船ヲ奪フ、適々大風雨、我ガ兵乗シテ之レヲ拒ク、砲撃数合我兵終ニ大煩ヲ以テ英船ヲ撃チ卻ク、英人又鹿児島ノ市街ヲ焼テ去ル、居ル幾何モナク英人又再挙ヲ図ラントス、島津家即チ人ヲ横濱ニ遣リ、金二万元（金数誤レリ、上巻ニ記スルガ如シ）ヲ幕府ニ借リ、之レヲ与ヘ事夷ラク、初メ我兵ノ英艦ヲ打ツ、英人狼狽、之ヲ避ントシテ一艦錨ヲ抜クニ暇アラズ、立トコロニ錨縄ヲ絶チ、錨ヲ棄テ去ル、我兵即チ之レヲ奪フ、是ニ至テ英人〔Glover〕懇請（長崎在英商ガラバナルヲ以テ懇請セリ）シテ之レヲ得タリ、凡ソ万国敵艦ノ錨ヲ奪ヘハ、之レヲ四方ニ布告シ、以テ其戦勝ノ栄ヲ示シ、敵人ハ深ク之ヲ恥チ、事成ラクニ及ヒ、往々若干金ヲ出シ、之ヲ贖フ、今英人一銭ヲ費ヤサスシテ之レヲ得ル故ニ、大ニ我ガ高義ニ感ズルト言フ（惜ヒ哉、当時夷情ニ疎ナル故ナリ、千載ノ遺憾トス）、

一三五〔八月二十五日近衛忠熙書翰〕

一三五ノ一

尚々時候専御自愛ト存候也、

昨廿四日夕到着之御答書之趣、何モ委細ニ承リ候、先々一両日漸ク秋気相催候、弥以御勇猛之事、珍重不斜存候、段々被尽忠誠御周旋之程、不一方感悦候、就テハ東武モ追々正議相顕候模様ニ付、何卒其許ニハ当地御模様モ在之候但、

勅使ニ無御構、早々御上京之様存候、右申入度、再答旁申残候也、

八月廿五日　　忠熙

嶋津三郎とのへ　　答

御下

一三五ノ二　書添

〔徳川慶恕〕尾前中納言・〔同茂徳〕大納言推任之御沙汰、且自国政務掌之儀、且又〔山内豊信〕松平容堂之儀モ、伝奏ヨリ老中ヘ　御沙汰仰出候事ニ候、此段モ御心得ニ申入候事、

別紙ニ申入候伏見一条之事、何モ承候、早々取計長門守江被渡候書取、伏見一条ハ取除之方ト取替ニ相成候様可致、何モ御安意可給候、何モ早々要用ニテ御答申入候、実ニ何カ種々大心痛之事ニ候、併先々四姦二宮女之処、周旋致相整候段ハ安意ニ候、何分御上京之上巨細御咄共可申承ト御待申入候、追々冷気ニ相成候得

ハ、持病度々可発ト甚以心痛候、尚辞職辺偏ニ〳〵御取持之儀□〔欠〕置候跡職之処、甚六ケ敷ト心配候、鷹〔鷹司輔熙〕前右公之所暫時ニテモ被　登用候様、且御為方ニモ御宜ト存込候事ニ候、〔一条忠香〕一左公之所ハ当時之所ハ如何ニモ掛念候事ニ候、何モ御勘考置可給候也、

八月廿五日　〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一三六〔仙臺藩士遠藤文七郎書翰〕

一往年ヨリ夷賊神州ヲ侮慢シ、国俗ノ欲セサル貿易ヲ通シ、確乎タル祖宗ノ国典ヲ紊リ、自己ノ狼心ヲ逞スルニ至リ、森々然ト天下万民ノ膏血モ既ニ尽候勢ニ相見得候所、乍懼叡明ヲ以、此巨害ヲ深ク被遊御洞察、夙夜被為悩叡慮ヲ候義、実ニ恐々懼々ノ至リ奉存候、既ニ此時ニ及ヒ候テハ、全ク彼夷賊ヲ不被遊御掃攘候テハ、終ニ全州手ヲ束ネテ、文身左衽ノ大恥ヲ蒙リ候義ハ、必然ノ勢ヒニ御座候処、

天命未不墜地ニ、当時天下ノ諸侯同轍一心、攘夷ノ　聖詔有ランコトヲ寤寐之間モ渇仰仕居候所、即此大機会実ニ求メテ難得所ノモノニ御座候間、帰嚮ノ勢ヒヲ不為失、征夷反正之大号令ヲ諸道ニ被相下、断然大挙ノ御計策ヲ被相決、千古無之所之　御国辱ヲ被為遊御洗濯御鴻基御再造御中興之御功烈、魏然ト被為在御建立、赫々タル皇威ヲ海外ニ被為耀候ハヽ、外ニハ万億年モ夷賊覬覦之邪念ヲ絶チ、畏怯シテ四方賓服仕、天下其風采ヲ想聴シテ、自ラ納貢仕候事ニ可有之、内ニハ泰平驕奢佚遊ノ弊習モ不促シテ変易シ、即神州固有之質素淳朴ノ美風ニ転移シ可申、左スレハ一挙シテ御両全之可被為　在御至計ノ義ト、乍恐愚考仕候、然ニ其期ニ相及候節ハ、兼テ御賢察被成下候通、兵甲士馬不整義ニハ候ヘ共、謹テ叡慮ヲ遵奉シ奉リ、躬自矢石ヲ冒シ、辱モ天下諸侯ノ巨魁トシテ、折衝ノ力ヲ励シ、貞亮忠純ノ巨節ヲ相竭シ申シ度微志ニ御座候、然ルニ　御大計被相決候御機会、実ニ

神州之興衰治乱ノ際ニ関係仕居、至極御大切之御所置

ニ、毫末モ御籌略其機ニ応シ不申候節ニハ、即夏順逆ノ名分其所ヲ異ニ仕、大事去テ又不出来事ニ罷成可申勢ニ御座候間、乍恐深ク此所被為尽御廟算、可被為在御定策義ト奉存候事、

一累世辱モ左近衛府ニ被任候所、是迄偃武之時世ニ遇シ居、乍存職務ヲ相尽可申由モ無之、虚シク其任ヲ相守リ居候処、既ニ当節ト罷成候テハ、災変不測ニ相生シ候ヤモ難計勢モ相見得候処、其期ニ至リ候テ、府之職務ヲ誤リ候義ニテハ、実ニ其罪ヲ不可償義ニ候間、先以第一夷賊近畿之辺海侵掠シ、京師是レカ為ニ騒擾仕候時節、且ツハ其釁ニ乗シ、盗賊都下ニ聚リ相漂掠シテ、人情洶々タルトキニ至リ候ハヽ、即チ袂ヲ投シテ甲兵ヲ振起シ、乍恐

鳳闕ヲ奉守衛、聊

御宸驚之御憂患不被為

在候様微忠ヲ尽シ、居職ノ責メヲ相免レ申度存念ニ御座候事、

一東奥沼海之義ハ、固ヨリ地方曠大之事ニテ、殊ニ封境ノ義ハ、悉ハ海岸ニ相接シ居候境界ニ有之、万一為夷賊之鹵掠被致候義ニテハ、私之愧恥ハ指置、即神州ノ御恥辱ニ罷成、且

祖先ノ微功ヲモ相汚シ候事ニ至リ候間、別シテ攘夷ノ聖詔被相下候節ニハ、封内ハ勿論、仮令応援兵ヲモ差遣シ、秋毫モ東奥ノ地境ニ於テハ、入侵之患無之様、家国之微力ヲ尽シテ鎮静仕度義ニ御座候事、

一夷賊御征伐相成候節ハ、固ヨリ彼ヨリモ暴兵ヲ挙ケ、軍艦等差向、風濤ニ従ヒ諸州ノ境界ヲ不択、戦闘ヲ挑ミ可申、即於内ニハ国主郡司等防禦之術策ニ労思シ、暇隙ヲ不得、就テハ人民モ兵役ニ充ラレ、自ラ人情モ騒然タル事ニ赴可申候所、其釁隙ヲ幸トシテ、州郡ヲ漂掠シ、乍恐

詔命ニモ違ヒ奉リ、不軌ヲ謀リ候奸賊蜂起仕候義ハ、必然之勢ニ候処、其節ニ臨ミ候ハヽ、不取敢其方面従ヒ、東奥之境内ハ勿論、他ノ州郡ナリトモ兵力ノ及候限リハ征討ヲ加ヘ、捷書ヲ奉

闕下度微意ニ御座候事、

別紙

夫当天下偃武ヨリ已降、既ニ二百有余年封東奥ニ襲シ居、当時ニ至迄連綿家国血食仕、辱モ飽迄

天恩ニ浴シ居候、大徳ヲ報シ奉リ度存念専ニ御座候得

共、実ニ昊天無窮ノ事ニ及不申義ニ御座候所、時勢既ニ望至所ニ逼リ候義ニ候間、乍不肖事ニ臨ミ、股肱ノ力ヲ竭シ、忠興ノ節ヲ致シテ腥膻ノ醜虜ヲ海外ニ攘除シ、社稷ヲ安寧ニシ奉リ、上ハ

天祖

天孫之　神慮ヲ奉慰、亜テハ旦夕被為悩候

宸襟ヲ安シ奉、下万民ノ疾苦ヲ除キ、乍恐

皇道御興復ノ御偉業ヲ奉補翼、干城爪牙之微力ヲ相尽シ申度存念ニ御座候間、何分此義別段之御懇情ヲ以テ、深ク御省察御体認被成下度奉仰願候事、

文久二年八月二十八日　遠藤文七郎〔允信、仙台藩士〕

一三七〔四姦二宮女ニ関スル近衛忠熙密書〕

呉々不束之文言御推察御賢考頼入候也、

極密々申入候、其元御周旋段々御苦労ニ存候、於忠熙モ

朝廷正議相立候様、段々心配之義ニテ、先々四姦臣之処少々模様付候事ニテ、久我内府近々辞官、千種・岩倉・富小路ニハ近臣被　免、遠臣ニ被　仰付候迄ハ、周旋仕候事ナカラ、

上ニハ姦人之讒ヲ御採用ニテ、兎ニ角言上仕候事情ニ御疑心深被為在候テ、何事モ口外ニ難及義数多、実以悲歎之事ニ候、役人衆ニモ実意之人体無之、先中山〔忠能〕・正三〔正親町三条実愛〕計之義ニテ、何分ニモ

朝廷ニハ御人少之義、兎角仕方無之候、併役人衆之外ニハ随分正論之面々モ在之候ヘ共、迚モ可被登用　御模様ニ無之、不一方痛苦仕候、先々　御六ケ敷　御時宜ヲ不顧、四姦臣且宮女二人之段々姦業ヲ言上ニ及、先々前文之通ニ取計ヒ、宮女ハ下宅ト申場合ニ及候事、何卒今一段各罪状相糺シ、可然屹ト取計ヒ度苦心ニ候ヘ共、何分ニモ従来厚　御寵之面々之義、実以甚々御時宜御六ケ敷、是ニハ不安寝食苦心悲歎之事ニ候、且亦前関白久我内府ニハ、当春久和州・安對州抔同腹ニテ、彼九條之廃帝之古例ヲモ探索之次第、実以不容易国賊之義、唯一通リ之義ニテハ衆人屈腹不仕、何卒越前上　京迄ノ処ニテ、イカニモ薩長ヘ被下候

叡慮之符合之　朝議ト衆人奉仰候様仕度懸念、彼保元・平治・承久・應仁等之　御衰微モ此機会ニ消散、如何ニモ　朝威天下ニ相立候時節ト、深心配仕候事ナカラ、俗ニ申多勢ニ無勢、

朝廷可然輩無之、歎息仕候、呉々
上之処甚々御六ケ敷、迚モ微力之質取計ヒニ難及、痛苦仕候、呉々口外仕間敷義ナカラ、極内々御洩シ申入候、此上ハ兎モ角モ見当難付事ニテ、微力之質幾重ニモ痛心候、元来不好事ニハ候ヘトモ、関東ヨリ前関白以下姦臣屹ト御咎被　仰付候様申来候辺ニ仕度、左ナクテハ迚モ〳〵姦ハ深ク手ニハ合不申、実以痛苦候、幸所司代交代之折柄故、可然人体所司代ニ被申付、右之人上京ニテ咎辺言上ニ相成、少シモ動揺無之様仕度、且亦　勅使ヘハ一橋・越前等ヨリ申含候様仕度、呉々存候事、併大原之処久我辺格別ニ採用之義故、其元ヨリ深々御説得ナラテハ不叶事故、右辺モ呉々御勘考、スヘテ御賢察御周旋之程、深厚ニ御依頼申入度存候事、
此儀決テ当職辺ニテ申入候訳ニテ無之、親族之辺ニテ在様打明極秘ニ申入候、決テ忠熙ヨリ申込候抔、
勅使ヘ洩候テハ不宜御含置希入候、代質其上例之乱毫書損之侭差出シ候事、　〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕
内密々　　忠熙
島津三郎殿
御右

一三八　薩長確執説

天下之乱階ヲ啓キ、国家紛紜遂ニ一統一新之期〔機〕会ニ至ル、其依テ起ル処、一朝一夕之事ニアラサルモ、唯ニ長州人カ狡黠詐謀貪欲ニ在ルハ、天下普ク知ル処ナリト雖トモ、又世人ノ更ニ探知シ得サルノ密謀姦計ハ、恐ルヘク驚クヘキ事尠カラサルヤ言ヲ俟タス、即チ長人ノ黠智ヲ以テ薩ノ力ヲ殺キ、而シテ幕府ヲ顛覆シ、大権ヲ掌握セントスル其工智、鏡ニ照シテ見ルヨリモ明ナリ、且ツ両度ノ征討或ハ馬關ノ外舶ヲ妄撃シタル末、窃ニ和親ヲ結ヒタルノ始末能ク忍耐シタルモ、大謀アルニ由レルヤ疑フヘカラス、実ニ恐ルヘキハ長人ナリ、後世必ス足利尊氏ト徹ヲ同フスルヤ論ヲ俟タス、長州人ノ常言ニ、安藝ハ元来毛利家ノ祖国ナリ、時至ラハ之ヲ復領セン云々、此言長防士民ノ常言ナリト、祖先元就ハ中国十ケ国ノ管領タリシニ、輝元關ケ原ノ役ニ没収セラレ、僅ニ長防二ケ国ヲ保ツハ、徳川家ノ所為タリ云々、
合衆国人浦賀ニ侵来ノ時ヨリ、機会近キニアリト窃ニ喜ヒタリト、其頃ヨリ久坂玄瑞〔通武〕・桂小五郎〔木戸孝允旧名〕等ハ各藩ヲ

煽動シ、或ハ大和十津川辺ニ商法ノ名ヲ仮リ、国製ノ塩ヲ送リ、人民ニ安価貸与シ、人心ヲ取リ、而シテ京師ニ尚手ヲ入レ、宮堂上方ヲ党与セシメタルコト、同時ヨリ桂小五郎ナル者ヲ江戸其他ニ出シ、各藩ニ同志ヲ募リ、或ハ浪士ト結合シ、謀ル処少ナカラス、桂ナルモノハ撃剣家齋藤彌九郎〔善道〕カ門ニ入リテ、四方ノ同志ヲ集メ、或ハ水戸又ハ上州辺ノ浪士ヲ語ラヒ、安藤閣老ヲ坂下ニ刺シメタリ云々、

井伊氏外櫻田ニ刺レタル後、幕威忽チ衰ヘ、乱階茲ニ開ケタリ、此時長州人ハ志望ヲ達スルノ時至レリト、益々奔走シ謀レリ云々、

長州家老宍戸備前〔親基〕ナルモノ、藤森泰蔵ニ就テ治乱ノ所置ヲ談シ、後ニ藤森ハ同人カ為メニ殺サレタリ、其残忍酷白ノ人情知ルヘキナリ、

家臣永井雅楽〔時庸〕ト言ヘルモノヲシテ幕府ニ建言セシメ、専ラ開港説ヲ立テシメ、歓心ヲ買ヒ、隠ニハ攘夷ヲ鳴リ、或ハ薩藩カ公武合体ノ論ヲ誹譏シ、離間ノ策ヲ用ヒタリ、薩人之ヲ知ラス、奸計ニ陥リタリ云々、

薩人ノ中ニモ党派分立シ、国中和セス、誠忠派ト唱フルアリテ大ニ勢力ヲ得タリ、其中ヨリ井伊・安藤ヲ除カントスル一分派、即チ有村兄弟等ノ輩ニシテ、外櫻田ノ挙ニ加リタリ、而シテ稍割拠ノ勢ニ立到リ、国主在国シ、江戸邸ヲ自焼セシ等ノコトニ及ヒタリ云々、

既ニシテ島津和泉、齊彬ノ遺志ヲ紹ヒテ上京シ、公武合体大政一変ヲ建言ス、而シテ暴徒ヲ伏見ニ誅シ、後大原重徳卿ニ副トシ、関東ニ下リ大ニ論シテ、遂ニ大政ヲ改革セリ、此時長州ハ若侯ヲシテ薩論ヲ隠ニ破リ、離間策ヲ用ヒテ

朝廷ノ帰嚮ヲ変シ、自ラ為スコトアラントシ、或ハ伏見ニ暴徒ヲ征スルノ際ハ、初メ薩人其他ノ浪士ヲ煽動シ、倶ニ暴発ノ約ヲナシ、直ニ変シテ知ラサルヲナシタル等姦黠アリ、薩人此ニ至リテ覚知シ、遂ニ事ヲ共ニセサルニ至レリ、其他薩人ノ長人ニ致サレタル、枚挙ニ遑アラサルナリ云々、

一三九 〔閏八月十一日近衛忠房書翰〕

尚々時気悪敷、御自愛専一ニ存候、明日青蓮院宮へ〔中山実善〕忠左衛門・〔本田親雄〕彌右衛門・〔藤井正徳〕良節等出頭候様御申示可給候、

剋限ハ申来ラス候間、別段ニ不申入候事、

弥御勇健珍重ニ存候、抑一昨日ハ御出忝存候、先々其

御方御参
朝モ無滞相済安心候、嘸々御草臥之事ト察入候、扨御辞職之事、段々御深切ニ御咄共被下、重畳殿下ニモ御安心之御事ニ候、重大之御政務ニ私之論ハ無之事ナカラ、対関東候テモ矢張其御方トハ親族之義、却テ〳〵御互ニ申ニ申サレヌ次第モ在之、周旋ニ差障リ候事モ随分在之候、其御方御周旋辺ニモ却テ〳〵不宜義、乍去有志之向ヘハトント右様之義難申義ニ候ヘ共、是ハ屹ト〳〵互ニ不宜候、旁且ハ最初ヨリ被蒙
勅約候義、勅約偽ニ相成候テハ、歎ケ敷モ被存候間、此処ニテ御辞職、何卒一條左府公ヘ被宣下、殿下之処ハ内覧如旧
宣下ニテ、当年内来春迄ハ御政事向御勤仕被成候御事ト被存候侭、何卒其御方ヨリ議奏衆辺ヘ此意味合モ被込、尤其御方御趣意ニ御取ナシ給、御周旋ニテ程克成就ニ相成候様致度、弥辞職被聞召候ト申義見当サヘ相付候ヘハ、早々可差出被存候、呉々御周旋之程分テ〳〵希度存候、且亦鷹司前右大臣殿ニモ先途不被遂候テハ、同家之義甚歎入候、一向此公ヘ被宣下候テモ宜敷義、左スレハ重畳安心々々之事ニ候、乍併此公ニテハ、内覧如旧之義ハ御断被申上度由ニ候、呉々御憐察給、分テ御周旋御頼申入度候、此儀殿下御所存ト申義ニ、有志之向々ヘ差聞ヘ候テハ、屹ト差支候、旁其御方御趣意ニテ御周旋御頼申入度候、例之御心安ニ任セ、打明在体ニ申入候、呉々宜々希入候事、

閏八月十一日朝認

乱書御覧分

忠房

三郎殿

内密々入覧

〔品津忠承氏蔵本にて校訂〕

一四〇 〔近衛忠房書翰〕

閏八月十五日
正親町三条大納言卿ヨリ被相渡候

過日言上之次第被
聞食、段々斡旋之儀深御満足ニ被思食候、巨細内々御透聴モ被為有候得共、猶向後諸大名御取扱方、其余総体御処置緊要、定テ屹度見込方可有之
叡察被為有候ニ付、斯迄尽力モ有之候事故、
輦下ニ被留置、治国之良策時々被
聞召度思召候得共、無拠次第ニテ、乍暫近々帰国ニモ相成候得ハ、社稷御為方之儀、心付之分底意蘊奥之処、極密献策有之候ハ、厚

宸衷ニ被籠置錦嚢之策ト被成置度　思召候間、聊モ不遺意底、国家御為不憚機密、不避忌諱、極内々言上有之候様被遊度候事、

〔同上書にて校訂〕

一四一〔閏八月二十日近衛忠房書翰〕

緘　〔朱〕「戌閏八月」

極内密々

嶋津三郎殿　忠房

御下

尚々明烏ハ仰出御待申入候、議奏衆辺ハ御演舌ニテモ宜候間、精々在体ニ被申聞候様御頼申入置候事、

追日秋冷増加候、弥御勇健之条珍重尚承度存候、抑昨日ハ忠左衛門入来、御伝言之趣令承知、殿下ヘモ申上置候事ニテ候、其後〔小松清廉〕帯刀ニモ入来、何モ承候事ニテ候、明日辰半頃ニ弥御出可被下様御頼申入候、青門ニモ御出之様申入置、議奏衆ニモ被来候間、篤ト御打明ケ、何カ被申聞候様呉々御頼申入置度候、且亦殿下愚拙等、昨夜ヨリモ色々ト申談居候事ニテ、矢張御心底残リ無御打明ケニテ

朝議之御決意ニ相成候様之処、具ニ御書取ニテ、是ハ極密々拙者迄御差出シ被下様、左スレハ内々被入天覧、尤議奏衆ヘモ被為見間敷殿下思召候間、極内密此方迄御書取御差出シ被下様、決テ〳〵不洩様、精々天覧且殿下限リ之思召ニ候、併青門ヘハ極内々入覧ニ可相成、其外一覧ニ不相成、殿下被成候間、何卒極内々御頼申入置度存候事、

極内密々

嶋津三郎殿　忠房

御下投火

〔同上書にて校訂〕

一四二〔閏八月二十二日大原重徳口述書〕

一四二ノ一〔第一巻番号五六七ノ一四と同文により削除〕

一四二ノ二

秋霖鬱然候、愈御清康珍喜万福候、扨此度ハ無拠御帰国珍重ニハ存候ヘトモ、至極残念ニ存候、昨日ハ緩談辱存候、其砌申述候通リ、貴兄之御悦小子之難有サハ譬ルニ物ナク候、且又乍毎度七月廿六日、中山・大久保ノ事ハ実以辱、全ソレ故ニ小子十分之心力ヲ得、埒明候事ニテ、全貴家助力此事ハ終身不相忘事ニテ辱、貴兄江モ厚ク〳〵御礼申入候、夫ノミナラス発足前ヨリ

事ニ御セハ、御家来ヲ被附　勅使之威光モ加リ、在府中段々御厚配、何カニ御礼難申尽、何ソ御礼ト存候テモ、御承知ノ小禄者、迚モ進上候様ノモノ無之、色々思案ノ中ニ、折節此間　御恩賜之御衣長ヲ切取候ニ付、ケ様之御太刀袋ヲ存付候、此ヒモハ即　御冠掛緒拝領、之ニテ即御アカ付ニ候、永ク御秘蔵可被下候、且又此襖ノマクリ二枚見苦候ヘトモ、先年炎焼之砌、御取出シニ相成候清涼殿之御襖ニテ候、造　内裏御用掛勤居候故、分配ニテ拝領イタシ有之候品ニテ、キズモ付見苦ハ候ヘトモ、メツラ敷メテ度御品ニ候間、御譲リ申候、御居間ノ屏風ニデモ御仕立被成候ハヽト存候、四角ニ明候処ハ、色紙ニ歌有之候、是ハ従迹コシラヘ進入イタシ候、花生ハ常ノ物絹地、此度ノ心、大ハ貴兄小ハ小子、御一笑〳〵文〔庫〕コノ内ハメ〳〵敷品ニ候ヘトモ、進物モカタ〳〵敷品故、御家内ノ御ミヤケニテモ可相成ト御目ニカケ候、早々以上、

後八月廿二日

嶋津三郎殿　　重徳

〔同上書にて校訂〕

一四三　〔戸田忠恕国政意見書〕

戌閏八月廿五日大坂滞留中従近衛家被差遣候

一四三ノ一　所司代ヨリ伝奏江差出候書付

方今宇内ノ形勢致一変候ニ付、外国ノ交通モ御差免ニ相成候付テハ、全国ノ御政事一致ノ上ナラテハ難相立筋ニ候処、御大礼等相続キ一新ノ機会ヲ失ヒ、天下ノ人心折合兼、終ニ時勢如是切迫候次第、深ク御痛心被遊候ニ付、上下挙テ心力ヲ尽シ、御国威御更張被遊度思召ニ候、尤環海ノ御国海軍ヲ不被興候テハ、御国力不相震候付、追々御施政可被成候得共、此儀ハ追テ被仰出ニテ可有之候、右ニ付テハ参勤ノ年割、在府ノ日数御緩メノ儀、追テ可被仰出候、依テハ常ニ在国在邑致シ、領民ノ撫育ハ申迄モ無之、文ヲ興シ武ヲ振ヒ、富強ノ術計厚相心掛、銘々見込ノ趣モ有之候ハヽ、無伏臓申立候心得ニ可罷在旨被仰出候段、年寄共ヨリ申越候間、此段為御心得申進置候事、

閏八月

一四三ノ二

此度　御国政之儀、不憚忌諱申上候様厚被
仰出、難有次第奉存候間、謹テ言上仕候、
癸丑甲寅以来、夷人渡来跋扈仕候ヨリ
御国内不穏、未曽有之変事種々出来仕、乍恐被悩
叡慮候ニ付、於
公辺モ深御心痛被遊候御儀ト、誠以奉恐入候、私儀先
祖ヨリ数代相続仕、三百年来蒙莫大之
御高恩、殊ニ是迄度々重キ御役相勤候段、骨髄徹シ難
有仕合奉存候、然ル処此節外藩国持之衆ヨリ、夫々
御為筋建白仕候哉承知仕候、全
東照宮様之御余徳、
御家之御洪福無此上御儀ト奉存候、私儀御譜代ヘ家筋
数代、蒙
御高恩乍罷在、外藩之衆ト後レ、一廉之
御為筋不相動儀(マヽ)(働カ)、実々奉恐入、日夜苦心愚考仕候得共、
短才不智之身ニテ、浅陋愚昧之説奉申上候儀、却テ奉
恐入相扣候処、今般　御国政筋之儀、心付候ハ申上候
様、被　仰出御達面々趣、篤ト敬承仕候処、
本朝ヲ以世界第一之強国ニ被遊度旨、誠ニ以恐悦之御儀
ニ奉存候、然ル上ハ是迄之通、夷人跋扈等ハ片時モ御
許容有之間敷候得共、癸丑・甲寅以来御親撫第一ニ被
遊候夷人之儀故、突然ト御打払之儀ニモ至リ申間敷、
通商之利害追々被仰諭候上、御附絶ニ相成可申、右之
節万一御教命ニ不随時ハ、御掃攘之御所置ニモ可相成、
其節私儀
皇国之御為抛身命、義勇之働可仕儀ニ常々志願ニ御座候
得共、右夷人御掃攘之一挙迄、何之御為筋モ不相動罷
在候段背本意、先祖以来蒙
御高恩候家筋、此節柄一日タリ共空敷相過候テハ、対
公辺奉恐入、又外藩之衆江対シ、急務ヲ傍観沈黙仕、
夷人之虚喝ヲ恐レ候様相聞、無面目儀ニ付、種々御為
筋相考候処、当今之急務ハ、士気振紀仕候(マヽ)(起カ)ヲ第一ト奉
存候、其士気振起仕候ニハ、反始報本ヨリ人情ヲ厚フ
シ、忠孝之道ヲ養ヒ立候事、真ニ強国之基ト奉存候、
彼血気之小勇ヨリ起リ候強者、粗暴之所業ニモ至リ、
真之強国トハ相成申間敷、右反始報本之祖先ヲ不遺、
始本ヲ大切ニ存候実情之厚ヨリ溢レ出候忠孝之勇ヲ以
振立候士気社、強国之根元実備ト奉存候、此忠孝之大
節ヲ天下ニ示サレ、御教導被遊候ニハ、第一
天朝御代々様之

御陵、多分荒廃ニ相成居候、此儀古来有志之者憂傷仕候段、兼々承知仕候、乍恐万乗之
玉体ヲ被為納候処、荒蕪之侭ニ被差置候儀、誠ニ無勿体次第、恐懼悲傷仕候事ニ御座候、臣子之分ニテハ一日モ安心難仕儀ト奉存候、殊ニ先般
天朝ヨリ御縁組被為在候上ハ、猶更
御陵御修補之儀、御執行被遊候様奉存候、右様相成候ハ、乍恐
今上皇帝ニハ追遠莫大之御孝道ニ相成、於
御当家ハ奉上広大之御忠節相立、
官武御一和之御趣意弥以相顕レ、且
官武御一同ニ忠孝之道ヲ以、御垂教被遊候得ハ、海内一般御徳化ニ浴シ、反始報本之情厚、真之忠孝之士気振起可仕、且
御陵御修補之事、鎌倉以来数百年絶テ無御座候処、御当家ニ至リ、御修補ニ相成候得ハ、千万年不朽之御盛功ニテ、　御忠義之道相立候ヨリ、
天朝之御気色ニ被為叶　天下之人民一統難有感戴仕、
御武威モ無限相輝可申奉存候、仍之
御陵御修補之儀ハ、御強国之基、則天下無双之一大盛事ト奉存候間、近々御上洛前ニ御修補之儀被　仰出候得ハ、必
御為筋ト奉存候、尤此節柄之儀ニ御座候得ハ、万一国持之座ヨリ、右之儀
天朝江直願之程モ難計哉ト心痛仕候間、可相成ハ早々被仰出候様奉存候、今般厚　御沙汰之趣、反復難有奉存候付、愚意之趣此段奉申上候、以上、

閏八月　　戸田越前守（忠恕、宇都宮藩主）（同上書にて校訂）

一四四　茂久公關ケ原ノ難戦ヲ追想妙圓寺御参詣

文久二年九月十五日、本日ハ古關ケ原（岐阜県）ニ於テ、　松齢公御苦戦ノ当日ナレバ、旧慣ノ如ク諸士壮齢ノ曹、鎧冑ヲ着シ、伊集院妙圓寺（日置郡）（松齢公御帯位ヲ祭ラレタリ）ニ参拝スル者夥シク、昼ヨリ夜ニ至テ頗ル賑ヒタリ、戎具ヲ着ケタル者、無慮八百余名、其中ニ騎馬モ多数アリシトソ、或ハ行軍練習ノ為トシテ、走セテ往来セシモアリシトナン、
太守公モ御乗切ニテ御参拝、御帰路横井御仮屋（大迫村ノ内横井村ニアリ、御上下リノ時御休憩所ニ設ケラレタル小邸アリ、横井御仮屋ト通称ス）ニ於テ、通行鎧冑者御覧アラセラレタリ、
太守公ニハ当時乱兆顕然タル世態ナルカ故、武道ノ御

心掛殊更ニシテ、御躬ラ御勉励アラセラレ、如此ク着鎧遠行ノ形況ヲモ御見物アラセラレタリ、

妙圓寺参詣ハ天保ノ末、弘化ノ初頃迄ニハ禁停ナリシ故、心掛アルモノハ忍ンテ夜中ニ参詣セリ、然ルニ本年ヨリ着鎧参詣ヲ允サレシノミナラス、

太守公モ御参拝アラセラレタルニハ、咸人感喜セシコトナリキ、

一四五　江戸ノ形勢報告

文久二年九月十五日、江戸報知ニ曰ク、幕府モ逐次政体改革ニ着手シ、将軍家上洛モ発表、尊王ノ道稍立チ、或ハ一橋公　将軍家後見職、越前前中将春嶽公ハ政事総裁職奉命日々登城アリト、或ハ諸大名参覲交代ノ制ヲ変革セラレ、　太守公ハ来ル亥ノ正月中御参覲、同夏中ノ御在府ニテ、七月一日御帰国御暇ノ制ニ変シ、或ハ服制ヲ変革シ、熨斗目長袴ヲ廃シ、平日登城ニハ羽織袴又襠高袴等ヲ用ヒ苦ラストノ旨、或ハ大小名供列人数モ格別ニ減シ、其他一切無用ノ経費ヲ省キ、質素ニ復シ、武備充実スヘキ厳令ヲ布カセラレタリ、中ニ就テ　将軍家上洛ハ、寛永十一年三代家光公上洛之後、殆ント二百三十年十一代ノ間廃典ナリシヲ、今回復旧ノ盛典ナリ、其因テ起ル処、　国父公ノ御建言ニ依リテ、幕府モ止ム事ヲ得ス布令セリ云々、諸大名ニ於テハ大ニ喜ヒ、国邑ニ引取ラント既ニ其手当ニ及ヒタルモアリ云々、

一四六　藩政改革ヲ令ス

一四六ノ一　文久二年九月十五日、　国父公御親筆ヲ以テ、当今ノ世態情実ヲ示サレ、御国政一大変革セラルヘキ旨ヲ布令セラレタリ、左ノ如シ、

家老中江

我等事、先般

御内命ヲ奉戴シ、関東ヘ出府、　公武ノ御為聊微力ヲ尽シ、再ヒ上京復命ニ及候処、不図モ先月九日、参内被仰付、議奏衆御取次ヲ以テ、不容易奉蒙褒勅、殊ニ重キ御品迄モ拝領被仰付、誠以テ武門冥賀(ノ脱カ)不過之事ニ候、全体我等之素志ハ、

皇国内外之大患不堪傍観、且

順聖院様(島津斉彬)御遺託之御旨、奉紹述度赤心ニテ、事之成否ヲ不顧、忌諱ヲ侵シ、犬馬ノ労ヲ致シテ、

王臣之分ヲ尽シ候迄ノ趣意ニ候処、格別之奉蒙
殊遇候儀、不存寄事ニ候、且於関東モ一橋・越前登用相
成、尊
王之道追々相立候勢ニ候得ハ、暫ク奉
勅之厚薄処置之得失
叡覧被為在候ニ付、大略御治定相付迄之間、我等滞京仕
候様再三承知致候得共、御断申上及帰国候訳ハ、畢竟
攘夷ノ儀、先々ヨリ之
叡慮ニ被為在、兎角此末ノ時勢大事之訳ニテ、国家之本
治定不相候(成脱カ)テハ、時勢(機カ)ニ応シ、十分之勤
王モ難相叶候得ハ、富国強兵之術大急務ト存候、尤於関
東、六月朔日且先月被仰渡候趣モ有之、屹ト此涯国政
之大体相立、人心一致候様変革ニ及度候間、各中ヘモ
不容易大事之時世ヲ弁シ、上ハ
朝廷之御趣意ヲ奉シ、下ハ我等之誠忠ヲ通徹シ、忠直ヲ
尽シ其職ヲ勤メ、国家之柱礎ト相成候様心掛、尚熟慮
之上、存寄之趣承度事ニ候、且又今度留守中士分以上
之者共、種々雑説(柱・有川・吉川・中山等輩カ醸シタル訛言ヲ指シテ記サレタル者ナリ)等申触候段
モ相聞ヘ、以之外ノ事ニ候、事之善悪ニ依ラズ、国家
ノ為上書之儀ハ、
御先代様(照国公)被仰出置候得ハ、表向致上書候ハ、臣子
当然ノ事ニテ不苦候間、猶又各中勘考有之、国中一統
趣意貫徹致候様有之度事、

九月十五日　　久光

一四六ノ二
右　国父公御親書ニ就テ、　太守公左ノ御親筆ヲ以テ、
同時ニ達セラレタリ、

家老中江

御別紙ノ通被　仰出、我等ニ至リ別テ感伏涕泣ニ不堪
候、各中ニモ深御趣意奉汲受、粉骨砕身屹ト其詮相立
候様精力ヲ尽シ、丹誠ヲ凝シ、　三郎様ノ御趣意ヲ奉
助、我等ノ不肖ヲ補ヒ、国家之良臣ト相成候様有之度
存候事、

九月十五日　　茂久(御親筆仰出書ハ御名ナシ、此御書ニハ国父公ト御同時ナルカ故、御実名記サレタル者ナラン歟)

前ニ記シタル如ク、今春御上洛御発駕後、俗論交々起
リ、浮説流言甚シク(噴タトシテ)、大ニ人心ヲ動揺セシメタルニ依
リ、今回其巨擘ノ輩数名ヲ黜罰セラレシヨリ、訛言漸
ク罷ミ、一般尊
王ノ気嚮定リ、有志之曹志ヲ述フルニ至レリ、然リト雖
モ冗陋且ツ因循ニシテ、大義名分ヲ識別セズ、幕府ア

ルヲ知テ

朝廷アルヲ知ラサルカ如キノ曹ハ、尚ホ密ニ異説ヲ唱ヘ、幕府ノ勢望千歳モ動シ得ヘカラス、或ハ幕政ノ専恣驕傲モ不臣ノ行為トセス、或ハ時勢ノ変換モ意ニ介セス、或ハ外夷来往通信貿易モ既ニ開ケ、向来大患ノ兆顕ハレタルハ、開闢以来未曽有ノ一大事ナルヲモ反省セス、世態ノ変遷沿革スヘキノ勢ヲ察セス、或ハ固陋頑愚ニシテ、私忿ヲ以テ当時要路在職ノ曹ヲ、嫉視ノ鄙心ヨリシテ、吹毛索疵ノ説甚シ、訛説流言ヲ以テ愚夫愚婦ヲ煽動シ、特ニ　国父公ノ御深意ヲ知ラス、妄リニ人心ヲ動スニ依リ、　太守公大ニ憂慮セラレ、止ム事ヲ得ラレス、其巨魁タル者数名ヲ黜罰セラレタル者ナリ、然リ而シテ尚ホ民間ノ情実ヲ一洗シ、治国ノ大体ヲ定メ、富強ノ道ヲ拡張セラレンノ尊　旨ヲ以テ、忌諱ヲ憚ラス存意上陳スヘキヲ令セラレタリ、是ノ布令ヨリシテ一般ノ気嚮モ定リ、流説訛言モ少シク熄ムニ至レリ、

〔旧邦秘録にて補註〕

一四七　諸侯ノ妻子国邑居住ノ令ニ依リ茂久公御廉中其外御帰国

今回幕府ニ於テ、政体変革ヲ令シ、諸侯ノ妻子国邑居住勝手タルベキ旨ヲ令シタルニ因リ、我藩モ暐姫様（照国公第三女暐姫君ト称ス、本年十二歳）、其他寧姫様（照国公第五女寧姫君ト称ス、本年四歳）・勝姫君（斉宣公第十女、初メ閑姫君ト称シ、後勝姫君ト改メ、斉興公御養女、本年五十歳○初メ松平乙近将監康寿ニ嫁セラレ、故アリテ離縁、高輪邸ニ御棲居）御下国ヲ促カサレタリ、各藩ニ於テハ既ニ帰国ノ途ニ就キタル〔頭註〕「左近将監康寿ハ、石見浜田城主周防守康任ノ嫡子ナリ、家督タラスシルモアリタリトナム、」諸侯大小トナク、妻子ヲ江戸邸ニ置クノ制度ハ、今ヨリ凡ソ二百三十年前寛永ノ初、　黄門家久公ノ御夫人及ヒ諸公子ヲ江戸櫻田ニ居カレシヲ以テ嚆矢トス、而シテ大小各藩ニ及シタリ、即チ質トスルカ如キノ制ナリ（這ノ源因ハ第六巻ニ詳記ス）（旧邦秘録）

テ早世タリ、故ニ閑姫君薙髪シテ貞鏡院ト称ス、其後故有テ彼家ヲ辞シ、高輪邸ニ帰住アリ、勝姫君ト改称アリノナリ」

一四八　痲疹流行

痲疹ニ引続テ、去年ノコロヒ大流行ニテ、八月殊ノ外甚シク、実ニオソロシキ様ニ有之（本書不分以下透書之分ハ同シ）ハヤリ立、甑島（薩摩郡）辺鹿児島中ニモ其外□□（欠）別ノ静溢、櫻島（鹿児島市）黒神大流行ニテ、横山（同上）抔モ段々出来ルモノ有之、岩山氏・アヒルハハ（同上〔宋〕）「（家鴨馬場）」原田助右衛門様其外市中ニハ、一家内ヨリ四五人モ有之、西田（鹿児島市）ノ木屋ニハ親子三人位モ死（東）失ノ由、道中筋モ少々ハ流行候付、江戸表甚シク、日

本橋五拾人程何度モ通リ、右一通リ上レハ橋ヲアラヒ（京都中央区）
候由ニテ、何度モアラヒ候由申来候、何分□（欠）ニテニク
ムヘキノ甚シキナリ、戌九月十八日記之、

一四九　〔九月十八日大原重徳書翰〕

一四九ノ一
其後ハ御無音無申条候、追々冷気増加候、愈御平穏珍
重此事ニ候、陳ハ去閏八月廿八日ニハ自兵庫御出帆、
御帰国之御都合之趣伝承候、海上路程日数トモ種々ニ
承リ候ヘトモ、何レ蒸気船之事ニ候ヘハ、風濤之御構
モ有之間敷ト存候ヘハ、船中各無恙、最早トクニ御帰
着被成候ト、愈御安心之御事ト察入、珍重之御儀ト御
祝申入候、拙子モ其後気丈ニ罷在候、乍憚御安慮可被
下、先ハ無異御帰国御悦申入度、如此候、不典、

九月十八日晴天認

二白、初テノ御旅行ニハ、扨々長滞留非常之大事嘸
々御草臥ト察入候、御草臥モ出不申哉、併御用心家
故、格別之儀モ有之間敷ト遠察イタシ候、追々冷気
増加時候、御用心専一ニ候、拙子モ来廿一日左衛門
督拝賀イタシ候付、何欤ト取込候内、脚便有之候ト
承リ、余リ御無音無申分、不取敢御帰国御悦申入度、
要用申入候、乍末筆此節又別
勅使被為下候御様子承及候、勤王之心不相変心配候
ヘトモ、非役之事故聞ヘカネ、トノ様之御事ヤラト
只々心配イタシ候、陽明ニテ御咄シ之次第ヲ存候ヘ
ハ、被差向候モ宜哉ニモ候ヘトモ、先只今之事故御
見合モ可宜哉トモ存、愚案故見通シ付不申、無念之
至ニ候、近クハ御相談モ致シ度候、残念此事ニ候、
以上、

嶋津三郎殿　　重徳

一四九ノ二
書添
御襖ノマクリ浮嶋ケ原ノ色紙未調不申、扨々延引嘸御
待遠ト可有之候ヘトモ、暫御有恕可被下候、精々急キ
出来次第ニ可進ト存候、扨又御帰国カケ置土産ノ御礼、
其節書中ニモ不認、甚不都合御免可被下候、不二ノ画
至極妙日々相楽候、唐紙ハ此節追々被頼物有之、乍取
込スキ故認遣シ、至極当用ニ相成、厚々辱御礼申入候、
扨又於陽明家一寸御咄シ申候、貴兄ト不中之辺ニテ浮
説之事、何故ヤラ不相分候ヘトモ、何分実事ニテナキ
故欤、其後トント沙汰不仕、但貴兄御奇計ヲ被施候哉、

何分何トモ不申様ニ相成、今ニ無事安心イタシ候事ニ候、任便一寸為御知申入候、大久保ニ此事ハナシ致シ有之候故、安心之段御申聞セ可給候也、

〔島津忠欽氏蔵本にて校訂〕

一五〇　茂久公江戸御参覲年割布達

文久二年九月廿一日布達ニ曰ク、今回幕政改革ニ就テ、太守公御参覲ノ年割来亥年正月元日ヨリ、六月中御在府ニ変更セラレタルニ依リ、本年中御出府アラセラルヘキ旨ヲ布達セラレ、国老喜入摂津〔久商〕、御側役山口直記〔利紀〕谷川次郎兵衛〔久武〕、御小納戸頭取大久保一蔵〔利通〕・中山中左衛門〔実造〕等従駕ヲ命セラレタリ、

〔宋〕「〔文久二年癸亥〕」

九月廿二日大久保・中山ノ両名御小納戸役ヨリ御小納戸頭取御用取次兼務ニ拝ス、

一五一　浪士石部駅ニ於テ乱妨始末

（道嶋正亮紀事鈔）

乍恐奉届口上書

西組

渡邊金三郎様

東組

森　孫六郎様

同断

大河平十蔵様

西組

上田助之進様

御宿

橋屋市次郎様〔ママ〕

右同

佐渡屋比三郎

右同

米屋半七

右同

角屋宗吉

右御衆中様、今廿三日申ノ刻比当宿ヘ御着御座候処、暮過比何レノ武士方共不相分、人数三十人計右四軒ノ御用宿ヘ銘々抜身ニテ入込、渡邊様・大河平様御三人共首切取、無程西ノ方ヘ引通、上田様乍深手八百屋金助方ヘカケ込被成候、暫致候内御命終被成候、御家来ノ内渡邊様御内恒三郎様ト申方モ深手、上田様御家来手疵、其外御家来衆ハ別条無御座候、右様ノ儀出来何共恐入候、宿泊人共当惑至極ニ御座候、乍恐不取敢此

段御届奉申上候、以上、

戌九月廿三日　　東海道石部〔滋賀県〕

手寄久六

二人ハ与力　二人ハ与力格

右ニ付、無名ノサラシモノハ、内実ハ青蓮院ノ宮ノ御下知ニテ、長士并其外ノ者共モ段々相見得候ヨシ、今ニヲイテハソロ〳〵右ノ噂モイタシ、誠ニ暴令ノ至リ、終ニハイカヽ可相成哉、第一名義ヲ糾シ玉フコソ主要タルヘキヲ、イカ成御所置ニテ候哉ト、当分アラタノ能學寺ヘ志州ノ和尚参リ居候テ噺候由、

一五二　藩吏菱刈汾陽免黜セラル

文久二年九月廿六日、江戸在勤大目附兼番頭菱刈李之〔隆徴〕介・留守居汾陽次郎〔光遠〕右衛門下着、当日免職ヲ達セラレタリ、在勤中失闕アリシヲ以テナリ（此二名辞職出願スヘキ旨内諭アリシ所以当時ノ説ニ生麦村ニ於テ英人斬殺事件幕府ヘ届出ノ事ニ関シタリト言フ）

一五三　将軍上洛布告

大目付ヘ

一来二月御上洛可被遊旨被仰出〔候ニ付脱カ〕、明後九日御礼廻、右御祝儀可申上候事、

但常〔々カ〕ノ惣出仕申振〔之カ〕合ニ可相心得候、

一出仕ノ面々右為御祝儀、老中・若年寄老〔衍カ〕中宅江可相越候、

但万石以上病気・幼少・隠居ノ面々ハ、月番ノ老中ヘ使者可差出候、

一在国在邑ノ面々ハ、飛脚可差越候事、

右ノ通可相触候、

戌九月

右ノ通従公儀被仰渡候条、向々ヘ可申渡候、

九月発ス　〔新訂増補国史大系51続徳川実紀第四篇にて補註〕

一五四　〔青蓮院宮尊融書翰〕

一朝儀〔元ノマヽ〕常変ノ二道、何レニ被定可然事、

一京地ニ藤房卿無是、呉々モ早々出京、藤房卿正成之所為頼入候事、

一良節ニ京地形勢聞取、勘考モ候ヘハ、可被申越候事、

九月晦　　尊融

嶋津三郎殿　〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一五五　江戸報告（仝上）

一五五ノ一　　松平肥後守〔容保、会津藩主〕

恐多モ　京都守護職被
仰付
輩下ヲ鎮静可致ノ処、此度長藩僅千人ノ人数相登候迚、
之ヲ払ニ洛ヲ焼捨候事、身ノ微力トハ乍申、実ニ
皇土ノ悪ム所也、剰山崎
應神天皇御廟致放火事、朝敵ノ罪不免者也、
九月

一五五ノ二　松平肥後守京都守護職被申付候儀、御警衛行届御安心
被
思食候、然処一藩奉職ニテハ、人心居合モ如何可有之
（哉カ）
欠字被
思食候ニ付、猶又大国之外藩、今一両家江被申附、輪
番相成候様被遊度、被
思召候事、
九月

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一五五ノ三　先達細川越中守〔慶順、熊本藩主〕御内沙汰之儀、御請有之
御満足候、右使上京之節、即今御用無之旨申達相成候
得共、方今事体猶亦上京、朝廷ヲ輔翼之儀斡旋有之候
様被遊度、更内々
御沙汰候事、

〔同上書にて校訂〕

一五五ノ四　松平土佐守〔山内豊範、土州藩主〕儀、先達俄滞京之事被
仰出候処、御請
御満足被
思食候、然処若年之儀、不量之
御沙汰ニ付、深心痛之趣被及聞食、無余儀被
思食候間、於土佐守ハ出府ニテ、尚又厚周旋可有之、
父容堂〔豊信〕損字年輩之儀ニ候得ハ、輩穀之下御警衛、殊更ニ
可然共
思食候間、早々上京、父子交替ニ相成候様被遊度
思食候、此段被
仰出候事、
後八月

〔同上書にて校訂〕

一五六　〔公武周旋依頼書〕

未拝高顔候得共、一書進呈仕候、先以寒冷ノ砌、愈御
堅剛可被成御勤仕奉大賀候、然ハ方今天下ノ形勢危急
存亡ノ秋ニ至リ候義ハ、一々論スルニ不遑、御同苦奉
存候、乍併去八月十八日
朝廷御発動後、暴論退散忝モ
叡慮
御卓越、左右輔弼ノ公卿方遵奉ノ　御忠誠確乎無御動
揺、以此大機会
官武御合体
皇国挽回ノ道相立度トノ御持論、随テ滞京ノ列藩聊不
生異論、為天下尽力此一挙ト衆評内決イタシ候、就テ
大樹公御上洛被
仰出候上ハ、神速
御発途不被為在候テハ、
皇国ノ御為ハ勿論、幕府ノ御為御失策ト奉存候間、以
内使愚意建言仕、最早
廟堂ノ明裁ヲ以、　御内定ノ段ハ奉伺候得共、今般
御城御焼失ニ付テハ、万一是カ為ニ御猶予被為在候様
ニテハ失望ノ儀ト、於
朝廷別テ　御不安心被思召、小臣等ニ至リ駭然且歎息
ノ仕合ニ御座候、然ハ尊君方ノ御配慮不一方、猶断然
ノ御周旋可有之奉深察候得共、実ニ挽回ノ成否ハ
御上洛ノ寛急遅速ニ依テ、其機ノ分ル、所ト見据、昼
夜不安寝食候間、伏願ハ
御当地ノ形勢事情深重御熟考有之、是非々々御委任被
成、区々ノ評説ニ御顧念ナク、以
御英断　御発輿被為
在候様、御尽力偏ニ〳〵所仰候、自然御明察ノ前トハ
奉存候得共、四方ノ情態篤ト熟考仕候処、即今人心恟
々物議騒然、各国機ヲ見合候模様モ有之、懸テ
御疑惑ノ廉モ可有之候得共、兎角ハ
御上洛ノ上
御一和ノ道被相行、今一層
幕府ノ幕府タル正議ノ御威権相加、上被為奉
叡旨、下為万民天下ノ耳目ヲ令一新候御処置無之候テ
ハ、愈以四分五裂ノ体ニ陥リ候ハ、必然ノ義ト憂慮仕
候間、乍不肖
朝廷幕府ノ御為抛身命、必死ノ周旋仕度決心罷在候、
再三ノ賛言思召ノ程如何ト、退テハ恐縮仕候得共、前
条不可止ノ至情、且一己ノ憶見ヲ以言上ノ訳ニ無之、

滞京ノ列藩一定ノ論ニ候間、旁御洞察被成下、無御猶予御断決被為在度奉至願候、此ニ至リ候テハ、各方ノ御任ヲ責候外無之候、小臣ニ於テモ黙止罷在候テハ非本志候間、不顧前後一片ノ赤心吐露仕候、幾重ニモ御賢慮所仰候、恐々謹言、

追テ寒威御保護専一奉存候、突然ノ書翰高慮ノ程、如何敷奉存候得共、本文ノ趣意ニ御座候間、不悪御聞取被下度奉存候、御同席中様へ別段不申上候間、乍憚尊君ヨリ献芹ノ微志御伝声伏テ奉願候、且又夷人折合一条、且拝借金等ノ義ニ付、段々御高配被成下、別テ難有奉存候、追々家来共推参、御海量ヲ以テ御丁寧被示聞候段、是又忝奉存候、御案内通無骨疑者候、無御遠慮御吐声可被成下候、此旨御礼申上度如此御座候、

一五七 〔九月十八日三條へ長州佐々木男也持参ノ勅使東下攘夷決行ノ議〕

先年以来外夷跋扈未曽有之御国辱ニ付テハ奉始、神宮御代々様江被為対宸襟御悩被為　遊候御儀、今更申上モ恐多奉存候、然処追々正邪之弁相立、御有志之御方御慎解ニ相成、且又三藩出張士気奮興之儀、千歳之一時此機不可失事ニ候、元来一橋・越前等再出之段、勅諚ヲ以テ被　仰出候儀、偏ニ於関東有志共不取扱ヨリ叡慮貫徹不仕、人心致瓦解、攘夷無覚束被思食候事ニ可有之候、何分ニモ一日之安ハ、千歳之禍ニ候得ハ、恐多モ夷狄撻伐之宸断被為　遊、此度勅使御東下ニ付テハ、屹ト関東江被仰出、攘夷之御決議早速被聞食候様被　遊度候、尤一昨冬七八箇年乃至十ケ年外夷拒絶可仕段、於関東御受有之候ニ付、御猶予之儀御頼可相成欤ニ候得共、右ハ奸吏共罷在候時之事ニテ、今日ニ相成リ、決テ御異議有之間敷ニ付、断然攘夷之勅使被仰出度奉存候、

九月

〔十八日三条へ長州佐々木男也持参のものか、島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一五八〔戸田忠恕御陵修補願書〕

別紙

御陵御修補被　仰出候得ハ、私儀為冥加右御用相勤申度、全数代ノ御高恩ニ奉報度微衷御座候、尤右御入用筋之儀、

公辺御散財不相成様、家来共江申付工夫為仕度、私儀モ元来勝手向不如意ニハ御座候得共、斯ル御時節御為筋ニ相成候儀ニ付、如何様ニモ力ヲ尽シ、一家中粥ヲ□〔啜カ〕候共、尊敬心切ヲ心懸修補可仕候、尤

公辺御役人御出張ニテハ、彼是御手重ニ相成、御入費モ不少、又

御陵被為在候国ノ村里ノ場所ノ者共、自然迷惑可仕、私江被仰付候ハ、重役共先立風雨寒暑ニモ苦心奔走仕、謹テ修補可仕候、斯奉願候儀、是迄ノ流弊ニ習ヒ、寸功ヲ以後賞ヲ心懸候事ニ無之、又名聞ノ為ニモ無之、全国家ノ御為ヲ存、此度被　仰出候流弊御一洗之一端ニモ可相成哉ト存込候儀御座候、尤尋常ノ御用筋ニテハ、兼テ必至困窮ノ勝手向中々難相勤候得共、別紙ニ申上候通、国家ノ御為筋不相勤儀、赤面ノ次第ニ付、必至ノ究迫不顧奉願候儀ニ御座候、且攘夷之節ニ至リ候ハ、

御陵御用中ニテモ、早速先途仕、報国之働仕度奉存候、何卒微忠之処、

御賢察被成下、

御陵御修補御用被仰付下置候ハ、冥加至極難有仕合奉存候、尤数ケ国数所ノ御儀ニ付、急ニ修補相整乍間敷、数年ノ丹精ヲ以成就仕候様心懸可申候、此段奉願候、以上、

戸田〔忠恕、宇都宮藩主〕越前守

一五九〔献上米初穂備〕

一五九ノ一　献上ノ米御初穂御備左ノ通

一大神宮　一石清水　一加茂上下

〃四社へ百石ツヽ

一春日社（なら）　一稲荷社　一平野社　一貴船社

〃四社へ五十石ツヽ

一泉涌寺　一般舟院

〃両寺へ五十石ツヽ

右九月廿七・八両日ニ御沙汰ニ御座候事、

右申上後居申候ニ付、宜敷奉願候、

一五九ノ二 伊勢両宮 二百石（壬戌九月）
内侍所 五十石
石清水八幡宮 百石
賀茂社 百石
鴨社 百石
南都春日社 五十石
城州松尾社 五十石
城州平野社 五十石
稲荷社 五十石
般舟院 五十石
泉涌寺 五十石
城州吉田社 三十石
城州大原野社 三十石
城州梅宮社 三十石
城州貴布祢社 三十石
江州日吉社 三十石
祇園社 三十石
北野社 三十石
和州大神社 三十石
和州大和社 三十石
和州廣瀬社 三十石
和州石上社 三十石
和州丹生社 三十石
和州龍田社 三十石
攝州住吉社 三十石
攝州廣田社 三十石
（志摩）勢州伊雑宮 三十石
尾州熱田宮 三十石
豊州宇佐宮 三十石
紀州熊野社 三十石
雲州杵築大社 三十石
総州香取社 三十石
常州鹿島社 三十石
信州諏訪社 三十石
筑州筥崎宮 三十石
筑州宗像社 三十石
筑州香椎宮 三十石
城州上御霊 二十石

城州下御霊　二十石
城州仁和寺　二十石
和州東大寺　二十石
和州興福寺　二十石
城州延暦寺　二十石
江州園城寺　二十石
城州東　寺　二十石
城州廣隆寺　二十石
城州水無瀬社　三十石
和州東大寺大仏殿龍松院　十　石
城州清荒神護浄院　十五石

一六〇　〔岡藩主中川久昭一件〕

一六〇ノ一
当春私家来小河彌右衛門（一他）ト申者、同志之者引纏、京攝之間江罷出居、去ル九月帰邑仕候、其節薩州嶋津三郎ヲ以、右彌右衛門始家来共尊
王之志
御感被下置、且私国政行届候段モ奉蒙
御賞詞、冥加至極難有仕合奉存候、猶又先月廿日家来之者、正親町三條大納言（実愛）江被
召出、
御内勅御書附御渡被成下、於兵庫頂戴仕重畳難有仕合奉存候、此節上京、右御礼奉申上候心得ニ御座候処、同廿九日大坂滞在中、薩長土三藩ヲ以、右彌右衛門儀天意御感之
御移付ニテハ、私儀モ奉蒙
御賞詞候儀ハ不容易御事柄、仮令国法ニ於テ故障之儀
御座候共、奉対
天朝赦罪可仕筈、猶難捨置儀モ御座候ハ、一応奉伺候上、兎モ角モ可申付処其儀無之、一己ニ咎申付候段、畢竟
天朝ヲ奉軽蔑候所行不束至極ニ被
思召上候段、
（尊融親王）青蓮院宮様
（近衛忠熙）関白様御移之趣奉敬承、誠ニ以恐縮之至、吐口之申上分ケ無御座奉恐入候、右ニ付不取敢、右彌右衛門始咎筋差免候様、在所表江下知仕置候儀ニ御座候、然ニ私儀奉対
朝廷、不臣之心底ハ毛頭無御座、乍小藩相応之御用度相勤度、兼々心掛罷在候処、此節之不束、実ニ

御移之程深奉恐縮候、何卒広大之
御仁恵ヲ以、此度之罪条格別ニ奉蒙
御寛免候ハ、重畳難有仕合奉存候、此段偏ニ宜敷御執
成之程奉願候、以上、
〔十一月八日カ〕
月　日　　中川〔久昭、岡藩主〕修理大夫

一六〇ノ一
岡藩小河彌右衛門列幽閉セラレ候一条、首メ白石正一〔資風〕
郎ヨリ村山齊助ヘ、長州ヨリハ土屋彌〔根〕之助・佐々木男
也〔矢〕ヘ右相聞得候始末、委細申遣シ候所ヨリ、齊助・男
也両人致談合、中川侯通伏之砌、幽閉被申附候訳問ツ
メ候含之所、男也　宮様ヘ罷出申上候段、厳敷御憤激
被遊、中川之仕方ハ言語道断之至、
朝威之立ト不立之境、一大事之訳ユヘ、即日三藩ヨリ
人数ヲ差出シ、万一モ押テ罷上リ候ハヽ、生首ヲ切テ
御目ニ可懸旨御沙汰有之、男也・齊助・本田彌右衛門
打寄談合之上、人数丈ケハ先内分伏見迄差出シ、十月
廿九日大坂迄ハ村山齊助・鵜木孫兵衛、長州ヨリハ桂
小五郎・佐々木男也ヘ、土州ヨリ乾作七・手島八助右
六人同道ニテ、中川屋敷ヘ出懸、修理大夫殿ヘ面会及
談論候処、ハシメハ様々ト被申立候所、御家之御浮沈
ニモ相カヽル程之事、イツレ　朝憲ヲ軽ンセラレ候訳
ニ相当ルト申入候所ヨリ、後ニハ一向ニ誤入、自身直
ニ罷上リ御断申上候ハヽイカヽ、何分貴公方可然致勘
考呉トノ儀、頻ニ被相頼、一先引取、留主居熊田万八
所ニテ番頭熊田陽介、用人小原隼太・草刈敬輔其外役
人中ヘ出会、翌日陽介・万八・隼太三人致上京、議奏
衆ヘ罷出御断申上、六日夕致帰坂、七日中川侯自筆之
誤書ヲ以、又々熊田等致上京、修理大夫殿ハ明日上伏、
御下知可相待候手続ニ相成候事、〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

〔表紙〕

忠義公史料

文久二年自十月至十二月

〔扉に、表紙と同じ文字の外に市来四郎編の記載あり〕

一六一　〔久光ノ上京ヲ促ス中山忠能書翰〕

追々寒冷増加候、弥御安全ト珍重存候、誠先達ハ御上京御東行等出格之御苦労、事々御丹誠御周旋共深ク令感佩候、度々得貴顧御懇示共大幸存候、無御滞御帰国之趣奉賀候、抑御出立後天下之変化帝都之形勢追々選転ニ相成候、就テハ差当品々被悩宸襟候御事ニ被為在、於愚臣等モ寔以令心痛候、別テ此比一橋刑部卿〔徳川慶喜〕上京之義被言上候越前之義ハ一向沙汰無之候、子細難分候ヘトモ、来年二月ニハ大樹上洛一言有之候上ハ、右一橋上京之上、　御沙汰応接等モ、実ニ国家之大事ト深被悩

叡慮候間、種々御内談被尋下度御事共御多端ニ付、早々御上京有之候様、頼被　思召候トノ　御沙汰ニ被為在候、尤関白殿〔近衛忠熙〕ヘモ　御沙汰之御事ニ候得共、於小子等モ実ニ御案痛申上候事件有之、誠以難堪存候、万事御面陳打明御内談申入、何卒一日モ早被安宸衷、尤国家御為ニ可相成様仕度念願ニ有之候間、乍御労煩、速御上京御内々御補佐被上候様、偏御頼申入候、御帰国無間御再出之段、実ニ御不便宜御困ハ深令遠察候ヘトモ、何分治乱成敗之御場合ニ至候テ心痛之至ニ候、何卒々々厚被廻御遠察、早々御上洛之義、分テ御頼申入候、委細之時勢下官所存一々藤井〔正徳〕ヘ申述置、同士承知之事ニ候間、御聞取奉頼入候、仍此段申入度如此候也、

十月一日　　忠能

島津三郎殿

追テ時候御自愛専一存候、調筆火急ニ相成、且先日已来痛所有之、困居甚候ヘハ短札高免可給候、心事

難述尽御推覧奉頼候也、　〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一六二　〔久光上京ニ関シ小松清廉書翰〕

二丸君御上
京被遊候様
御沙汰之趣ハ、昨日藤井良節差立申上越候通ニテ、一向
雲上　御依頼之　御訳ニテ、無拠御時宜合ト奉存候、
右付下拙存慮ニハ其御地御所置旁奉存候処、迚モ急速
御上　京之処モ六ケ敷、兎角大概御国政向御手被召付
候テ、　御上　京不相成候テハ、亦々御国元之混雑生
シ申ハ眼前、左候得ハ勤
王モ御十分ニ御出来被遊御訳ニモ不致候付、暫時成共
御延引相成、来早春迄之内ニ精々御所置被召付、御上
京相成候テ可然致愚考候付、
関白様　左大将様江モ召之形行申上候得共、邂逅之
叡慮故、一先申越候テ、其上　三郎様〔島津久光〕　思召之処、御
返答相成候様
御沙汰ニ付、藤井差立申候、尤一橋刑部卿上
京之義、関東ヨリ申上ニ相成候由、右ニ付、其節ハ是
非三郎様　御上　京ニ相成居候テ、何欤御周旋御談判
無之候テハ、迚モ被安叡慮候事ニモ至リ兼候間、折角
近比ニ御下国之事ナカラ、暫時　御上　京有之候様、
不一方
思召之哉ニ、　殿下〔近衛忠熙〕御初中山卿〔忠能〕・正親町卿〔実徳〕抔御咄ニ御
座候、右之　御趣意等ハ実ニ御尤之御事ニ奉存候得ト
モ、何分御国元之処、旁無覚束奉存候間、迚モ
御沙汰之通早目ニ上　京ト申所ハ出来兼可申、来正月
ニ相成候ハヽ、随分出来可申欤トモ存候段、篤ト申上
置候得トモ、何分　三郎様　思召之処、折角御待之御
事ニ奉伺候、実ニ機会ハ参リ候付、早目ニ　御上　京
ニ相成、御尽力被遊度時節トハ山々奉存候得トモ、前
後旁勘考イタシ候処、御国元之事難被捨置訳ハ奉存候
付、右之所ヲ以申出置申候間、篤ト良節ヨリ事情形勢
御聞取被成候テ、御勘考之上被奉
伺、可然御取計可被成下候、
一攘夷一条ニ付、
勅使被差下筋ニ相成様、三條〔実美〕様・姉小路〔公知〕様来ル十二日
御発足ニテ、御下向之筈御決定相成候段、上　京之上
承候付、　陽明家江参殿之上
朝廷ヨリ

御沙汰之次第相伺候処、段々六ケ敷御吟味ニテ、余程
御心配被遊候由、全体長土ヨリ頻ニ三條公・姉小路公
ヲ奉責候テ、是非直ニ打払不相成候テハ不相済抔被申
立、両卿之所ハ一向御差ハマリ、御下向之御考ニ被伺
申候、併朝議之所未
御沙汰振不被決、両日中ニ　三公　御出席ニテ、
御沙汰書ニモ御認ニ相成呰候付、存慮之形行申上候様
関白様方御沙汰付、右之義ハ　三郎様御滞　京中ニ、
篤ト　御談判ニモ相成居候事ニテ、今更別段可奉申上
筋モ無御座候得共、既ニ近日
勅使御下向御取究ニモ相成タル事御座候得ハ、兎角攘
夷之
思召段ハ被仰出候テ、関東決定之所不被
聞召候テ、難被遊
御安心、此世態ニ相成候根本、外夷之故ヲ以爰ニ相成
候事ト
御沙汰ニ相成候テ、其段諸大名江モ御達相成候様有之
度申出置候、土州付添下向之由御座候、
一一橋公上　洛ハ、外ニ付添候人モ無之由、
大樹公上　洛付、都合向トシテ上　京之由ニハ候得共、
御都合計ナラハ外ニテモ相済可申義、シカシ越前上
洛等之延引ニ依リ、上　京之段モ申出相成候由ニ御座
候間、何分早目ニ上　京被命、御取寄ニテ何カ御沙汰
ニ相成候テ可然段モ申出置申候、
一三郎様御上　京来春ナト申
思召ニモ御座候ハヽ、
将軍上　洛来三月ニ被召延、　一橋正月方ヨリ被召寄、
三郎様ニモ其比御上
京ニ相成、何欤御談判御座候テモ可然愚考仕候得共、
是ハ其御方之思召不奉伺候テハ押究兼候付、未不申上
候間、御勘考可被成候、
一当分　殿下御初愈御確立ニ被成御座、先難有事ニ御座
候、藤井細事ハ可申上候、
一御増官一条ハ至極之御都合ニテ
関白様御請合、中・正卿ニモ同断ニテ、直ニ
奏聞ニ相成模様ニ奉伺候、御願ヨリモ一階上之所ニテ
中納言様ト　関白様被思召段、内々御沙汰承知仕候、
此段御答書ヲ以細事被　仰上候間、其段御申上置可被
成候、御互ニ御同慶奉存候、
一青門様ニハ、未御煩寸切ト御全快不被為在候由候得共、

最早能キ御模様ニ奉伺候、明朝出立掛、拝謁被仰付筈ニテ、参　殿之賦ニ御座候、中山・正親町卿モ御不快ニテ不参ニ御座候得共、両卿共最早快気ニ相成、中山公モ明日ヨリ出朝之段致承知候、

一御裏御殿之一条等ハ本田ヨリ可申越候、

一太守様御参　勤之義ハ、弥御延引不相成候テ不相済儀ト奉存候間、差急出府周旋可仕考ニ御座候、

一長州・姫路今日参

内ニ相成申候、土州明日参

内之賦之由承申候、シカシ是ハ表通之事ニテ、先初テ之

御目見ト申様ナ都合ニテ、長橋(播カ)之方ニテモ無之由、

御趣意ハ

京師之御為周旋ニ付、参

内被

仰出候由、シカシナカラ参

内ト申ハ格別之事ニテ、今少シ早目ニ承候得ハ、存慮之趣モ御座候得共、跡ヲ恨之事ニテ致方モ無御座候、

一此方守衛人数モ格別誰ニソト申テ名ヲ指シ、御所置不相付候テ不叶訳ニモ被聞申サス候得共、今成ニ被召置候テハ、ツマリ何欤仕出申ハ安中ニ御座候間、大概御人撰ニテ、三十人欤、六拾人欤被差立交代被　仰付候テハ、如何ニ有之哉ト相考申候、差引什長ノ御人撰第一ニ奉存候、御勘考可被成候、

一幕変革モ有之、只今之処ニテハ、勤

王之道モ相立候姿ニ見得候付、滞京之大名守衛御暇被下候義モ申立候ヘ共、急ニ其辺之所ハ難被遊御事ト奉伺候、

一筑前(黒田斉溥)、中旬方ニ上京之由、肥後(細川慶順)・因州(池田慶徳)モ　上京之由承申候、次第ハ良節心得居可申候、

一井上八彌郎当分此方蔵役人ニテ参リ居候処、最早勤済前ニ相成、不罷下候テ不叶義ニ御座候得共、当分御用立ハ候付、滞　京被仰付度段外ヨリ承候間、見聞役ニテモ被仰付、重ニテモ詰被仰付可然欤ト奉存候、是ハ被召置候方可宜ト奉存候、鵜木所ハ矢張相替候義無御座候、是モ御勘考可被下候、

右之外巨細何辺申越度相考申候得共、何分此節ハ別テ急ケ敷、大意迄申越候、此方之形勢等ハ藤井差立候付、当人ヨリ御聞取件々之事共御勘考之上被奉伺、何分可然取計被成度、此段御内用ヲ以申越候条、

御両殿様可被達
貴聞候、以上、

十月四日夜半認　　小松帯刀〔清廉〕

中山中左衛門〔実善〕殿
大久保一蔵〔利通〕殿　　〔同上書にて校訂〕

一六三　〔島津齊彬贈位ニツキ近衛忠熙書翰〕

一六三ノ一　尚々寒気専御自愛ト存候、当地ハ今朝初雪ニテ寒気
相増候也、

追々寒気相増候、弥御揃御勇猛之御事令賀候、尚承度
存候、抑故薩摩守〔島津斉彬〕殿贈官位之儀、兼テ其辺之
叡慮モ被為在候旨ニテ、早速
御沙汰ニ相成、別紙之通幕府江被　仰出候、仍内々右
之写御目ニ掛置候、小松帯刀江モ右之写内々遣シ置候
事ニ候、仍荒々右之段申入候、　勅使明後十二日発足
ニ付、御用繁取紛、大乱書御免可給〔　〕〔欠〕

十月十日認置

修理大夫〔島津茂久、薩州藩主〕殿　　忠熙

三郎殿

一六三ノ二　松平故薩摩守儀、存生中国難ヲ憂、抽丹誠種々勘考苦
心、病末ニ及、弟三郎等江奉為国家遺訓之儀共、達
叡聞
御感不斜候、先代家久雖存命中、権中納言
宣下之家例モ有之候間、以格別之
叡慮、贈権中納言従三位可被
宣下
思食候、右之趣早々御執計有之候様、宜申入関白殿被
命候、仍申進候事、

十月　　〔同上書にて校訂〕

一六四　〔小松清廉宛本田親雄書翰〕

一筆啓上仕候、冷気甚鋪候処、益御安康、御道中無御
滞御着府、恐慶奉存候、然ハ今日関白殿ヨリ御用召ニテ
参殿仕候処、御別紙自　左大将御渡ニテ、今日関東ヘ御
沙汰ニ相成候間、帯刀ニモ可致安堵筈ト被　思召候付、
早便申遣候様トノ御意承知仕、誠以銘心肝、難有次第
筆墨不被尽事ニ候、則急飛脚御取仕立差上申候、御落手
之上ハ、何分御受之次第言上可仕候間、御返事奉待候、
太守様　三郎様ヘモ可申上旨モ承知仕候、右ハ未発之

事候間、〔方平〕岩下・〔友実〕吉井・〔五六〕高崎之三人へハ私ヨリハ不申遣候付、同盟無二之者共ニ御座候付、拝聞仕候ハヽ感悦可仕奉存候、不苦思召御座候、内々被仰聞被下ニテモ可有御座哉ト奉存候、

一御発駕後当表差テ相替儀無之被仰置候、青門様御一条ハ則申上候処、一乗院宮御里坊御近所ニテ可然、猶御勘考可被遊トノ御事ニテ御座候、余之五ケ条モ折角手ヲ附申事ニテ、御上京之折可申上候、御裏御殿ハ別段不被召建之深キ思召、両御所様ヨリ承知仕候、先日御出立迄之間ハ御工夫最中故、帯刀ヘハ不被遊御沙汰トノ事ニテ、委細是モ御上京之上可申上候、此事ハトカク　御意之通ニ奉畏外無御座候ト奉存候、御花畑御殿廻リハ、明十一日ヨリ御取附ニテ、御姫様方御通京迄之内ニハ都テ成就仕奉待候様、精々為相働申賦ニ御座候、右ニ付、是非京都ヘ御立寄、近衛様ヘモ御対顔被遊候様御沙汰ニテ候、尤薩州之御姫様ト云格ナシニ、旅装之侭御参　殿候様可取計旨、　左大将様御下知モ奉承知候、就ハ彼是心附罷成候付、　御発駕御日限、御宿割且御供人数等ノ儀、早々相知レ次第申遣候様、御差図被成下度内々奉願置候、右御内用申上度、如是御座候、恐惶謹言、

戌十月十日　　京都　本田彌右衛門　親雄

江戸　小松帯刀様

追啓、此節御滞府御間モ御座候様之御都合ニ候ハヽ、御申遣被下度、左候ハヽ、尚当地之時情逐一可申上候、間モナク御供ニテ御上京之事ニ御座候ハヽ、別段不申上候、直書ヲ以恐入奉存候得共、機密之事件ニ至テハ書中不尽意、況ンヤ人伝ニテハ尚更徹底不仕候間、此段御断申上置候、〔本田親雄書翰(東京大学所蔵)にて校訂〕

一六五　府下各町商人共へ下ケ渡シ金銭高

十月十三日北〔マヽ〕町奉行池〔マヽ〕田播磨守申渡、同十七日今戸銭鋳製所ニテ相渡、

当春御上洛相済候ニ付、市中町人共へ被下金左ノ通、

一金六万三千両

内訳

五万両　　百文銭両ニ六貫七百拾六文替

壱万三千両　銅四文銭両ニ六貫五百三拾弐
文替
〆銭四拾弐万七百六拾六貫六百六拾四文
竈数
拾三万三千九百四拾壱軒割
壱軒ニ付
三貫百三拾九文七分七厘
番外
三千拾八貫九百拾壱文　品川宿
弐千百八拾三貫弐〔百脱カ〕九拾弐文　新吉原町
合金六万三千両

一六六〔攘夷勅諚書〕

勅諚御書一通、
右昨十五日
近衛様御殿へ被召、従
関白殿下御渡ニ相成、
太守様
三郎様江御達ニ候旨被仰出候段奉承知候付、鎌田市兵
衛・貴嶋李右衛門江為致奉護差下候間、被差上候儀共
可然様御承引可被給候、以上、
京都
戌十月十六日　本田彌右衛門
御国元
御側役衆
二ノ丸
御側役衆
別紙
攘夷之儀、累年
叡念不被為絶候処、方今人民同冀望候攘夷ニ決定無之
テハ、人心一致ニ難到、且此侭ニテハ邦内混淆之程深
以被悩
叡慮候間、於幕府弥攘夷ニ決定候テ、速諸大名江致布
告、且策略之次第、拒絶之期限等衆議相立
奏聞可有之、今度以
勅使被　仰遣候、此旨相心得
叡念徹底之様周還、猶亦報国尽忠可相励内々御沙汰候
事、
十月
〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一六七〔殿中動静一〕

〔慶応元年〕十月十七日

今朝紅葉山

御宮江

御名代田沼玄蕃頭〔意尊、相良藩主〕

十月十八日

殿中無別条、

一美濃守今日モ登城無之、

十月十九日

越前

時服三　〔福井市〕運正寺

右就御暇被下旨、於柳之間和泉守申渡之、

御徒目付　山本喜六

御勘定

右被　仰付旨、於躑躅間同人申渡之、若年寄中侍座、

外国奉行支配定役　杉田晋輔

支配勘定　小普譜　石川又四郎組

支配勘定　北村鐵太郎

右被　仰付旨、於同席同人申渡之、

一美濃守今日モ登　城無之、

十月廿日

御勘定　根立助七郎

同組頭

右被　仰付旨、於御右筆部屋縁頰〔酒井忠績、大老、姫路藩主〕雅楽頭・老中列座、

和泉守申渡之、

一美濃守不快之処、忌ニ付今日登

城無之、

但養子平次郎〔八カ〕、今卯之中剋死去之由、

十月廿一日

松平左京大夫〔頼英、西条藩主〕

名代　武田大膳大夫

其方儀

御留守御警衛相心得罷在大儀ニ被思召候、此段可相達

旨上意ニ候、

小笠原左衛門佐

堀田豊前守

松平日向守

堀　石見守

名代内藤備中守　　田沼玄蕃頭

同文言

右於御白書院縁頰替席雅楽頭・老中列座　和泉守申渡
書付相渡之、

稲葉備後守

同文言

右於芙蓉之間列座　同前同人申渡書付相渡之、

一美濃守、忌ニ付今日モ登　城無之、

十月廿二日

一今朝増上寺（東京都港区）
慎徳院様（徳川家慶）　御霊前江

御名代平岡丹波守、

一美濃守忌ニ付、今日モ登　城無之、

十月廿三日

御軍艦奉行組

富士見御宝蔵番　小普請　石川又四郎組　池永軽之助　木村金次郎

右被　仰付旨、於躑躅之間和泉守申渡之、

大坂表江為御用罷越候儀、其儀ニ不及候、

右於奥相済、

一雅楽頭不快ニ付今日登　城無之、

一美濃守忌ニ付今日登　城無之、

十月廿四日

大御番頭

高木主水正（正坦、丹南藩主）
名代最上出羽守（義建）

右病気ニ付、願之通御役

御免之旨、於芙蓉之間雅楽頭・老中列座、和泉守申渡之、

和宮様（徳川家定夫人）
天璋院様　御広敷番之頭

賢治牌

御作事方仮役

長崎奉行支配　上原悦三

調役並出役

右被　仰付旨、於躑躅之間同人申渡之、

一雅楽頭今日モ登　城無之、

一美濃守忌ニ付、今日モ登　城無之、

十月廿六日

殿中無別条、

一雅楽頭今日ヨリ登　城、

一美濃守忌ニ付、今日モ登　城無之、

十月廿七日

御小姓組

村上越中守組

時服弐　　藪　七郎左衛門

右病気ニ付、願之通御番

御免、且数年出精相勤候ニ付、被下物於御右筆部屋縁

頬雅楽頭申渡之、若年寄中侍座、

一外国人応接有之、和泉守・酒井飛騨守相越候ニ付、

御用捨ニテ今日登　城無之、但御用番代雅楽頭・平

岡丹波守勤之、

一美濃守忌　御免之処不快ニ付今日モ登　城無之、

十月廿八日

殿中無別条、

一美濃守今日モ登　城無之、

十月廿九日

御留守番

伊勢平左衛門

主馬助取米三百俵

為隠居料被下之、　　名代　長谷川太郎兵衛

実子惣領

御書院番

逸見若狭守組

老衰ニ付、願之通御役　　同　主馬助

御免隠居被　仰付、家督無相違主馬助ニ被下之、

右於菊之間、雅楽頭申渡之、若年寄侍座、

大御番頭

大炮差図役頭取勤方

同頭取　　若代鋌太郎

右被　仰付旨、於御右筆部屋縁頬同人申渡之、

田沼玄蕃頭

近々京都江為御用可被差遣候、

一和泉守・酒井飛騨守今朝神奈川表江罷越候ニ付、今

日登　城無之、

但御用番代雅楽頭・平岡丹波守勤之、

一美濃守今日モ登　城無之、

右於奥相済、

十月晦日

殿中無別条、

一美濃守今日モ登　城無之、

十一月御用番

出勤迄水野和泉守

御勝手　本多美濃守（忠民、岡崎藩主）

外国　水野和泉守（忠精、山形藩主）

同　人

御勝手　平岡丹波守（道弘、若年寄）

外国　酒井飛騨守（忠毗、敦賀藩主）

同　人

土屋采女正（寅直、土浦藩主）

平賀駿河守（勝足）

根岸肥前守（衛奮）

御勝手　小栗上野介（忠順、勘定奉行）

公事方　小笠原志摩守（政民、同上）

外国方　菊地伊豫守（隆吉、外国奉行）

和田傳右衛門（惟明、目付）

大久保筑後守（忠恒、同上）

十一月朔日

御太刀一腰　家督之御礼

金三枚　巻物十　戸田助三郎（氏共、大垣藩主）

御馬一疋

御太刀一腰　同

金弐枚　巻物弐　永井傳八郎（直哉、大和新庄藩主）

右於御白書院縁頰替席謁雅楽頭・老中、

参上

日光奉行

小倉但馬守（正義）

干芋一箱

右於芙蓉之間謁同前、

長崎奉行支配

組頭勤方

金弐枚　時服弐　加藤金四郎

長崎表江引越候ニ付、御暇被下、拝領物被　仰付之、

新潟奉行支配

組頭

金壱枚　時服弐　初テ　松長長三郎

新潟表江引越候ニ付、御暇被下、

拝領物被　仰付之、
右於躑躅之間、和泉守申渡之、
参上
箱舘奉行支配
調役
山崎衡三郎
右於同席、謁同人、
参上
扇子
観世太夫
右於焼火之間替席謁同人、
一美濃守今日モ登　城無之、〔幕府沙汰書(東京大学所蔵)にて校訂〕

一六八　明治三十一年三月十六日本田男親雄ノ実話
文久二年　月島津久光公朝廷に玄米壱万石献上に及ひし顛末

抑も久光公が朝廷に玄米壱万石を献上になりし源因は、本田男京都留守居として、内外ニ周旋あるの際なれは、朝廷向の事に付き、何彼と心付らるゝ時に於て、偶々曇華院宮の諸大夫結城筑後守(秀佳)なる人あり、前ハ主税介なりしか、守介となりて大に喜ハれ居たりしか、此時は非蔵人にて、蔵人所主と言ものゝ職なりし、此人に面談の折に、同人より朝廷向の御賄に付、一切の事項を書載せたる原本一冊を贈れり、其書名ハ記臆せざるも、余り他に同類のなき本なり聞けり、(後巻ニ措ク参看)男之れを見て頗る感佩せられ、乃ち此本を久光公に差上たり、公之れを熟覧ありて頗る痛歎慷慨せられたり、乃ち曽て聞く処にては、朝廷の御賄ハ、一年弐拾万両の御宛行なりとの噂を聞き居りしか、此の本に仍て調ふるに、幕府よりの宛行金に、京都高瀬川運上にて、一半を住倉に与へ、一半ハ朝廷の御宛行金に充て、彼是弐拾万両に為し、其金利にて一切を御賄ひする規定にて、誠に薄少の事にて、実に久光公も此本を見給ひて、非常に感慨を催させられたり、此の如き事にてハ、御内情察上るに堪へたり、斯くありてハ、何か献上を為さんとて、終に献米の事に定まり、如何の至難事ありとも、是非聴許を計るべしと厳に命ぜられて、久光公は京地を出発せられ、神戸に趣かせられたりとぞ、仍て男ハ献米の事を願われしに、朝廷にては幕府を憚りて、中々御吟味六ケしく、容易に御聴入に及ハざりしも、男は必至となって願わしに、朝廷にてハ諸侯より直ちに献上に及ひし例なしとて、頗る御六ケ敷かりかとも、仮令

〔朱〕「（曩ニ土州侯ノ願アリシモ、幕之ヲ許サス、史談会速記録第一三輯参看）」
幕府の譴怒ハあるも、厭ふ処にあらずとの決心を為して迫られしよし、仍て朝廷にても、稍々御覚悟も定りしものと見へて、終に聴許に及はせられたり、男ハ近衛家に詰切て願われ居しに、或日御所より飛鳥井中納言雅典殿近衛家に参入ありて、勅命を伝へられしに由り、忠熙公ハ男を呼出され、只今参入ありて、献米の願聴許在せられたる旨を伝へらる〔朱〕「（願書散迭ス）」
陛下にも特に御満足遊させられ、本田も近衛に待居るに依り、早々知せ遣すべしとの御意も在せられたりとの御辞を承りて恐悚に堪へず、本田と言ふ名を何より聞食有させられたるやと実に感戴に堪へず、内心飛立つ計に思ひし事共なりしと言われぬ、
斯く御沙汰を蒙りしに由り、直に久光公の跡を追ひ、神戸（島津家の定宿也）薩摩屋にて、願書を御覧に入れて、聴許の成行を御届けせしに、公ハ書面を拝し、京都の方向に対して、三度拝を為されたると伝聞せり、斯く公も至極本意に思召させしに、然らば速かに献米の手続を為すべしと命し給ひぬ、故に男ハ直ちに奔セ帰らるゝに、此日大雨降りて、淀川堤ハ水溢れて越すの勢にて、道行難かりしも、六人の舁夫を雇ひ、駕を差上けて稍々帰邸したり、此時男山八〔京都府〕
幡宮に祈願を籠めて、此事の成功を祈りたる事共なりし、熱心の情況ハ之程に厚カりし、乃ち御受を申上け、御礼を述へ、再ひ引返して大坂蔵屋敷に図りて、玄米壱万石を集めしめんとせしも、当時大坂にてハ、壱万石の米を一時に引上けて、市内の払底を来す位にて到底出来さる程なれは、止なく下の關に申遣して、凡そ参分の二位ハ集めしめたる事なりし〔朱〕「（下ノ関白石正一郎日記参照）」
斯く昼夜を分かず、稍々集め得たるを以て、夫れより牛車を雇ひ、毎日〳〵洛中に米を引込ましめたり、当時幕府の禁令にて、三條通へハ牛車を引くことを許さん掟なりしも、此時ハ毫も憚かる処なく一生懸命にて、其盛況筆紙に尽されぬ位なりし、而して日和門を開きて、御所内に引込み、紫宸殿の前庭に、山の如く壱万石を積上けしは、実に夥しき事なりし〔朱〕「（非蔵人日記参証）」
此事は前代未聞の事にして、内外の耳目を聳動したる出来事なりし、実に此事は、島津家の家史中、一大偉功として特筆すべき事ならん、此事あって後、毛利家より金壱万両を献納の事もあり、尓後ハ諸大名より　朝廷に直ちに何ノ品物ヲモ献上の例を開きぬ、島津家ハ実に率先者の位置を踏みたるものと言ふべしと、

又後日、結城筑後守へは紺白の細上布抔を贈りて、其労を犒ひし事なりし、同人ハ維新後に至りてハ、岡山県下辺の郡長を奉職したりと聞く、已に両三年前に死亡せりとハ伝聞しぬと語られぬ、

一六九　今熊野伴右衛門の来歴

本田男又曰く、今熊野伴右衛門ハ、船奉行橋口杢左衛門の嫡男なりしか、壮年の際江戸勤番にて、門限をハツシテ脱藩に及ひし者なりしか、文久初年に本田男上京せらるゝ際に、杢左衛門氏男に面せられ、実ハ嫡子あるも、前年門限をはつして脱藩せり、夙に聞くに、京都大佛辺に居りて、伴右衛門と唱ふるよし、京に行かれなは、呼出して何なり御用を命し給われたしと、涙を流して懇願せられしに由り、果して存在せるに由り、邸へハ直に呼寄せ難に由り、快々堂(茶亭の名)に呼ひしに、乃ち来れり、身材長大四拾前後にて、其容体ハ純然たる百姓と成り果て、言語応対更に旧卿(郷カ)人の風体もなかりし、仍て密に杢左衛門氏の旨を伝へて、何か藩用を努めしむることを語るに、大に喜ひ入り、早々腹心を披ひて、内密の探索を命する事とはなりぬ、

初め内外の機密を探るに、上方の事情に通する人を得す甚だ困入りしか、伴右衛門ハ大佛辺の今熊野村と言ふに住居し、農業の片手間にハ或院宮の出入を為し、使僧の供に立ち、挾箱をかつくの役を為し居たりしに由り、京都辺ハ勿論、江州辺江も往来せしに由つて、大に探問の便宜を得たり、

此時彦根藩ハ、櫻田事変後にて多少弱り居りしも、何にせよ五畿の大藩なれハ、始終に念頭に止まさりしに由り、専ら伴右衛門をして彦根の藩情を探らしめたり、爰に往来して藩情を探来り、士族小路の絵図面までも作りて来りし事なり、同人の細作にて、大に此方面の事情を探ること得たりき、

又京都にても、幕府吏の正奸、公卿の事情も悉く探問して細大漏るゝなし、誠に詳密に勤めたり、随て後年久光公へも其次第柄も申述べ、本人ハ勿論長男(ママ)を足軽に召出して召使われるに及ひ、本人の悦喜も一方ならず、伴右衛門も間もなく邸へ出入も為すに及びしが、士分に復して帰籍を許されたるにハあらず、全く新に召出されたる手続なりしと覚ゆ「(水元兼孝カ紀事参看)」

元来立派の士族なりしに由り、精神堅固にして懸念なし、

事情の探問には中々の用立を為せし事なりし、然し始終百姓の体度ハ改めず、一見してハ何人も元同卿〔郷カ〕人なりしとは気付かざりし、男の弟〔ママ〕氏へ一度所持の小刀を見せし事ありしか、中々立派の業物にて、仝弟も大に感心せられ、他所の百姓中々刀も立派のものを所持するものと見ゆと怪まれし位なりしとぞ、思ふに後々の事なりしならんと思ハれぬ、

一七〇　西郷氏伏見会見の談（補遺）

西郷氏の伏見に来られしハ、深編笠を冠りて人目を忍ひ来られしに、着邸の深夜平野次郎〔国臣〕ハ門を叩て、西郷氏を尋ネ来りて面会を求めて、夜中面会せられしか、此時の談柄ハ、トウ〳〵又足下と倶に為すことになりしか、今に及んてハ、止なく一緒に糞川を渉るの外ハあるまじ抔と、殆んと平野次郎一味の談なりし、而して酒を出して貰ひたしとの求めありしも、男ハ用談ハ素面なるを要す、飲むときは飲むべしと言つて、終に出たさざりし事もありぬとぞ、

然し大久保利通氏との談にハ、大坂にて浪士にも面せしか、予ハ決して之れを煽動ハせず、返て押へて置けり、〔朱〕「（南州在島中、木場伝内ニ与ル書翰中ニモ該事アリ）」中々暴動を為す抔の考にはあらずとの談なりしに由り、大久保も我も安心したと言て分かれしなり、跡に西郷氏か浪士と一味なりしとは思ハれずと、又後年西郷召還しヲ願ふときに、久光公か高崎正風へ語り給ふには、西郷ハ先年上京の際に、下ノ關ニも浪士居れば、御先発して頼むべしと言ひしも、同道に至りしも浪士の片影もなし、播州路に及はんと面会を求め、又ハ書面を出したる人もありし、事を詐りて己の所思を遂くるの所為にあらずや〔朱〕「（久光公親話記参看ノテ其事実ヲ知ルヘシ）」と咎め給ふりとなむ、此際の事は、西郷氏ハ浪士の鎮めを担当するの一心なりしも、平生の気風、人の意風ニ出ずる言語動作の人なれば、誤て氏の意衷を解せし人もあらむ、此等の行違ヨリ、氏の一身上ニ関ハる事となりしなるべし、又歴史等の事実は反覆講究せざれば、容易に断案ハ下されざるものなり、西郷氏の一身上の事も、斯く錯雑するに由り、畢ニ表面の断案のみにてハ、正鵠は得ざるべし、実に史談会の催しありて、隠れたも顕はれ、〔る脱カ〕淵れたるも補ふの便を得たるならむ、書類の如きも世の変動毎に漸次ニ散亡するは免かれさる事にて、予等も寺田屋騒動の後に、夫迄に諸氏と往復せしニ、袋計の書類を火ニ扼して焼きし事あり、世上書類を焼棄せしと伝ふ

は無理ならヌ事にて、予等の如きツマラヌ者にても、一身は兎ニ角も、他に煩ヲ及ぼさぬ心持にて焼きしなり、此類世間ニ多々あるべし、

又齊彬公より刀剣を献上せられし事は、公の側用人竪山武兵衛(利武)より伝へきゝし事なり、刀は仝人携へて、近衛公を経て献上になりしものと言ふ、先帝特(殊カ)ノ外御満足に在せられたりとの談も聞きぬ、

一七一 〔堀次郎宛島津久包書翰〕

尚々

一筆致啓上候、向寒之砌御座候処、イヨ〳〵以御平安、海陸無御滞御上着大慶存申候、小子事無異致毎勤候間、御放念可被下候、然ハ小子事御案内之通、来春御供被仰付置、ユル〳〵相考居候処、去ル十五日御用之儀有之、仕廻次第出府イタシ、川上式部(久美)江交代イタシ候様被仰付、難有次第奉存候、然処先日和泉様江拝謁仕、御内用之儀共承知仕候、貴様御承知之趣共委細承知仕、小子出府マテ御在府ニ御座候ハヽ、オノツカラ上着之上、御用談可申上候得共、自然御道中ニ候ハヽ、何卒御行逢被下候ハヽ、別テ仕合ト奉存候、江府表之御都合承知之上、罷登申度御座候間、平ニ御願申上候、明後六日当地出立イタシ申筈ニ御座候、自然船中ニテ行スリ共ニ候ハヽ、無是非次第ニ御座候得共、道中ニ御座候ハヽ、偏ニ御願申上候、今日飛脚立ニ付、荒増此ヨシ得御意候、恐惶謹言、

十一月四日　島津登(久包)

堀次郎様(伊知地貞馨旧名)

一七二 〔中山實善大久保宛藤井正徳書翰〕

御直書壱通　添書迄ス可礼

宮様江被進候分相控置、口上ヲ以テ委細申上候間、返上仕候間、御差上被為下度、尤右之通取計候様御意ニ御座候間、此段宜敷様奉願候、以上、

十一月五日　藤井良節

中左衛門殿

一蔵殿

一七三 軍制改革令

十一月七日軍制改革　太守公御親書ヲ以テ、左ノ如ク令セラレタリ、

家老中江

軍役之儀ハ　金剛定院様（齊興公）御深慮ヲ以テ、慶長以前御三代（貴久公・義久公・義弘公）之御旧法ニ被為基、西洋之砲術（高島茂敦カ和蘭人ヨリ伝習シタル西洋新式ノ砲術）御採用ニテ、御変革相成候処、　順聖院様（斉彬公）分テ御心志ヲ被為砕、調練等時々御指揮被為在候得共、未半途ニモ不至事ニテ、実以テ遺憾不少次第ニ候、然処近年外夷愈猖獗之姿致増長、漸々危急切迫之世態ニ相変候ニ付テハ、軍政向一涯厳重無之候テハ、不相済事ハ勿論ニ候、就テ於当国ハ毎事ニ西洋人ノ挙動ニ倣ヒ候儀ハ、兎角人心之帰嚮薄ク、迚モ十分ノ境ニ至リ難ク、別テ令心配候、依之猶又致熟考、慶長以前ノ御旧制ニ従ヒ、軍備改革申渡候間、軍役方之面々綿密ニ尽吟味、趣意貫徹候様可取計候、尤モ攘夷之儀、今般

勅使ヲ以テ、関東ヘ被仰進候由致承知候得ハ、若夷賊掃攘之儀　台命相達候節ハ、其通速ニ被行候様、手当不行届候テハ、奉対

天朝幕府無申訳事候条、此旨厚相心得、聊緩怠之儀有之間敷候事、

但台場備之大砲等ハ、是迄之通西洋之規則ニ基キ可申候、乍併是迄モ万事彼之法制ヲ学ヒ候儀ハ、我国風ニ不応儀モ可有之候間、右等之処深相弁、成丈簡易ニシテ行レ安キ様可致研究儀、専要ニ存候事、

十一月七日

右ニ国老連名ノ添書ヲ以テ布達セラレタリ（国老添書略ス）、這時隊制編伍ヲ改革シ、操練ノ式、進退駈引ノ法ニ至迄悉ク変更セリ、詳ニ文久三年英艦ト争戦ノ部ニ記ス、

編者曰、御家ニ於テ旧来ノ軍法アリ、則チ　貴久公　義久公　義弘公専ラ被為用タル法、則チ御家流ナル者ナリ（御三代ノ御軍法ト唱フ）、然ルニ　吉貴公御代ニ方リ、武田流（一名甲州流トモ唱フ）ヲ以テ全国一般ノ軍制タルヘキ旨、幕令ニ依リ改革セラレ、五十騎又ハ三十騎ヲ一隊トシ、弓・槍・銃三器三段五段等ノ編伍ニ改メタリ、然ルニ天保ノ末、　齊興公尊慮ヲ以テ西洋新式ノ砲術御採用、御流儀ト称シ、成田正右衛門（旧名鳥居平七、正之）ニ師範ヲ命セラレ、而シテ弘化ノ初メニ至リ、琉球国ヘ佛英ノ夷艦渡来、通信・貿易或ハ宗旨（則チ耶蘇宗）ヲ伝ヘン事ヲ乞ヒ、其後浦賀其他各所ニ来舶、同シク通信・貿易ヲ乞フニ至レルカ故、軍備ヲ修メ、防禦専用ナルヲ以テ、弘化丙午ノ夏、大小砲製造所及ヒ操練場（一名調練場トモ唱フ）

ヲ創建セラレ、而シテ同年十月十月朔日発令軍制ヲ改革セラレ、御三代ノ御軍法ヲ基本ニ立、西洋ノ法ヲ斟酌セラレ、隊制編伍惣鉄砲ノ制ニ一変セラレタリ、此時ニ至リテ甲州流ノ隊制ヲ廃セラレ、先中後ノ隊ヲ定メ操練ヲナサシメ、年ナラスシテ兵制頗ル整ヒタリ、而シテ

〔島津斉彬〕

照國公ニ代リ益兵制ヲ精フセラレ、大小砲ヲ製造シ、或ハ砲台ヲ築造セラレ、薨逝ノ前頃迄御躬御勉励指揮アラセラレタリ、如此御両代連綿指揮セラレタルカ故、兵制整成、器械充備、不虞ニ応スルモ憂ヘサルニ至レリ、然ルニ今回改正ノ令ヲ発セラレタルハ、実ニ時勢人情ニ於テ、已ムヲ得サセラレサルニ出タル情実アリ、如何ントナレハ、近代外夷倨傲ニ募リ暴慢ノ挙動甚シク、茲ヲ以テ攘夷鎖港ノ説四方ニ起リ、特ニ

朝廷ニ於テモ鎖攘ノ

宸念被為　在、既ニ

勅命モ発セラレタルカ故、一般鎖攘ヲ以テ国是トシ、従テ西洋ノ兵制器械モ忌嫌スルノ人情ニ立至レリ、本藩ニ於テモ又然リ、故ニ時世人情ニ於テハ利否巧拙ハ姑ク措キ、古式・新法其差違素ヨリ論ヲ俟タスト雖モ、如何セン彼ヲ攘斥スルニ、汲々タル人情ナルヲ以テ、従テ彼カ製式ニ模擬スルヲモ好マサルカ故、已ムヲ得サセラレサル者ニシテ、改革スヘキヲ令セラレタル者ナリ、○当時一般鎖港攘夷ノ説、上下共ニ主張スルカ故、従テ洋式ノ兵制器械ニ至ル迄嫌悪スルニ至レリ、元来銃砲ハ天文年中洋人ノ伝授セシ者ナルハ悉ナ人ノ知ルカ如シ、而シテ日本ニ於テ尚ホ発明折衷シ、種々ノ流派ヲ立タリト雖トモ、多クハ治世席上ノ論ニシテ、西洋各国ノ如ク、絶ヘス実場試験ヲ経テ、大成シタルニ非ラサルカ故ニ、巧拙利否素ヨリ論ナシ、茲ヲ以テ　照國公ハ其利害得失ヲ挙ラレ、御明文ヲ以テ示サレタルハ、安政ノ始メニアリ、然リト雖トモ、時勢ノ変換ハ四時ノ変遷ニ同シク、人情ノ更替ハ、又昼夜ノ運動ニ等シク、如何ントスヘカラサルハ古今ノ通議ナリ、爰ヲ以テ、人情時勢ニ循ハセラレ、改革スヘキヲ令セラレタル者ナリ、然ルニ又洋式ノ銃砲主張ノ輩ハ、利否得失ニ就テ、痛嘆スルモ少カラス、其輩ハ時勢已ムヲ得サルカ故、一回ヒ実戦ヲ経タルノ後ニシテ、必ス利否

ヲ弁知スルヤ疑フヘカラスト声〔ヲ呑ミタリシニ、果シテ癸亥七月戦闘ノ後、倏チ弁明シ、旋条銃或ハ長尖弾等新式ヲ主張スルニ変シタリ、詳ニ癸亥七月戦闘ノ編ニ記載ス〕軍制改革ヲ令セラレ、当時主張スル処ノ荻野流式ノ銃砲ニ帰セラレ、小銃製造所モ創設セラレ、許多ノ工匠ヲ集メ、昼夜兼業製造セリ〔製造所ハ鹿児島塩屋村字七曲ト言ヘル海浜旧造硝場ノ跡ニ新設セラレ、鉄工ハ平佐・種子島等ヨリ召喚シ、雷管機折裏ノ製式ナリ〕〔旧邦秘録にて校訂〕

一七四　〔久光上京ヲ促ス書翰〕

関白殿下ヨリ

此節ハ不容易被為蒙

天命、結構之御事ニ候、就テハ精々早目御仕舞被成、可成来月下旬迄ニハ御上京有之度、一筆以書状モ申上越候得共、猶又其方ヨリ御勧メ可申上、

勅使會津抔上京前ナラハ、別テ御都合モ可宜ト可申上旨、再三承知仕候事、

別ニ私ヲ以御伺申上置候事有之候、

十一月十三日　〔忍津忠承氏蔵本にて校訂〕

一七五　〔久光上京ヲ促ス近衛忠熙書翰〕

〔戊十一月廿六日達ス〕

修理大夫殿へ宜御伝言可給候、〔久光娘、近衛忠房夫人〕貞姫方ヘモヨロシク申可被下候也、

追々寒気増長候、弥以御揃御勇猛之御事珍重不斜候、扨ハ此度京師守護職之儀ニ付、早々御上京〔正風〕□□□御少次ニ付御伝申入候、高崎佐太郎差下ニ相成候、何モ御聞取可給候、先々　勅使下向存外関東之模様モ□□□安心々々之事ニ候、実ニ御周旋之儀ニテ一・越出頭有之事、越之処分極ニ相成、実ニ□□□□御上京候儀、急々之儀実ニ何共々々御気之毒〳〵御迷惑之事御察申入候得共、　勅使上京引続一橋・會津等上京ニ相成候モ難計、何卒々々少シモ早方々御上京、来月下旬迄ニ御上京相成候様、偏ニ御頼申入候、色々申入候儀モ在之候得共、差急キ荒々申残候也、

十一月十三日申刻

寒気可被用心ト存候也、

忠熙

三郎殿

御下　〔同上書にて校訂〕

一七六 〔齊彬贈位ニツキ近衛忠熙書翰〕

一七六ノ一
尚々寒気御用心〳〵、三郎殿御上京御待申入候也、
寒気増長候、弥御揃御勇猛之御事珍重候、抑故薩摩守
殿贈中納言従三位之儀、関東へ
御沙汰之通返答在之候、先々安心々々致候、
御沙汰之通御成就、珍重々々不斜候、早々御知セ申入
度、荒々是ノミ申入候、甚繁務取紛、大亀文可免給候
也、

写入覧候也、

十一月十九日　忠熙

三郎殿
修理大夫殿

一七六ノ二
松平故薩摩守儀、存生中……
……
以格別之
叡慮、贈権中納言従三位可被　宣下被
思食候趣、早々取計候様、関白殿被命候旨致承知候、
修理大夫出府未無之候間、同人名代之者江、今十二日
御沙汰之通被　仰出候、此段関白殿江御申入可有之候、
以上、

十一月十二日

井上河内守〔正直、浜松藩主、老中〕
板倉周防守〔勝静、備中松山藩主、老中〕
水野和泉守〔忠精、山形藩主、老中〕
松平豊前守〔信義、丹波亀山藩主、老中〕
松平春嶽〔慶永、政事総裁職〕
一橋中納言〔慶喜、将軍後見職〕

坊城大納言殿〔俊克、武家伝奏〕

〔同上書にて校訂〕

此二通戌十二月四日吉井幸助便達ス、

一七七 〔上洛ニツキ諸道中筋荷物小車使用許可立合〕

十一月廿五日
学問奉行
本多伯耆守〔正訥、田中藩主〕

右御用相勤候様被仰付候、
右和泉守宅江家来呼達之、

御勘定奉行

根岸肥前守（衛奮、勘定奉行）
名代 溝口八十五郎（勝如）

此度御道為見分罷越候節、
御趣意柄モ乍相弁、無益ノ手数相掛、下方為及難儀候
次第不束ノ事ニ候、依之差控被仰付、
右今晩河内守宅オイテ申渡、大目付竹本甲斐守（正雅）相越、
大目付
御目付 江

諸道中筋御用荷物其外共、車相用候ノ御場所ハ、車ニ
テ運送不苦候、尤小形ニ補理、往来ノ妨不相成、道橋
破損不致様心ヲ用、引通可申候、
右ノ趣御料ハ御代官、私領ノ地頭・領主ヨリ可被
相触候、
右ノ通可被相触候、
十一月
右書付和泉守渡之、
十一月廿二日

一七八 〔勅使攘夷ニツキ帝都警備ニツイテ仰出〕
一七八ノ一 今般以

勅使攘夷之事被
仰出候ニ付テハ、諸蛮江漏聞難計、帝都非常之御備無
之候テハ、御不安心之儀ニ付、御備之儀同関東江被
仰出候、右等之御時節ニ付、暫滞在有之候様被遊度
思召候事、
十一月

一七八ノ二 攘夷之儀被 御達シノ人不分明
仰出、御一定之上ハ御実備不被具候テハ難相成儀、追
々御手当モ有之候ニ付、於松平淡路守（蜂須賀茂韶）モ兼々京都御警
衛被
仰付置候儀、尚亦於阿州ハ近海渡口ノ要所ニモ有之候
間、其辺守衛モ被
聞召度、旁此比早々上京可有之
御沙汰候事、
十一月 〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一七九 〔勅使滞在ニツキ非常警衛ノ仰出〕
今度攘夷ノ儀、関東江被
仰出候ニ付、暫滞在、非常御警衛被

仰出候間、格別之以
思召、来月四日巳剋、参
内被
仰出候事、

十一月

〔同上書にて校訂〕

一八〇 〔島津刀剣献上ノ一件及ビ関白人事ノ件 中山忠能書翰〕

又候巨細申入候、前左府ニモ参
内被止置候次第、右ハ関東ハ勿論当地ニテモ　関白其
余役人且ツハ近臣之中ヨリ、種々外事ニ寄セ　言
上之事トモ有之、夫レヨリシテ前左府并ニ　青蓮院宮〔尊融親王〕・
鷹司前右府〔輔熙〕公不存寄災難ヲ被蒙、唯今ニ兎ニ角色々ト
上ニモ　御疑心不被為晴候御模様ニテ、何共御悲歎不
一方候事ニ候、乍去今度修理大夫殿ヨリ之
御剣伝献ニ付、御満足様御模様ニテ、不存寄
宸筆　御製可伝様拝領被　仰付、深以畏々候事、乍去
是ハ誠之
叡慮ニテ被出候義、何分前左府忠房ヨリ　言上ニテ、何
カ程克被　聞召候辺如何ト心配候、是ハ全ク恐多クモ
叡慮ヲ奉迷人体多在之、夫ヨリシテ誠ニ不存寄　御疑
心共被為在、甚以歎息仕候、右之辺、〔中山実善〕尚之介上京之節
ハ巨細ニ申入兼候事ナカラ、最早今度ハ在体申サスハ、
何カ御聞取之辺モ如何ト打明申入候間、巨細厚御察之
程御頼申入度候、実々御誠忠之程ハ当然之義、是ハ有
志諸藩折合
叡慮ヲ被為安候様良策モ候ハヽ、兎モ角モ何分右之次
第厚御〔汲〕組取御勘考之様頼入存候事、
且又、実々前左府ニハ、一昨々年御隠栖後、何カ御
根気薄ク、迚モ〳〵御再勤之御懸念毛頭不被為在義
忠房ニハ其辺深悲歎ニ存候事ナレ共、何分当時之御
模様ニテハ、御遁世之方安心之場合ト存候ニ候、且
又自然九條〔尚忠〕関白辞職之次第ト相成候節ハ、当時一條
左大臣〔忠香〕至テ矛弱〔元ノマヽ〕之性質〔柔カ〕、迚モ当今之職ハ難被勤候哉
ト被存候、二條〔斉敬〕右大臣ニハ可然人体ト被存候、当時
之処九條家親族之義、旁全付合之様ニ被存候、何分
右之公ニ候ヘハ、屹ト関白職可被相勤哉ト愚察候事、
何モ御賢考御頼被入候事、
此二通書取乍乱書、市蔵心覚ヘ迄ニ染筆候、決テ
他見無用々々、入覧後投火々々頼入置候事、

一八一　〔島津久光宛中山忠能書翰〕

市蔵へ被申越候、実以御誠忠厚情之程至極御尤千万勘要之事ト存候、然処旧冬尚之介被指登候節ニモ、委細申入候通　公武一貫ト申表ハ御訳故、只今他向へ勅諚抔被出候御場合ニテハ決テ無之哉ト被伺候、朝廷御模様柄、殊ニ於忠房右等之義、商量毛頭致カタク、実以当惑仕、就テハ朝廷之　御力ニモ相成候ホト之警衛モ有之候ハヽ、勅諚モ可被出哉ト、種々御遠察之御誠実当然之義、至極御尤モ頼モ敷義ト存候ヘトモ、仮令数千万之衛護周備有之候共、即今之所只無益之騒ニ相成候而已之義ニテ、遠察符合之時節ニ無之、唯今達テ取行候テハ、志願之筋ハ不相通、カヘツテ事之破ト相成、忽御膝元及混乱候義ハ眼前之事ニテ、天朝之御為ニモ不相成、被悩宸襟候一ツト相成候テハ、是又不容易恐入候次第ト存候、乍去有志之諸藩合体シテ不被悩　宸襟候様、諸藩ニ所置之有之候事ニモ候ハヽ、皇国之御為不被悩叡慮候様良策頼モ敷候ヘ共、朝廷　御政事ニ不拘、忠房抔ヘ重キ勅諚ヲハ被出候様可取計被申越候トモ、所詮其義ハ不能義、何分　御政事向商量難致義、摂家ト申セハ大小トナク朝廷之　御政事ニ可拘ト、一ト通リ被存候処ハ至極御尤モニハ候ヘトモ、何分摂家ハスヘテ　太政官之事ハ、勅問ニ従商量仕候事ナカラ、今日之　御政事向万端ハ摂家之内ニテ関白唯一人事ヲ執候義、仮令左大臣・右大臣タリ共、内覧宣旨無之ハ　御政事ニ不預義、既ニ当時之左大臣始ハ内覧ニ無之候故、更ニ商量難致義、前左府ニハ内覧之被蒙宣旨候事故、専　御政事ニ拘リ候御事故、是迄スヘテ言上モ出来候義、何分内覧ニ無之大臣始ハ当時之処商量難致義ニ候、尤前左府御勤仕中、元来天朝之御大事ヲ被存候ヨリ事起、終ニ不量之御隠栖ト相成候御次第ニテ、今以参内モ不被許、元々御合体之御旨趣及懸隔、当時之処ニテハ

御時宜之程モ甚如何ト難被許、乍蔭
朝廷之御大切之御念慮ハ、御間断無之候御事被申越候
条、忠房ニモ当然之事ト御尤ニ存候へ共、前文之通
御政事商量不仕身分、迚モ言上抔其義ニ不能、正親町
三條〔実愛〕ニモ役人ナカラ新役、殊ニ彼是ト九條関白へ随従
之役人中夥敷有之候事故、迚モ度々
御前へモ難被出次第、何カ〳〵六ケ敷〳〵事共故、甚
痛心候、何分　御政事向スヘテ之事商量難致義故、右
之辺御推察勘弁之程厚〔願〕頼入存候事、
此書外市蔵へ申含置候侭御聞取可給候也、

一八二　〔中山實善大久保宛岩下方平高崎五六書翰〕

勅使御下向以来種々議論モ有之候段ハ、吉井仲助〔友実〕ヨリ
委細御聞取ニ相成候半、其後既ニ板倉出職、一橋公暫
御引籠、此節亦々御登城相成申候、先日ヨリ越・土両
老公御尽力ニテ、一橋公初閣老等之処至極之御同論ニ
相成之由、今日越前横井平四郎〔時存〕ヨリ承存申候、就テハ
イツレ明春早々越・土等上京、大決策有之筈之由、右
御着以前ニ是非々々
三郎様御上京相成居候様可申上旨、呉々モ横井ヨリ承
申候、越・土両老公以之外ニ
三郎様ヲ御渇望之由ニ御座候、右ニ付、態々急飛脚差
立候間、十分御尽力可申候、御上京ハ正月廿日迄ト申
事ニ御座候、此方ハ正月七日方ニ御発駕之内決之由、
一勅使御入城モ廿七日無御滞相済申候、将軍様ニモ御玄
〔関カ〕
喚迄御送迎有之、
勅書御渡等之式モ余程尊崇之体ニ為有之由、
勅使ニモ是ニテ御安心出来候由御噺モ御座候、攘夷一
条ハ、暫時ハ異論モ起候勢之処ニ、先於関東御受諸侯
へ布告ト申迄ニテ、策略期限等ハ明春上洛之上、猶又
叡慮ヲモ相伺、衆議ヲ尽候上ニテ可申上トノ事ニ相成
候筈御内意之由御座候、是ニテ両方御熟談都合宜敷相
成申候、
一彦根公〔井伊直憲〕一列、高松公〔松平頼聡〕一列等御科目被仰出、是等ハ全
将軍様御自身ヨリ之思召付ニ候由、尊
王之思召至極厚由ニ御座候、決テ虚説ニテハ有之間敷
候、
一大赦モ仰出相成候、水府モ因州公〔池田慶徳〕至極之御尽力ニテ能
都合ニ成立候テ、大場〔景愛〕・武田〔正生〕・岡田〔徳至〕三人復職相成候由、
尾州モ能相成、田宮彌二郎先日致出府候、其外為差異

事モ無之、委細ハ別紙ニモ申進候、何ヨリニモ御発駕之処、御尽力可被成候、以上、

十一月晦日　　岩下佐次右衛門〔方平〕
　　高崎猪太郎〔五六〕

中山中左衛門殿
大久保一蔵殿

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一八三　〔京師事情報告書〕

弊政一新ノ機会ニ乗シ、都下狡譎之徒堂上高貴ノ御方々ヲ不憚、無益ノ投書張紙等イタシ、失敬不遜ノ語ヲ用、朝憲ヲ致軽蔑候訳ニ相当リ候、且亦市中繁華ノ地ニオイテ無頼ノ少年共児女ヲ嚇シ、市人ヲ悩シ、或ハ薩・長・土三藩ノ名ヲ偽設、大ニ士風ヲ損候次第不堪傍観、此以後右様ノ妨イタシ候者於有之ハ、町奉行ヨリ遂穿鑿屹ト取締、正邪分明ニ賞罰之道相立候様、武辺ヘ被仰出度奉存候事、

十一月

一八四　〔島津久光宛山内豊信書翰〕

尚々当地之様子ハ、猪太郎ヨリ委曲可申上候間、不贅候、呉々此上　京万事

朝廷之御周旋可被成候、以上、

未得拝顔候得共一書呈研北候、先以益御安全可被成御座奉遙賀候、方今天下之形勢

足下委細御承知之通、実安危之機会此時ニ御座候、来春ハ

大君ニモ御上洛彼是ニ付、　足下モ御上京可被成、於関東ハ春嶽初

皇国之御為筋日夜苦心仕候得共、依頼仕候者無之候テハ、大事件独力ニテハ決テ成功之定見無之、何卒

足下御上京之上ハ御互ニ尽力、

日本之国是如盤石仕度、是奉対

聖天子候赤心ニ御座候、先ハ右等之義、大略如此御座候、書外奉期面会候、頓首、

十二月朔　　松平容堂〔山内豊信、前土佐藩主〕
　　再拝

島津三郎君
座下

〔封〕

略文麁紙失敬至御海涵可被下候、〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一八五　〔島津久光宛松平慶永書翰〕

一翰致陳敬候、厳寒之節ニ候処、愈御清安珍重存候、
陳ハ尓後殊之外御疎遠罷過不本意千万存候、扨御帰国
之後モ、天下之形勢、廟堂之光景モ種々転換有之、何
分危急切迫之秋ト相成、
天使御下向、降
勅之御次第モ不容易事共ニ有之候、乍併天下之人心如
当今義方ニ向ヒ、致奮発候義ハ二百年来希有之盛事ニ
テ、乍恐
聖明之感動被為成候所ニ候得ハ、此時ニ当リ、
皇国之衰運挽回無之テハ、万歳ヲ経候テモ其期有之間
敷ト不堪激励候得共、兎角不才非力、不行届而已ニテ
恐惶不少候処、近来容堂モ登城被仰付、廟議参予ニ相
成候故大ニ力ヲ得、精々粉骨罷在候、
御上洛モ愈来二月御決定之事ニテ、其節ハ御宿望之通
リ
朝廷・幕府之御親睦御熟調ニ不相成候半テハ、是亦相
済不申訳候得共、
京師之御都合ハ甚不案内之義ニテ、目途モ相立兼、痛
心此事ニ御座候得ハ、此際之御周旋ニヲイテハ、偏ニ
賢兄之鼎力ニ無之テハ、決テ行届申間敷ト申談候事ニ
候処、曽テ御上
京被成候様
御内旨モ有之哉ニモ致承知候得ハ、旁御賢労ニハ候得
共、御支度次第一日モ早ク御上
京相成候様致企望候、左候得ハ容堂申合セ従是モ上
京イタシ、於
輦下及御熟談、
官武之御合体之基本モ、
皇国万安之大計モ粗商議ヲ極メ候テ、御上
洛ヲ御待受申上候様仕度儀ト存候、尤容堂申談シ候次
第、此地之形勢等ハ総テ猪太郎之口上ニ譲リ、不及委
細候間、御聴取相成候様所仰冀ニ御座候、何分ニモ此
機会ハ千歳之一遇ト被存候得ハ、唯々御上
京再度之御尽力御座候様
皇国之御為ニ翹望依頼罷在候、且又高崎・岩下・吉井
之三士先般以来精忠尽力不容易周旋共ニテ、暗々　幕
政之裨益ト相成候義モ不少、重畳之感荷之至ニ候得ハ、
可然御褒詞モ被下候様、於劣生所希ニ御座候、楮余之
心緒ハ来春之面晤ヲ期シ、出仕前草々布字如此ニ候、
頓首、

十二月朔日　　松平春嶽

嶋津三郎様

二白時下御自愛致専念候、呉々本文之趣宜御聴受所希ニ候、已上、

〔同上書にて校訂〕

一八六　〔近衛忠熙宛松平慶永書翰〕

写

謹奉捧一書候、厳寒之候ニ御座候処、倍御清泰被為成御座、恭賀之至奉存上候、然ハ先達テ高崎猪太郎参上仕候節、段々　御懇篤

御内諭被成候趣、猪太郎ヨリ逐一申達、謹テ奉拝承、難有仕合奉存候、天下危難之秋ニ当リ、不学無術之小臣重職ヲ丙シ罷在、奉辱

勅任候義モ可有御座欤ト、夙夜不堪恐懼候得共、切迫之機会、陳謝仕居候時ニモ無御座候故、唯々

皇国之為ニ一身ヲ抛チ、誠赤ヲ以奉報

叡旨ト存詰候ヨリ外、何等之術計モ無御座候、就テハ島津三郎儀ハ、国忠抜群之者ニモ御座候故、此度

勅使ヲ以、被　仰下候御儀モ計議仕度、猪太郎ヘ申含指越候事ニ御座候、委細ハ従同人可奉達　高聴ト奉存候、此度

勅使ニ付テハ、何角御斟酌被為　思召候哉ニモ、窃ニ奉窺上候得共、聊被為掛

御念慮候御儀共無御座候、幕府一層之奮発ヲ添、重畳難有仕合ニ奉存候事ニ御座候、尚此上共不堪候義ハ、幾重ニモ御警策被成下置候様奉伏願候、右ハ別テ御垂諭之御請迄、猪太郎江託シ奉捧一書候、他ハ同人之口上ニ譲リ、併テ奉期不遠上　京拝候之時候、誠恐誠惶頓首百拝、

十二月朔日　　越前々中将

近衛殿下

侍執

〔同上書にて校訂〕

一八七　〔大久保宛本田親雄書翰（十二月四日）〕

〔包紙〕

御国元　　京都

大久保一蔵様　　本田彌右衛門

平易要用

一筆致啓上候、厳寒之節御座候得共、弥御安康被成御座奉大慶候、先般ハ結構被為蒙　仰候段、御吹聴被下、誠ニ以恐悦為国家大慶不少、尚此上之御尽力偏ニ奉企

望候、弥以御責重大ニ御成之上ハ御配慮モ又不一方御事ト万端奉推察候、追々御国政御更始種々難有御救助向、且御兵備御嵩紳等之件々只々肺腑ニ銘難有次第、士民鼓舞之体如見遙察仕候、善政美事御振興只此時ト奉存候、精々御尽力奉希上候、当地　御姫様方御機嫌（島津茂久前夫人）能御滞在、先日ヨリ少々御風邪気ニテ　暐姫様御薬用等被為在候得共、奉案程之事ニテ無之、真ニ御養生御念ノ為ト申事ニテ、昨日ヨリ　御出モ被為在、東山（京都市）・（同上）祇園・清水御一覧、御帰リニ圓山（同上）江舞御覧御興ニ入候由、今日ハ

陽明ヘ御参　殿被為在候、明日ハ嵐山（同上）之御賦ニテ候、六日御出京也、分ニ随混雑仕候得共、何分難有事ニテ候、随テ私ニモ去月廿五日京都御留守居ヘ御役替、一詰銀・妻子養料被下置候旨被仰付、去ル閏八月被　仰付候処ニテ相心得、其節被相渡候御書付ハ返上仕候、誠以分外難有仕合、乍憚御欽慶被下度候、右御礼御吹聴申上候、

一帯刀殿去月廿四日御先ニ御着京、夫故万事御内用相運、至テ此節ハ小生之為ニ幸之大幸ニテ候、大抵御国元ヘ伺越候様之事モ爰元ニテ相運仕合ニテ候、

一近衛様御方江モ、

貞姫様御上京少シ御延月ニ相成、梅芳院始其外御出来物等之事ニ至テハ、致シ易キ場合ニ相成、少ハ瑣細之事運付可申存申候、

一京地差テ相変候勢モ無之、吉・中下国後ハ先何モ無事ニテハ候得共、日々少変化ハ有之事ト御推計可被下候、関西之諸侯大抵上京之風ニ相成申候、

一藝州（浅野長訓）侯御上京、七八日滞在、参　内被仰付　陽ヘ参殿モ有リ、畢テ関東ヘ下向、

一藤堂（高猷、伊賀守）侯右同断ニテ帰国有之候、其内両度程モ薩・長・土三藩之内ヨリ招請ニ相成、長ノ前田・土ノ平井参リ候由、因州ノ安達モ参ル、小生ハ両夜共断不参、去月廿九日陽明ニテ謁見イタシ候、是ヲ望ニ人君ノ体ニモ不似処アリテ、不感心ニテ候、左右大臣外、伊勢神宮之守衛ト云事ヲ願付帰国相成申候、

一佐賀（鍋島斉正）ノ隠居候御上京イマタ可否之論ヲ不承、昨日陽明ヘ参　殿候由ニテ候、

一肥後細川良之助上京、是ハ公子ニテ、先年喜連川ヘ養子ニ行、当人出奔ニテ当時細川ヘ還家之人也、

長岡監物（足冬）跡ヨリ出候賦、君侯モ当月中旬京着之賦也、

一久留米帰国イタシ候、
一長州侯〔毛利慶親〕御実母江戸ニテ病死之由、当分忌中ニテ候、
一阿州世子〔蜂須賀茂韶〕君淡路守近々上京不日着之筈也、蜂須賀駿河今ニ在京ニテ候、随分人望有之者之由ニテ候、
一修山陵之事追々御手始リニテ、当分南山江宇都宮藩中戸田和三郎并京師谷森外記其外召列参リ居候、
一長州之議論一向取ニ不足ノミナラス、様々妨害ヲ生可申、大息之至筆紙ニ難尽候、篤ト帯刀殿ヨリ御下着之上御聞取可被下、若又御遅着之模様ニ候ハヽ、後便可申上候、

右ハ取込中不取敢乱筆ヲ以申進候、尚御地之次第追々御申聞可被下候、何分
御上京御発相成候ハヽ、早々御申越可被下候、御方々御待被遊候事ハ追々申上候通之情実ニテ候間、不申上候、右御尋旁御祝儀御礼相混如是御座候、恐惶謹言、

京師　　本田彌右衛門

十二月四日認

大久保一蔵様

参人々御中

乍末筆御両親様江可然御申伝可被下候、愚母ニモ湯治ニ参候処、御母君様御一緒之由、追々参上之事モ申遣、例之狂態想像イタシ候、多弁御叱リ可被下候、吉祥院モ先日出立為致申候、三十金遣申候処、大御喜悦ニテ候、御上京御供折角禱居候、早ク再会偏ニ企望候、積話如山、一夕話ニ散度候、奈良原氏其外ヘ乍憚宜御伝ヘ可被下候、
一高崎左太郎儀、此状相達候迄ハ所詮在国ハ無之筈ナカラ、何分早目上京候様御申付可被下候、〔本田親雄書翰（大久保利謙氏所蔵）にて校訂〕

一八八　本田彌右衛門大久保正助へ書翰

貴翰細々拝誦、今夕弊廬何モ故障無御座候付、大鐘〔今五時〕比ヨリ御入来可被下、田氏〔内田政風ヲ云〕江ハ昨夜小生ニモ差越、深更迄閑談仕候間、今日罷出御寛会ヲモ相願候内存ニ御座候処、幸之至何モ御直ニト申省候、貴答迄早々如此御座候、已上、

十二月六日　　本田彌右衛門

大久保正助様

貴酬　　〔同上書にて校訂〕

一八九　〔中山實善大久保宛小松清廉書翰〕

於其御地
上々様御機嫌克被為　入候半ト恐悦奉存旨、於爰許
御姫様方御機嫌克被遊　御滞坂、恐悦御義御同慶奉存
候、
一御姫様方、京都両日御滞在之御賦御座候処、暐様少々
御風邪ニテ、殊之外御滞留御日込ニ相成、去ル六日京
師　御発輿、伏見御止宿ニテ、一昨七日大坂江
御着ニテ、御機嫌克被遊　御滞坂、明後十一日当地御
発足之御賦ニ御座候、
一京都江去月廿六日
御着ニ相成、三日ヨリ
御全快ニテ、清水・祇園・丸山端療舞
御見物等被遊候、同四日ニハ　近衛様ヨリ被遊　御参
殿候様被仰進候付、御旅粧之事ニテ、再往御断被仰立
候得共、
暐様ニハ御歌之御門弟、其上亦ト御上　京モ不被成事
候付、強テ
御参殿御座候様被仰進候付、四ツ時ヨリ
暐様御参殿ニテ、夜入四時分　御帰殿ニ御座候、
寧様ニハ御断ニテ、御出無御座候、同五日嵐山北野江
御出ニ相成申候、六日五時京都
御立ニテ宇治江被為　入、夜入過伏見江
御着、其外ハ別段申上候義無之、御滞京等之御次第、
御両殿様為御安堵申上越候、
一兵庫辺ヨリ蒸気船江御乗船被為　在候様ト之趣ハ、其
元出立之砌致承知、其上我々共ニモ、其方ニ被遊度奉
存、江戸表ニテモ細々申上候得共、中々六ケシク御座
候、段々先便申越置候通ニテ、浪花辺之間ニ、是非
御乗船之方ニ御進メ申上考ニテ、昨日迄精々申上候得
共、段々御苦情之説モ有之、其上
寧様之所、一昨日川御下リサヘモ、漸御乗船被為出来
候事共ニテ、実事六ケ敷御訳合ニ御座候、邂逅、
御両殿様ヨリ御手厚被仰上候義モ有之、甚御気之毒ニ
被　思召上候得共、此義丈ハ御断被仰立候付、無拠中国
路　御通行之筋ニ被仰出候、永平丸ハ御国元御用之御
荷物、当所ヨリモ御積込ニ相成、廻船申渡置候付、当月
末方迄ニハ着船可致相考申候間、其段御申上可被成候、
一京師表当分先静謐ニ御座候、併段々少々之事共ハ有之
候付、左ニ申上越候、
一青門(尊融親王)様先程ヨリ之御煩、イマタ御全快不被遊、本田・

藤井抔大心配イタシ、当分志々目獻吉御薬煮シ方ニ、カノ御方江差上申候処、今比ニ相成至極能キ御塩梅ニテ、モフハ決テ御懸念申上程之事ニハ無御座候、

一前条御煩ニ付、御薬鍋黄金ヲ以作候カ御入用之事ニテ、本田抔ヨリ林休左衛門江引合、大坂表探索イタシ候処、黄金茶碗壱ツハ脇方ヨリ見出、直ニ

三郎様ヨリ被進趣ヲ以差上置候由、今一ツ之鍋ハ濱村孫右衛門持合之金ニテ製造イタシ、進上仕度申出候付、是以　御進上之趣ヲ以差上候処、至極　御満悦ニテ、此節小子参　殿之砌モ、厚ク御挨拶等被仰下、且

三郎様江モ、厚ク御礼等申上越候様致承知申候間、其段御申上置可被成候、巨細之次第ハ、本田ヨリ可申上越候、

一青門(様脱カ)ニモ粟田御殿ハ御所ヨリモ御遠方、其上議奏衆御政事御相談御出旁不宜敷候付、

関白様(近衛忠熙)御世話ニテ、去月晦日ニ、輪王寺御里坊ヘ御引移リニ相成、当分カノ方江御住居御座候、是ハ全体能キ場所ニテ、至極御相付、夫ヨリ御塩梅モ宜鋪被為成、恐悦奉存候、右

御引移等ニ付、此方ヨリ人数御借用被遊度、細々被仰聞、是ハ全体先ヨリ

御沙汰モ被為　在候　御趣意ニテ、混ト御借用被遊度ト之御事ニ御座候得共、何分左様之人物モ無御座候付、新納嘉・松元勘兵衛・永山信右衛門・西田次右衛門・川井田藤之進・中村彦左衛門右人数繰廻、隔日ニ相勤候様申渡、　御引移リ当日ヨリカノ方江差上置候、只今之処ハ差掛之事候付、其通計ヒ置候得共、御国元江申上候テ

三郎様思召モ被為　在候ハヽ、其段可申上旨、拙者ヨリモ申上置候、長ヨリ人数差上候様ナ模様ニテ、

宮様モ大ニ御配慮被遊、其外旁差上度候方可然奉存候付、右之通取計置申候間、其段御申上置可被成候、是モ本田ヨリ細事可申上候、

一関白様御方江モ、此節両度程拝謁仕、段々朝議之事共致承知候処、御案内通色々一決不致事共モ有之、大ニ心配仕候、併

殿下青門様之御所ハ、実ニ御確立ニテ、夫丈ニテ先難有事ニ御座候、中・正ハ別段相替候事モ無御座候、

一殿下青門様ニモ

二丸君御上京之義、頻ニ御待ニ御座候テ、精々早目御

上　京相成候様　御沙汰モ御座候付、先便被仰越候御趣意ヲ以申上置、関東一左右次第ニハ、早々上　京可仕候付、カノ方之模様相分次第、　御沙汰願置候付、分次第ニハ本田ヨリ飛檄ヲ以、其段申上候様申置候、何分御上　京不相成候テハ、朝議旁実ハ一決不致訳ニテ、下ニテモ大キニ心配イタシ申候、シカシ御趣意ニ基キ御答等ハ申上置候事ニ御座候、

一御守護職之義被　仰出、誠ニ恐悦何共奉大慶、此節殿下様ヨリ致承知候ヘハ、実ニ不被止之叡慮ニ被為　在候由、誠ニ何トモ申上様無之御冥加之御事ト奉存候、

一太守様　御参勤　御猶予之所ハ、直様関東江　御沙汰ニ相成候段承知仕候、是ハ其通不相成候テハ不相済訳、関東表ヘモ岩下等江周旋之事共申越申候、

一一橋上京之義モ未相分不申候、

一三郎様御上　京ニ相成候得ハ、錦之御屋シキ御手少ク、其上御供方之宿旁込(坊カ)入候付、粟田御借用相成候ハヽ、可然ト申談内々申上候処、何モ御差支不被為　在候付、拙者ニモ差越カノ方致見分候様被仰付、藤井同道ニテ差越申候処、御座間ハ別テヨロシク御座候付、御借用之筋ニ申上度候、イ細ハ罷下候テ可申上候得共、其内形行申上越候、

一阿州(蜂須賀斉裕)当分上　京ニ相成居申候、格別之事モ無御座候、是ハ無事ニ御座候、六日ニ宮ニ参殿イタシ候処、阿州家老蜂須賀駿河逢度ト之事ニテ、面会イタシ候処、格別之事モ無之、只無事ニ御座候、

中川様一条モ御座候付、是ハ本田ヨリ次第可申上候、

一関東之事情ハ先便ヨリ申上候通ニ御座候処、拙者出立後、段々下之議論モ相立、板倉出仕差止ニ相成居候処、

一橋公頻ニ御議論モ相立、越・土之振ハマリニテ、又々出仕ニ相成申候由、此節ハ余程宜敷ト承申候、シカシ是ハ何トモ難申上候、

一橋モシハラクハ御引入之由候得共、是モ御出ニ相成候由承申候、

一勅使モ去ル三日ニ御出立ニテ、御帰　京之様承申候、

勅使之趣ハ、無故御請ニ相成候事ト相考申候、未京都江ハ為何事モ不申参候付、安心ハ出来兼候得共、十ニ八九迄ハ相違無之ト相考申候、

一一橋公何分幕弊ニ御動揺之様承、安心出来兼候付、越〔松平茂昭〕前公上　京被仰出候方可然申談、其段建白イタシ置申候、弥上　京之比合相分候ハヽ、

二丸公モ御発駕ニ相成度奉存候、何分天下之安危此節ニ御座候間、兎角大尾御決定被下度事ニ御座候、

一先便両度　御趣意之事共被仰越、イ細致承知候、御答ニ不及義ハ不申越候、

一京都守衛方之所、差当何ソト申訳モ無之由候得共、何分長滞在ニ相成候得ハ、色々故障之事モ有之由候間、爰ニテハ三十人位モ被差登、交代被仰付可然、今成ニ被召置候テハ、ツマラザル事眼前ニ御座候間、何分其方ニ御吟味有之度奉存候事、

一大坂御留主居ハ、御人撰ニテ早ク被仰付度奉存候、

一御金談之事共ハ、攝津殿方江申越候付、別段不申越候、右之外細々申上越度事件モ御座候得共、格別差急候訳ニモ無御座候間、近々林休左衛門御米一条等付、差下申候付、当人江申込候テ可申間、御聞取可被成候、此節ハ京師　御滞在御延引、且永平丸御乗船不被遊事共、早ク不申上候テ、如何計御待モ被為　入、其上前後之御都合ニモ可相懸候付、御中途迄参リ居候飛脚差返申候間、左様御含可被成候、今日モ御金談事ニテ、拙者御長屋江、御銀主共召寄尓談旁ニ付、細々書認不申候、先ハ此旨申越候条可被達　貴聞候、以上、

十二月九日　　小松帯刀

中山中左衛門殿

大久保一蔵殿

追テ申上候、寒中之砌御精勤之筈珍重奉存候、小子ニモ無異奉随従申候間、御休意可被下候、当年之寒気中々厳シク、此比ハ大カタ雪ニ御座候、シカレハ其御地之御所置追々致承知、誠ニ感心ニ御座候、只今ハ人心之居合モ相付候由、誠ニ　上之御趣意相立候故之事ト奉恐入候、此節ハ別段書面モ得不差上候間、御高免可被下候、先便ヨリ度々御書之御礼モ申上候、先ハ折角時季御保養御勤務被成度奉存候、此旨私之事迄御用中ニ書認、真平御海恕奉希候、何モ細事後便迄申上居候、

以上

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

一九〇　〔中山實善大久保宛岩下方平書翰〕

今日急被差立候ニ付、一書申越候、其御地乍恐

上々様方御機嫌能被為入、恐悦御儀奉存候、爰許当分平和也、両

勅使ニモ　御都合能、去ル七日御立相成候、十五日一橋公御上京、大坂海岸御警衛向御見分之筈也、閣老小笠原圖書頭(長行)様其外御旗本衆大勢迄御取添、是ハ同日蒸気船ヨリ御通[(不明)]、追々幕習モ一洗之時節到来相成申候、委細之義ハ、高崎猪太郎(正)下リ候御聞取被成候筈、其後差テ相替候事無之、攘夷　御親兵之両条モ、過日列侯江布告相成申候、

三郎様御上京御都合比合ヲ、毎々越老公(松平慶永)御尋ニ御座候、此朝佐土原(島津忠寛)侯越公ヘ御出之処、至極三郎様御事ニ感服之様子相顕候由御座候間、先便モ申越候通、何卒正月十日方迄之内ニハ、是非々々御上京不相成候テハ、天下之大業モ破レ候勢御座候間、御尽力可被下候、○佐土原公明後十九日御出立御上京之賦御座候、○松木弘安(寺島宗則)モ過日致帰府候得共、イマタ逢不申候、両日中逢候賦御座候、彼地大抵之事情ハ、表通御問合相成候欤ト相考申候、頻ニ異国之軍備充実ヲ賞揚イタシ候由御座候、実事左様可有之事ニ候、○諸藩追々振ヒ立候、尾州モ余程宜敷相成候、近々老公御上京之筈之由、會津モヨシ、長州矢張諸藩ヨリ不被信候、　筑前(黒田斉溥)様ニハイマタ拝謁モ出来不申、御議論モ何トカ一定無之様子ニモ相伺申候、如何之次第ニ候ヤ相分兼候、先ハ右方被進度如是御座候、猶追々細事可申越候、以上、

十二月十七日　　岩下佐次右衛門

中山中左衛門殿

大久保一蔵殿　　(同上書にて校訂)

一九一　〔中山實善宛大久保書翰(十二月二十一日)〕

一昨夜　陽明家参　殿

御父子様御揃ニテ

御目見被　仰付、則

御直書差上候処、篤ト

御覧被為　在候ニ付、尚亦奉承知候　御趣意之程奉言上候処、

御両殿様如何ニモ御尤之御趣意ト、一同ニ御感賞被為在候就テ、乍恐

御同意ニ被為

思食候ハヽ、

宮様御談合之上、全ク衆評ニ渉ス、

御両人様切リニテ、被為経

奏聞、真ノ
叡慮ト申処ニテ、断然
御発シ相成度、無左候テハ、　三郎殿ヨリ建議ニテ此
ニ及候訳洩漏イタシ候テ、決テ異説ヲ起シ候而已ナラ
ス、却テ害ヲ引候事モ難測候ヘハ、呉々モ
御趣意ニ帰シ候様、御周旋奉願候様、被申付候段申上
候、御尤ニ
思食候、シカシ真ノ
叡慮ト申シテモ、必ス其所起ヲ人々疑惑イタシ候案中
ニテ、何分難問ニ候間、　宮様此御書御覧被為在候上、
委曲之　御趣意其方ヨリ及言上候テ、正親町迄ハ形行
承候様無之候テハ、何分御周旋遊バシ兼ラレ候間、明朝
宮ノ御方ヘ其方罷出候テ、正親町ヘモ参リ呉レ候様、
左候ハヽ今晩此　御書ヲ、
宮ノ御方ヘ相廻候様可致トノ御事ニ御座候、其通御請
仕退立、
一今朝
宮様ヘ罷出候処、殊之外
三郎様　御趣意ニ御感服ニテ、　御沙汰被為在候ハヽ、
夜前及深更
殿下ヨリ　三郎殿書状御差廻相成、篤ト熟覧イタシ、
尚今朝迄再三披見イタシ候処、実ニ至当之議論令感服
候、兎角ニ此通不被行候テハ、決テ不相済義ニ被存候、
依テ正親町ヘモ云々御伝言共被為　在、且
殿下ヘモ分テ御委任ニテ、　御周旋被為　在候様申上
候得ト種々被仰付、正親町ヨリ亦々
殿下ヘモ今日罷出候、克々
御請込ミ相成候、何分ニモ
殿下頓ト御寸暇ヲ得サセ給ハス、　廿三日迄ハ、御神
事ニ付、
宮様ヘ御出ト申事モ不被為叶、今日モ終日之御客来、
中々御多端ト被伺候、明朝
御参掛
宮様ヘ正親町御出ニテ御談判被為在候賦宮ヨリ御招、左候テ
正親町ヘハ、禁中ニテ
殿下御打合被為　在筈ニ御座候、何レ一人ハ御引合無
之候テハ、
殿下御一人ニテハ、御周旋六カ敷被思食候処ヨリ、正
三ヲ御取込之御策ニ御座候、何分其方ニモ急キ之筈ニ
候得共、廿四日迄ハ見合居呉候様

殿下ヨリ　御沙汰ニ御座候間、両日中ニハ御決議可相成ト奉存候、只依頼スル処ハ
宮ノ深ク
御趣意ニ服セサセラレ、是非々々ト之　思食ニテ、正三江御伝言、内々万一此義ニ異論ヲ起シ候者有之候ハ、、屹度被
仰出候様有之度ト之
御一言有之、実ニ難有次第御座候、
一御上言之義、
殿下ヨリ則御尋被為　在候ニ付、二月中旬ニハ着京ト申処ニテ申上置候、只今之処ニテハ其辺ハ次ニ相成、何レ此御建白、　御朝決相成候処急務ニテ、別段分テ御沙汰モ不被為　在候、何レ有無相決候上尚亦委曲可奉申上候、何レ二月初旬阿久根ヨリ
御乗舟ト申処ニテ候得ハ、如何様ニテモ
御差支被為　在マシク欤ト奉存候、
一何分相決次第関東ヘ駈下リ不申候テハ不相叶都合ト奉存候、
一市橋下坂相発候由ニ御座候、是ハ攝海ヘ英舶乗入候説有之候ニ付、閣老小笠原・外国奉行ナト一列ニテ出立之由ニ御座候、二條城ヘ滞在、守衛ト申場ニテ台場其外海防手当有之筋ニ被聞、正月二日比市橋ハ着坂、外国奉行ハ蒸気舟ニテ参ルトノ説モ有之候、時機ニ依テハ上言モ可有之ト之事ニ候由候得ハ、全ク英舶一条之事ト被伺申候、尚追テ分リ次第委事可申上候、
一攝老未着京無御座候得共、モフ大坂迄ハ着舟之筈ト待入申候、
一帯刀殿、高崎猪太郎下(小倉)之關ニテ不図モ行逢、関東形行モ委曲承リ、越・土益尽力之次第、実ニ大幸之次第ニ御座候、此節ハ愈
三郎様ヘ依頼之実顕レ御書モ参候由、トカク此ニ至リ不申候テハ不相済義ト奉存候、自ラ疾ニ永平丸着舟ニテ、実事御承知之筈ト奉存候間、別段不申上候、
一越・土之処モ正月七日方ト申事モ、未シツカリ分リ兼申候、高崎立後、一橋ナトノ事有之、亦一変之姿ニ相見得申候、
一勅使明後廿三日　御着京之賦、因州公ハ両日跡着京相成申候、
一鍋島ハ廿日ニ出府相成申候、与程邪魔イタシ候由、追テ可申上候、其外追々大小名之上京数ルニ暇アラス候、(直大、佐賀藩主)

右何モ決定之訳モ無之、奉申上程之義ニモ無御座候得共、加藤十兵衛町飛脚差立候段承候間、今日迄之形行為御心得概略申上候間、以御都合被達　御聴候義、宜敷御頼申上候、只着イタシ候侭ニテ、別テ混雑中極乱筆疎文御推読可被下候、以上、

十二月廿一日　　大久保一蔵

中山中左衛門様

〔同上書にて校訂〕

一九二　〔同上書翰（十二月二十四日）〕

一本田彌右衛門義

御姫様　御供被仰付罷下候処、当時御当地別テ多端之御用筋、且追々大事之場合ニモ相臨ミ候得ハ、何レ相詰居不申候テハ、彼是差支之廉有之、

関白様

宮様ヨリモ　御沙汰承知仕候、

御姫様　御供之義是以大事之御事ニテ候得共、中国路被遊　御通行候上ハ、決テ御懸念モ有之間鋪被存候間、下關ヨリ御暇申上、急ニテ引返シ候方可然存候付、其段押切テ彌右衛門ヘ申越候間、次左衛門申談御暇被仰付候ハヽ、引返シ可申存候、依テ御勘考之上、被達貴聞　御手薄被為思食候御訳ニモ候ハヽ、

御中途迄ニテモ可然人柄被差立候義共、御不都合無之様御取計給度、下關迄ニテ引返シ候筋ニ被　仰付タル哉ニ、帯刀殿ヨリ承知イタシ候ト覚候得共、

御当地参候処、書状トハマタ勢ヒモ相替リ、市橋モ上京カタ〳〵且

三郎様御上京モ不日ニ相成、中々良節一人ニテ相済候丈ニ無御座候間、為念此段モ申上候、

一攝老（喜入久高、家老）ニモ未着京無之、如何様之訳欤、定テ船中都合不宜欤ト存候、拙者ニモ彼是申談候御用筋承知之事候得共、明日発足ニ付テハ、無致方次第御座候付、何レ小ヲ捨大ヲ取候外無之、形行ニマカセ発足イタシ候間、其辺モ御含居可被下候、

右別紙ヲ以御問合申遣候、已上、

十二月廿四日　　一蔵

中左衛門殿

一九二ノ二　去ル廿一日町飛脚ヲ以、形行及御問合候間、相達候筈ト奉存候、廿日ニ着京、即今

関白様〔近衛忠熙〕・　左大将様〔同忠房〕江奉拝謁、翌朝
宮様へ同断拝謁仕、
三郎様　御趣意之程篤ト奉言上候処、至極御尤ニ被
思食寸毫御異論不被為在、是非
御趣意通ニ不被行候テハ、決テ不相済ト之　御事ニ御
座候、奉承知候通、
関白様
宮様限之
御談判ニテ、真之
叡慮ト申処ニテ、
御発相成候処、再三申上其通ニ御納得被為　在、殊ニ
宮様深ク　御洞徹被下、何レ夫デナクテハ六カ敷候ニ
付、
御自身様タリ共
御存知ナイ処ニテ、
殿下御一人之　御尽力ニテ、相運候様無之候テハ不宜
ト之
御趣意ニテ、屹度
御伝言等奉承知候訳モ有之、
殿下へ御責申上候処、
宮之　御参被為叶候時ナレハ、至テ被遊安キ　御事ニ
候得共、　御異例中故兎角中山・正親町承知無之候テ
ハ、御一人様ニテハ甚実ニ致方ナシ
御困苦ニ被
思食、是非其通イタシ呉候様、無左候テハ被行兼候ト
之　御儀奉承知、
宮モ無御拠被遊
御同意候、依テ廿二日
禁中ニテ、中山・正親両卿へ
御打合被為　在、翌廿三日
殿下両卿
宮へ御会議ニテ、篤ト　御論判被為　在、良節・私ニモ
御末席ヲ奉汚候論長ケレハ略ス、終ニ　御決議之処ハ今度
勅使　御上京被及復命、関東之事情達
天聴候処、
叡慮之　御趣被為　在候ニ付、委曲之次第ハ、薩州家
臣大久保一蔵江被
仰含被差下候間存慮申上候様、左候テ御用往復迄之間
ハ、容堂・越前発足延引イタシ候様ト之　御趣ニテ、
殿下

容堂公・越前公へ御宛御書私江奉護被　仰付、直様発足仕候様ト之趣ニ決定、明廿五日早天出立之賦ニ御座候、下向之上篤ト土・越江巾含、無異存ト之趣、往復申上次第ニ、

叡慮ヲ以

御発シ相成候御都合ニ御決定被為　在候、就テハ土・越江演説之訳ニ依テ伏不伏有之、伏不伏ニ依テ、大事成不成ニ係リ候義、実ニ不容易義ニ御座候得共、屹度御趣意ニ乖戻不仕候様、砕身周旋イタシ度含ニ御座候、両卿ヘ洩候義共、

御趣意ニ違ヒ候上、失策トハ相考候得共、無左テハ寸分モ運ヒ兼候時機合不得止候間、其通取計巾候、此御人数外ニ不相洩様ト之訳ハ、

殿下

宮ヨリ幾重ニモ、両卿ヘ御戒警被為　在、私ヨリモ万一此議洩漏イタシ候得ハ、主人江申分無之候故、夫限リ之格護ニ候段、威シ掛置候ニ付、必至ト答ヘ候向ニ相見得、只今之処ニテハ先ツ懸念モ薄ク御座候、

一市橋ハ愈正月三日比着京之賦ニ被聞申候、直様下坂之筋ニ申上置候得共、尚亦承合候処、一応上京之上下坂之筋ニ御座候由、

一御発駕之義、自ラ

思食モ可被為　在候得共、二月初ニハ何卒御決定被為遊、阿久根ヨリ　御乗船在御座度奉存候、

右之趣大略以町飛脚申越候間、奉達

御聴候義共、可然御取計可被給候、自ラ明日飛脚差立委曲申上越候含ニ御座候、下向之上彼着、形行早々可及御注進候、以上、

十二月廿四日　　大久保一蔵

中山中左衛門殿

〔同上書にて校訂〕

一九三　〔中山實善宛藤井書翰（十二月二十五日）〕

大久保氏　上京有之、御趣意之次第等慎テ奉拝承、誠ニ以難有次第、乍恐公平正大、極至当之　御大明眼、深重奉恐入候、即ヨリ夫々周旋仕、既ニ明廿五日京都出立相成、東行之賦ニ御座候、御当地最早御聞之通内外只私壱人罷成、何篇乍不都合申談周旋仕申候、先高崎左壱人ニテモ上　京仕候ニ付、大ニ難有奉存候、追々諸藩登〔松平容保〕リ込相成、既ニ會津侯ニモ今朝上　京相成申候テ、騒々シキ事ニ御座候、追々上　京之列藩左之通ニ御座候、

一肥前侯、是ハ暫時滞京ニテ、去ル十六日発駕、東行ニ御座候、

一因州侯、去ル十九日上　京、旅粧マヽニテ宮へ参殿、次ニ二條家、次ニ　陽明家へ同断、翌廿日於學修院、議奏伝奏御出会御座候由、

一肥後侯〔細川慶順〕御弟長岡良之助〔護美〕殿、此公子　陽明家ニテ面会仕申候、漸ク廿歳位之由ニ御座候ヘトモ、別テ発明ニ相見得、暫時談話仕申候ニ、屹度御用ニモ可立人柄ニ相見得頼母シク奉存候、三郎様之御事伝承、大ニ御シタヒ申上候御事故、片時モ早ク拝謁、何事モ受御指南、　御趣意奉汲受候テ、御力ニ相成度一筋ノミト被申居候次第、イカニモ実意顕レ居申候、昨朝正三卿ヘ罷出候処、同人拝謁中ニテ相控ヘ、無程拝談仕候処、正三卿ニモ種々感心之説有之ト仰候内、京地ヘ諸大名参集之義トモ大ニ心配之義、シミ〳〵被申居候由也、南禅寺旅館ニ御座候、

一土佐守〔山内豊範〕様、一昨日御上京、

一長門守〔毛利慶親〕様、明日欤同断之由、

外ハ伊達伊豫守〔宗城、前宇和島藩主〕様・中川侯〔久昭、岡藩主〕・伊豫之大州侯〔加藤泰祉〕、小身家ハ外ニモ有之由ニ御座候ヘ共、委細ハ存知不申、不日取調ヘ申上候様可仕候、

一先達テ於陽明家鷹司〔輔煕〕前右府公ヘ拝謁仕候故、右御礼トシテ比日参　殿、拝謁仕申候、無程　関白拝賀モ被為在候御内意モ可有之御模様ニ奉窺候得共、トテモ御当職様御同様之御方ニテハ被為在間敷ト、乍恐御案シ申上候御事ニ御座候、御当地指テ相変候事モ無御座候得共、国事掛抔申御方々、月ニ十日ツヽ参内御集会被仰出、御評議トモ被為在候由、却テ紛々之義モ不少由、奉恐入候御事ニ御座候、委細ハ大久保氏ヨリ御申越相成申候、〇喜入家御上　京折角御待申上候、大久保氏上京ニテ、地獄之仏同様之諺ニ御座候処、是モ明朝ハ東行、実ニ苦心仕申候、シカシ攝州之御上　京モ最早間モ有之マシクト奉存候、御同人御旅宿モ粟田之御門内ニテ、相応之寺一軒拝借仕置申候、守衛人数モ引続之所ヘ見立仕置申候、

一梅芳院ニハ弥正月廿日比迄ニ、先御裏江勤居候、御祐筆一同発足相成候筋ニ取計置申候、

一御裏御殿之義モ、御地面御作事奉行始ヘ拝見見賦取計ヒ置申候、取掛リハ何レ正月ニ相成申候、二本松御屋敷御長家之義モ追々御取附相成可申候ヘ共、古家取払、

旁只今最中ニ御座候、

一来春

御国父様御上　京之節ハ、一切粟田　御殿御郭内ニテ、

為御済相成候様、折角手配仕居申候、

右ハ今日飛脚被差立、アラマシ形勢申上候、

十二月廿五日　　藤井良節（正徳）

中山中左衛門殿

〔同上書にて校訂〕

一九四　〔藤井正徳宛岩下書翰（十二月二十五日）〕

当月十三日紀州之両士江御託之御書面、両士去ル廿二日朝着ニテ致拝見候、

御姫様方ニモ御都合克御滞京、其後大坂表モ御機嫌能御発輿相成候由、恐悦奉存候、次ニ貴君モ御壱人御心配御繁用之筈、御太儀千万奉存候、乍然当分大機会天下之安危定ル所ニ候得ハ、十分御尽力可被下候、扨右之両士ニモ、西向御屋敷中明御長屋致吟味候得共、折柄為差所モ無之、田中太郎左衛門御長屋下座敷明合有之、乍気之毒右ヘ同宿ニ相成居申候、近日中御長屋致明方引転候賦ニテ候、則

関白様御答書ハ、拙者両老公ヘ持参差上置申候、両人モ越・土・長之間ヘ周旋御座候、イツ方モ都合ハ宜敷候得共、何分片言故、則御取扱モ出来兼候様子ニ御座候間、種々工夫仕事ニテ候、〇越・土両老公ニハ来正月十二三日方、蒸気船ヨリ浪花ヘ御廻之筈御座候、海上四五泊位之賦之由御座候間、正月廿日迄之内ニハ御上京相成可申候、右御日限相決候ハヽ、早々可申越旨、本田氏ヨリ被申越候間、今日町便江仕立、態々申越候、尤御道中御国許ヘハ、別段急飛脚差立申上賦ニテ候、

〇高崎出立後、差テ相替候儀モ無之、

大樹公弥御賢明之由、誠ニ天下之幸福此事ニ御座候、

〇越・土両公御上京前ニ、是非此方有志中ヨリ致上京候様御頼ニテ候故、御受申上置候処、小森出立ニ付、拙子ニハ爰元難迦候故、關太郎ニテモ可差登申談居候、正月早々出立可致候付、イツレモ両人間ニ不遠上京イタシ、爰元事情委細可申上候、御待可被下候、〇佐土原候去ル十九日御立ニテ候付、御着之上爰元成行御聞可被下候、樺山舎人（久哲）モ従駕ニテ候、正義之人ニテ候、

〇一橋公十五日御立、大坂ヘ御巡見之筈之由、右ニ随従水府之武田耕雲齋（正生）前名修理致出立筈之処、水府之方難通用向等有之、漸々昨日出立相成申候、着之上御引合被成

度候、当地出立前、同志中ヨリ面会可致申談居候得共、水府モ矢張奸物多、磔邸門之出入等六ケ敷故、終ニ逢不申残多候、〇筑前侯〔黒田斉溥〕ニハ終ニ拝謁不仕候、御上洛前御上京相成筈之由承申候、〇越ノ横井平四郎〔小楠時存〕先日少々異事有之候得共、為差事ニモ無之候、風説ハ様々御座候間、京辺ニテハ紛々説モ可有之候、定テ先右成行申上度如是御座候、猶異事モ有之候ハヽ、無手抜申越候様可致候、以上、

十二月廿五日　　岩下佐次右衛門

藤井良節様

侍史

二日、公私取交候文面御高免可被下候、〔同上書にて校訂〕

一九五　〔池田慶徳伊達宗城細川慶順名代建言書〕

謹テ奉言上候、先年外夷渡(威字)後、天下之事体日ニ逡巡姑息ニ陥リ、公武之御間サヘ、幕吏奸曲之為メニ御隔絶ニ相成候次第恐入奉存候、然ル処当五月近畿変動出来仕候折柄、嶋津三郎〔久光〕・松平長門〔毛利元徳〕守鎮静之命ヲ蒙リ、早々取鎮メ候段、恐悦至極奉存候、乍去近年来幕吏奸曲暴虐之処置、所謂神怒人怨ト申勢ニ御座候得共、於朝廷モ最早関東御見放可被遊儀ト奉恐入候処、格外之御仁恕ヲ以幕府御回護被為在、

敕使被差下

叡慮御懇諭ニ相成リ、且一橋中納言後見、松平春嶽総裁被

仰付、其辺早々御請有之、先

公武御合体ニ赴候得共、積久因循之後、速ニ尊奉(遵カ)之実被行兼

叡慮貫徹不仕、依之再

敕使被差下、猶尊攘之決ヲ被為取候段伝承仕、恐惶至極奉存候、就テハ万一遵奉之道ニ於テ、幕府取惑候儀モ御座候得ハ、死力ヲ以説得仕候心得ニ御座候得共、既ニ松平春嶽・松平容堂・薩長両藩等、一方ナラヌ周旋御座候付、一同決議遵奉之事実御請有之、速ニ

叡慮貫徹仕、其趣

敕答相成恐悦之至奉存候、此頃東武諸有志之情態熟々愚察仕候処、以前トハ相違致シ、大樹誠実之意ヲ請ケ、実ニ

叡慮感戴、一同奉行之志実心ニ出ル様子ニ相見得、左候得ハ、公武ハ真之御合体ニ相違無御座、且後見総裁

及諸有司、不日遂ニ上京仕候事実相立候段、実以天下之大幸ニ御座候、全体無職之侯、国ノ重キ御大政ニ預リ候儀ハ、御大法ニモ相触レ、不容易儀ニ御座候得共、近来之事変ニ付テハ、

皇国之存亡ニ関係仕候儀故、何レモ傍観座視仕兼候段、臣子之分ニ於テ不忍所ニ御座候得共、

公武御間ニ立、周旋仕候儀モ不得止之勢ニ御座候、猶此上ニモ御合体之道不相立候得ハ、各事体貫徹仕候迄ハ、微忠ヲ尽シ可申覚悟ニテ御座候得トモ、前文奉申上候通リ、幕府誠実尊奉之志相立候上ハ、

朝廷之思召ヲ以テ、赤心幕府ニ責メヲ御帰シ被遊、尚幕府ヨリモ赤心ヲ以可申上、一意水魚之御運ニ相成候得ハ、天下ハ万々歳ニテ、上下頌太平候儀ト奉存候、

就テハ是迄周旋仕候国々モ、一同手ヲ斂メ、

御指揮ヲ奉仰、各藩屏之本職ニ立帰リ申ソ真実之御合体ト奉存候、然ル処外臣共此跡大樹上洛迄トカ、又後見総裁始メ上京仕候迄滞在、天下之結局相付候上帰国可仕様ニモ可被　仰付哉ニ薄々奉伺、甚以不自安奉存候、最早

勅使復命、松平長門守始メ夫々御合体之事実奉言上候上ハ、後見総裁始メ上京仕候節、先々被　仰付、彼等ヨリ無腹臓奉申上、万事御決定ニ相成、数年之御隔絶モ一時ニ氷釈仕、天下再中興之盛典ニ復シ候様奉祈候、

然ル処其職ニモ無之外臣共矢張

叡慮ヲ奉シ滞京、其間ニ周旋仕候テハ、宿昔之御疑念モ不被為霽姿ニモ相成、幕府心中ニ於テモ甚疑念仕候訳柄ニ付、却テ真実之御合体ニモ関係仕候半哉、此辺深々心配仕候間奉言上候、且近日之事天下之頽瀾ヲ挽回仕候ハ、全三藩之力ニ御座候得ハ、此節ニ至候テ事ケ間敷、結局見届ケ候迄滞京仕候抔申儀ハ、甚以恐惶之次第、就テハ三藩江ハ被称其功、諸藩ハ一同本職専務ニ心掛ケ、安

叡慮防禦之任ニ勝候様被下

勅命、各兼テ蒙命居候請場処之守衛相整候様被

仰出、

御大政之儀ハ

公武御熟談之上被為行、近畿御守衛之儀ハ、如何程厳備相成候様、大樹ヘ御委任被為在候様奉願上候、此上万一諸有司上京之上決定、万一

叡慮ニ齟齬等之儀モ御座候ハヽ、国事打棄、速ニ上京

決死尽力仕候テ、奉
勅命候心得ニ御座候、誠惶頓首、謹呈執事、
松平相摸守
伊達伊豫守
十二月廿六日
細川越中守名代
長岡良之助
〔同上書にて校訂〕

一九六　松平肥後守守護職及ヒ久光公御上京御沙汰書

松平肥後守京都守護職被申付、御警衛行届、
御安心被　思召候、然処一藩奉職ニテハ、人心居合モ
如何ニ有之哉
御懸念被遊候、依之島津三郎儀、今般　公武御一和ノ
基本ヲ致周旋、為
皇国尽誠忠候者ニテ、此末公武ノ御為別テ可然被
思召、旁以別段ニ
叡慮ヲ以断然守護職被　命候、於　大樹家モ尚又
叡慮貫徹候様肥後守申談、相勤候様被申渡候様、被遊
度御沙汰候事、別紙ノ通被仰出、
三郎儀早々上京仕候様被　仰出、就テハ修理大夫参府
付、暫時猶予ノ儀申渡旨　御沙汰候事、

一九七　久光公守護職御辞退之願書

今般不容易以
叡慮不肖之私江守護職被
仰付、早々上京仕候様、
御内
勅之　御趣奉謹承、武門之冥加無此上、不堪恐縮仕合
奉存候、就テハ不日上京仕奉謝
恩命候儀、当然之儀ニ御座候得共、先般国本相固度ト
之微志ヲ以、暫時之御暇願奉帰国仕候以来、夙夜心志
ヲ苦、海軍之手当ハ勿論、万般之国政向精々処置ヲ加
江仕候折柄、勅使下向、攘夷之
命ヲ下サレ候段伝承仕儀、是非
叡慮通徹仕度存詰候得ハ、内修外攘之儀専要之事候得
ハ、守禦之術十分ヲ尽度差急候次第ニ御座候、只今半
途ニモ不至発足仕候テハ、凡テ瓦解氷釈之姿ニ相成、
必至ト当惑罷在候間、何卒上京之儀暫時之猶予、以御
憐察御前ヨリ
御執成被為下候儀、泣血奉誠願候、然処(尤カ)不容易大事之

御時節ニ当リ、奉蒙
重命、上京仕候上ハ、其実相叶被為安
叡慮候様有御座度、無之候テハ不相済儀御座候間、只
今ヨリ終始之定策被相立度、寝食ヲ忘砕肺肝候儀御座
候、抑
皇国之危急不可言之地ニ至リ候処、忝モ不出無之〔ママ〕
至尊ニ渡ラセ給ヒ、非常之聖断ヲ以テ、転乾施坤〔旋カ〕之大
業、殆成就之時節ニ至リ、上被為対
皇祖、下万民之為千載不朽之
御功勲、誠以難有奉存候処、兎角自古初有テ終不全、
前ニ勤後ニ随、成功ニ至兼候儀ノ定論ニ、和漢其例不
少候得ハ、乍恐此末之処深謀遠図、屹度
御卓見被為在度、聊モ無御動揺処肝要奉存候、既ニ攘
夷之命被下候上カ〔ハカ〕、
綸言不可返之道理候得ハ、是非於
幕府奉行可仕候処、来二月将軍上洛相成候テハ、決テ
不可然儀ト奉存候、子細ハ攘夷之儀、仮令三年五年之
期限ヲ定候テモ、実地ニ
勅意奉行其術ヲ施候場ニ至リ候得ハ、兎角彼ヲ禦スル
ノ実備無之候テハ、已ヲ守候儀決テ出来不申候得ハ、
不日至重至難之事ニ御座候、今幕府変革之始、人心紊
乱物議騒然之時、暫クタリ共猖獗之夷人ヲ眼前ニ養置、
江府ヲ空城ニナシ上洛相成候儀、不可然ノ第一、今攘
夷決定相成候上ハ、列藩在城各海防守禦専要ニテ、畢
竟参勤猶予之新令モ夫カ為ニ候処、上洛ニ付テハ先例
モ有之、大藩上京仕候儀、不可然之第二、近来諸色沸
騰四民困窮之折、如何様易簡之令ヲ布候テモ、
将軍上洛ト申候得ハ、駅々奔命之疲労不少、不可然之
第三、将軍上洛相成候ハヽ、各藩上京銘々之赤心ヲ以
建白イタシ、衆言囂々御取捨六ケ敷、或ハ恨ミ、或ハ
憤、其害不少、難国不可然之第四ニ御座候、大樹家ニ
ヲヒテカ二百年ノ廃典ヲ起シ、
君臣之大礼ヲ正、天下之人心ヲシテ尊
王之道ヲ知シメ候儀、相当之訳ニ御座候得共、利害得
失前条之通ニテ、攘夷之
勅命被相下候上ハ、自
朝廷前条之訳ヲ以、暫ク上洛猶予被
仰出度儀ニ御座候、幕府ヨリ今更猶予願立候テモ、人
心ノ折合ニモ相係、大礼ヲ欠候場ニモ当リ候間、申立
兼候訳ニ御座候得ハ、

勅命ヲ以御達有之候得ハ、実事ニ於テカ、別テ難有拝承可有之儀ト奉存候、尊王之道ハ、上洛ヲ置テ可奉施行件々余多有之、且只今ニ至テハ、攘夷之儀、先々ヨリノ勅意ニ被為在候得ハ、奉行之第一ニ御座候、右ハ実ニ不容易重大之事件、賤臣式恐懼至極奉存候得共、篤ト熟慮ニ渉候処、黙止罷在候時機ニ無御座候間、一先家臣ヲ以御礼且愚慮之趣奉建言度、如斯御座候、〔島津久光公実紀巻二にて校訂〕

一九八　大慈寺柏州和尚事蹟

〔一九八ノ一〕〔曽於郡〕志布志大慈寺、此節京都妙心寺住職被仰付、当春上京イタシ、右ニ付能キ弟子無之、伊集院〔日置郡〕廣濟寺ノ弟子ニ器量ナル僧有之、此モノヲ貰ヒ法弟トシテ列越シ、妙心寺ハ諸侯宿坊モ有之、此御法ノ宿坊ハ殊ノ外破壊イタシ候故、□院トイフ寺ヘ被居、ヤウ〳〵御用向為仕候処、所司代ノ方ヨリ、此僧ハ薩州ノ廻者ナリト推量シ、捕ヘ方手当相成候得共、妙心寺ノ内ヘハ踏込捕ヘ方イタシ候儀不相成格別成寺格ニ付、外出イタシ候ハヽ、直ニ可捕ト始終スキヲ相伺ヒ居ルヲ、妙心寺是ヲ聞、夫故外ニ出事モ不相成、別テ不弁理ニ候処、近々

和泉様御着坂ノ御模様ニ相成、段々風説ヲ申触シ、何分京師等ノ間物騒シク、依テ所司代ヨリ申出、　近衛家ヘ此節和泉ヨリ何様ノ事申出候テモ、御取揚有之候ハヽ、決テ大事ニ可及候間、御取揚有之マシク、　関白様ヨリ御達相成候由、左候テ　和泉様御着坂有之、夫ヨリ伏見ヘ御着伏有之候処、殊ノ外京都物騒シク、若州ヨリハ勿論、彦根ヨリ三百人計、其外淀近国ヨリモ追々二條城ヘ着イタシ、何分大変成儀ニテ、大慈寺モ別テ心配イタシ、　和泉様伏見ヘ御着有之候ハヽ、直ニ夜ニ乗シ、潜ニ差越候時ハ、モハヤ四ツ過ニテ、夫ヨリ御前ヘ出、京都ノ形勢始終ヲ申上候処、別テ御驚キ被成、殊ノ外御心配ノ御様子ニ付、大慈寺私罷居候上ハ、何モ御心配被遊マシク、身命ヲ抛テ相働キ可申、万一ノ時ハ妙心寺ハ御立退被成候ヘハ、二條ノ城ヨリ却テ丈夫ニ御座候、マツ　近衛様ヘ御参殿被成、御願立可被遊旨細々申上候処、十六日御参殿被成候ヘ共、何分前件通、所司代ヨリ申込置候ニ付、御取持可被遊儀モ不相叶、深夜迄御談合有之候得共不埒明、和泉様伏見ノ様御帰被遊、大慈寺ハ甚心ヲ苦メ、此上

ハ大原三位(重徳)卿当時名高キ御方ニ付、此人ヲ御頼被成候ハヽ、御英断モ有之、御都合モ可宜トテ、京都御留守居田中仲右衛門同伴ニテ差越候処、御逢被成候付、始終ノ成行申上、御頼申上候処、御承知ノ御模様ニテ、段々トセリ詰御尋有之候得トモ、田中御答申上儀不相成、頓ト閉口イタシ候ヲ、三位卿大慈寺ヘ、薩州ヘハ此外ニ能士ハヲラナヒカト再三被仰候ヲ、田中殊ノ外込入、大慈寺モ別テ気ノ毒ニ相考、無詮方此場ハ御暇申上、田中ハ夫ヨリ病気相煩、終ニ病死イタシ、大慈寺ハ則　和泉様ヘ罷出、今迄ノ成行ヲ申上、今通ニテハ相済不申候ニ付、此節ハ大田彌兵衛殿列立可申上ト同伴イタシ、乍途中細々申含メ、殊ノ外相励シ、大原殿ヘ差越、再三ニヲヨヒ内意申込候処、余程能キ受合ニテ、則　近衛殿ヘ　御参殿被成候得共、矢張前条ニ不相替御答振ニテ、　近衛公ニモ外ニ被成様モ無之、別テ御込入ノ体ニテ、三位卿ヨリ　近衛様ニハ薩州ト御縁与モ被成事ニテハ無之ヤ、薩摩位ト御縁与不合事ニ候ヘトモ、昔ヨリノ御由緒柄ノ儀ニ可有御座、此節御取持不被成候得ハ、薩摩ハ是限ニテ可有御座候間、御家ト共ニ不被成候テハ、御義理合有之マシク抔ト、後々御難談有之候処、　近衛様ニモ御尤ニ被思召、夫故御取持ニ相成、何篇御都合ニ相成候由、右様ノ段有之候故、官銀トシテ千両被下、外ニ小仕用トシテ二百両頂戴被仰付候由、妙心寺殊ノ外名高相成、中山大納言殿二男兼テ出家ノ望有之、妙心寺ノ弟子ニ可成被仰候ヘトモ、再三御断被申上候得共、御聞入無之、自ラ御剃被成候テ、我ハ妙心寺カ弟子ナリト被仰上候ニ付、無是非　和泉様ヘモ申上、妙心寺ノ弟子ニ御成被成候由、

但戊八月十五日承候マヽ記置ナリ、

予是ヲ勘察スルニ、　泉州公十三日伏見御着、十六日近衛様ヘ御参殿、中山大納(忠能)言殿抔御集会ニ付、妙心寺カ計略ハ、十三日ヨリ十五日迄ノ間ニ奔走セシナラン、実ニ機会ヲ不失者トイフベシ、

一九八ノ二

大慈寺柏州大和尚文久二年壬戌春、

久光公御上京ニ先立テ、花園妙心寺ニ来着、他ニ洩スコトノ安カラサル秘密事件ニ苦慮シ、数日滞在アリト雖、其功ナキヲ察シ、海福院物先大和尚延年ヲ引合テ慰労スルニ、島津家ト勝浦姫(附箋、勝浦姫ノ由緒ハ、忠久公御入国時ヨリシテ、御)ノ由緒ヲ以テス、柏州ソ

代々御出入ニテ、御扶持ヲモ廢藩ニ被下候)ノ由緒ヲ知ランコトヲ頻ニ乞フ、延年柏州ヲ伴ヒ帰テ、巻物ノ紐ヲトクヲ見テ、斯ル慥ナル御由緒ノ人ニ何ヲカ包ン、此度島津和泉上京ノ義ハ云々ナリ、依テハ島津家ノ浮沈コノ一挙ニアリ、柏州ニ力ヲ添テ尽力アラハ、柏州モ又当家ニ力ヲ添ント云フ、勝浦コレヲ聞テ、コハ先年拝謁ノ砌、順聖院様御内命御結ヒノ義ナレハ御詞ニ従ハン、(附箋、延年ハ中路権右衛門カ実名ナリ、今延年ト唱フ)延年モ心セヨト命ス言葉ニ付テ、サノミ早マリ玉ヒソ、此事ヲ仕損スレハ、幕府ヨリ親子共ニ召捕テ、逆ハリツケニスルハ必定ナリ、其トキ後悔ハ見苦敷モノト、延年勝浦ノ心底ヲ試ルニ、死ス共悔ナシト断言スルヲ聞テ、柏州和尚勝浦ト母子ノ約ヲナシ、延年ト兄弟ノ義ヲ結ンテ、尽力罷在ル処、

久光公御上坂ノ日限聞ユ、斯テハ御入京ノ御名義ト、ノハズ、如何セン柏州断食シテ神祇ヲ祈ル、延年モ志ヲ等フ尽力スルニ、相國寺山内林光院ノ事ヲ心ヅク、サレトモ、院主ノ性質ヲ知ラネハ、〔島津義弘〕松齢公ノ御事蹟ニヨリ、柏州和尚ハ表向林光院ニ参詣ヲシテ、其振舞ヲ見、延年ハ陰ニ其品行状ヲ聞クニ、洩シテ悔ナキ趣ナレハ、〔京都市〕金閣寺ニ会シテ、林光院ヲ招キ、閣ニ伴フテ柏州和尚ノ心事ヲ吐露スルニ、聞ウル事ノ宜シケレハ、柏州和尚ノ閑室ニ尚伴フテ密議スルニ、此大事ハ吾師故林光院ノ甥ニ弓削右馬允ト言者アリ、(附箋、弓削正継ノ旧名)此人誠実ニシテ庭田家ニ勤仕シテ、重胤卿ニ談スルコト直接ニシテ、自由自在ナリ、重胤卿ハ禁中ノ職事頭ノ弁ナリ、之ヲ置テ外ニ語ル人ナシト断言ス、由テ依頼スルニ、日ヲヘズ忽チニ

御内勅アリテ、柏州和尚先着シテ百慮苦心ノ功ヲ達ス、之レ全遇日来一心ニ祈念スル処ノ神助ナルコトヲ知テ百拝ス、

一九九　中路延年事蹟

一九九ノ一　延年儀ハ

文政六年未十一月、京都今出川ノ北烏丸ノ東相國寺ノ南ニ出生シテ、幕府ノ

帝室ニ不尊ナルヲ見聞シテ、勤　王ノ志ヲ幼年ヨリ忘ル、時ナシ、故ニ弘化三年ノ春生年二十四歳ニシテ、好テ浪人トナリ、勤　王ノ厚志ヲ尋テ江戸ニ至ルニ、此頃水戸人ノ外世ニ高名ナル少シ、依テ水戸殿奥医師〔友軸〕熱田祐菴ニ近ツク処、門人飯泉春堂父喜内、勤　王ノ精心延年ト等シクシテ、都ニ至ランコトヲ日々ニ迫ル、

甚志ノ厚キニ感シテ連上シ、三条實萬公ニ仕ヘマツラシム、〔三脱カ〕條公伝　奏御奉職ノ公事ニ御重宝ノ人ナリト御満足アツテ、終ニ関白政道公ニモ召遣ハレ、能ク従事シテ、江戸ニ帰ルノ后、幕吏ノケンギニ触レテ、官武ノ間ニ大災害起ル、之ヲ飯泉喜内書通事件ト云、延年此事ノ起ヲ知テ、紀州高野山ニ走リ、潜伏シ、災ヲ除キ、帰洛シテ事実ヲ探ルニ、延年ノ関スル処ハ孝明天皇御内勅ノ義ニシテ、近衛殿老女村岡・一條殿諸大夫入江雅楽頭〔則賢〕・若松備前守〔永篤〕、初ヘ係ル武内近江・谷對馬蟇目ノ事件ナリシトソ、偖帰洛シテ時ヲ待処、島津家上京ノ大事ニ従事シテ、〔徳川茂徳〕尾張前大納言〔尾州藩主〕殿御勤　王ノ重事ニ関シ国事ニ付、薩・尾ノ秘密伝信機トナリ、岩倉太政大臣〔具視〕公ノ御賞誉ヲ蒙リ、尾老公江先祖ノ旧恩ヲ報シ、維新ノ春、兵庫裁判所江召出サレ、在勤中御用出来、徳大寺實則公ニ謁スル処、其方ノ長官モ今日神奈川江転職ニ付、心得マテニ達セラル、旨ヲ拝承シ、長官東久世〔通禧〕殿出張サキ姫路御本陣ヘ急行シ、岩下判事殿ヲ以テ、楠公社造立神号　勅許ノ義ヲ上申シ、神奈川ヘ御発舟前御執達ヲ希フ処、日数三日間ニシテ、許可ヲ蒙リ、明治元年五月廿五日勤王中興ノ大将神霊ニ、初テ神祭ノ献供シ、満足スノミナラス、辞職聞シ召ルヽ日、伊藤俊輔博文殿ヨリ、一新際百年多端ノ処、骨折相勤ルニ付、金若干ヲ下シ賜ル旨拝承ス、帰京ノ上養父母ノ老衰ヲ扶ケ、臨終ヲ見届、家事ヲ忘ルヽニ付、尚又素志ヲ養ハント、明治十四年八月更ニ東上シ、岩下閣下ノ恵ヲ受テ、東京ニ寓スルコト十一年、明年既ニ古稀ノ翁トナル、国事ニ関シテ死地ニ至ル事十三度、得難キ幸ニ逢事〔マヽ〕度、

明治二十四年九月

中路延年自誌

旧称権右衛門

一九九ノ二

度々御華墨ヲ忝フシ、御厚情之段深ク奉鳴謝候、陳レバ柏州和尚自記ナル島津家国事鞅掌史料、態々御郵送被成下、難有拝見仕候ヘバ、主要ノ点写シ置キ返上仕候間、御請取之程御願申上候、実ニ当時ノ状態ヲ回想仕候得バ、諸士ト共ニ勤王ノ専心ヨリ、或ハ憂懼シ、或ハ喜悦仕候活歴史ヲ眼前ニ浮ベ、転々今昔ノ感ニ不堪候、就テハ拙老モ先日差出シ候ガ如キ略記ニ止マラスシテ、一層詳細ニ申上候ヘハ、宜シカラント存候ヘ

ドモ、何分拙老高年ナルノミナラズ、当春来長々大患ニテ、身体衰弱精神疲瘁仕リ、往事凡テ如夢、天日ヲ忘却仕候ハ勿論、其時ニ密議セシ人々ノ姓名サヘ相異ノ廉有之、誠ニ以テ何ノ申訳ナキ次第ニ御座、(候脱カ)乍併拙老ノ自記、只当時ニ関スル主要ノ大体ヲ摘撮スルノミニ御座候ヘバ、ヨシ記臆ノマヽ委シク記載仕候モ、却テ蛇足ノ嫌有之ント存ジ候間、先ツ差上候自記ニテ、不悪宜布御取計被下度御願申上候、勿論此後タリトモ、其時ニ関スル主要ニツキ、追想仕候事有之候ヘバ、早速摘記仕リ差上申候、何卒宜敷島津公ヘモ、御鳳声被下度御願申上候、愚息正雄看病ノタメ帰省仕候ヘドモ、御用有之候ヘバ、何時ニテモ東上仕候間、乍恐御一報ヲ賜ハリ度御願申上置候、

就テハ御問合セノ、当時林光院ニ於テ御内勅被下候御人ハ、庭田(重胤)・大原(重徳)両公ノ外ニ、尚御一人有之候由ナレドモ、拙老ハ只御両公ノミト存ジ、少シモ記臆ニ不存候、尚篤ト追想可仕候、又先日自記ノ中ニ留守居ノ姓名忘レタリト申候ヘドモ、柏州和尚ノ自記ヲ読ミ、本田氏ナラント回想仕候ヘバ、一寸申置候、又林光院ノ和尚ハ、文敬ト有之候得ドモ、是ハ誤リカト存候、ボンケイニ御座候、其写ハ老耄ノ極リ、九分九厘忘却仕候得ドモ、梵圭カト存候(是レ御請合ハ不申上候ヘドモ)

一微臣正継ノ如キ不肖ノ輩マデ、今日種々御取調ベトハ御称挙被成下候段、難有幸福ト存ジ感佩不斜候、是全ク尊大人重徳公、并ニ庭田重胤公ノ御蔭ト存シ奉リ、御高恩永ク銘骨シテ忘レ不申上候、閣下ニ対シ一度御面謁願度ハ万々ニ御座候得共、遠隔ノ地其意ヲ不得、残念至極ニ御座候、御許容被成下度候、愚息正雄東京在学ノ節、御機嫌伺ハスベキ処、是亦懶惰書生ノ気随、御伺ヒ不申上呉々モ失礼之段、奉万謝候、御宥恕可被下候、時下不順折角御保養被下度奉祈候、頓首敬白、

江州堅田

二〇〇　弓削正継自記島津公勤王始末ニ付正継ニ関スル件ノ大略

島津久光公ノ勤王心切ナルヨリ、当時諸浪士鎮撫禁闕守衛ノタメ、早々上京滞在スベキノ御内勅、極秘密ニ達セラレンコトハ、公ノ夙ニ御願望セラルヽ処ニ御座候ヘバ、正義勤王ノ公卿達ニ就キ、其心情ヲ語リテ、以テ天聴ニ達スベキ事、此時ニ当リテ肝要ニ御座候、

然レドモ朝廷ノ情実、公武往来ノ関係等ヲ弁知シテ、而カモ勤王ノ為メニ其間ニ周旋スルモノ、又殆ド尠キカ如キノ折柄ナリシ、即チ先ヅ薩州大慈寺柏州和尚并ニ中路権右衛門ノ両人ヲ以テ、相國寺中林光院ヨリ微臣正継ヘ談議ニ相成リ、朝廷・公卿ノ状態ヲ尋問サレ、且ハ右ノ趣キ公卿達ニ周旋致呉レトノ御依頼有之候ニ付テハ、正継固ヨリ鈍才無智、何ノ御役ニモ不相立者ニ候ヘドモ、聊カ勤王ノ志ヲ抱キ、力ノ及ブ限リ皇国ノタメニ尽シ度ハ万々ニ御座候間、自ラ不肖モ省ミズ、其間ニ立チ、柏州・中路・林光院等ニ互ニ相往来シ、相熟議仕、先ツ第一正義ノ勤王家ト存候大原重徳公・庭田重胤公ヘ、島津公上京ノ御内勅御周旋ノ程御依頼申、頻ニ御伺ヒ御相談申上候、サリナガラ其節大原・庭田両公等ニ御面談御依頼申上候者ハ、大低只正継一人ニ御座候ヘバ、島津公ノ御真情ヲ吐露スル、又隔靴掻痒ノ感ナキニアラズ、サレバ島津家折角ノ御用意モ、万一荏苒打過ギ候等ノ事アリテハ、残念至極ト存ジ、或夜薩州ノ御留守居某（姓名ハ忘却仕候、本田弥右衛門ニハ非スト存候）ヲ導伴シ、固ヨリ世間ノ嫌疑ヲ憚リ候事ナレバ、極潜行ノ風体ニテ、庭田邸ノ裏門ヲ叩キ、両戸押開ケ、窃カニ奥室ニ入リ、大原公・庭田公等ト熟談ニ凝リ、徹夜致シ候事モ有之、此時留守居ヨリ其島津家ノ様子逐一申述ベラレケレバ正継モ是非島津家ノ希望貫徹センモノト、懇々御依頼申上候処、爰ニ至リテ大原公モ島津公ノ勤王心ノ切劃ナル、其用意ノ周到ナルニ奮然御感発有之、必ス充分ノ周旋シテ好果ヲ結バント被申候、ソレヨリ大原公等ノ御周旋、又其宜キヲ得、遂ニ天聴ニ達シ、御内勅極秘密ニ御達シ相成ル事ニ至リ候、即チ正継御内勅ノ愈々有之由、庭田家ニテ承知仕、早速島津家ヘ御通知申上ゲント存居候処、本田彌右衛門丁度庭田家ヘ面会ニ来ラレ候ヘバ、其由伝ヘ置候、後直チニ林光院ニ於テ上京可致旨、御内勅極秘密ニ御達シニ相成候事ト、僅ニ記憶仕居候間、極々其大略ヲ申上候、以上、

島津家勤王始末ニ付、拙老ニ関スル件々御尋ネ相成候得ドモ、拙老高年ニ及ヒ、尚夜中ノ事ニモ候ヘバ、其時ニ関スル人々ノ姓名及ヒ月日等大略忘却仕、何トモ申訳無之、加之筆ヲ採ルサヘ難堪候間、失礼之段多罪ヲモ顧ミス、男正雄ヲシテ右之通リ、只記憶ニ存ジ居候極々ノ大略ノミ口伝筆記セシメ、虎皮下ニ呈シ候間、其処宜布御取計可被下候、

明治二十四年八月十七日
滋賀縣近江国滋賀郡堅田村
字本堅田三百廿九番地住
弓削正繼
男正雄代筆

伯爵
大原重朝殿

二〇一〔中川久昭八幡山崎辺台場新築被仰付〕

中川〔久昭、岡藩主〕修理大夫

去月廿八日建白有之候船路相開運漕之事、便利之儀ニ思召候得共、側量以下不容易事ニ有之、未被及決議之処、比日英夷攝海渡来難計風聞モ有之ニ付テハ、八幡山崎辺台場御用御周旋有之候ハヽ、仰付、予防ニ被備度思召候、右台場御用御周旋有之候ハヽ、御満足被思召候事、

十二月

右戌十二月五日夜被仰付、

〔島津忠承氏蔵本にて校訂〕

二〇二〔殿中動静二〕

奈良奉行
山岡備前守〔景恭〕
佐渡奉行
中村石見守〔時万〕
名代鈴木大之進

御役御免
勤仕並寄合

右被仰付旨於芙蓉之間、雅楽頭老中列座、和泉守申渡之、

山岡備前守
金三枚
時服三
奈良奉行勤役中骨折候ニ付、被下之、

右於同席列座同前同人申渡之、

一美濃守今日モ登城無之、〔慶応元年十月十七日カ、幕府沙汰書にて校訂〕

二〇三〔和宮降下大赦〕

京都烏丸下長者町上ル町
芳兵衛元借家
儒医
池内大學〔奉時〕

追放赦免
鷹司殿元家来
小林民部〔良典〕

遠島赦免

遠島赦免　水戸殿元家来　鮎澤伊大夫（国維）

追放赦免　三條家元家来　丹羽豊前（正庸）

御蔵小舎人

安藝守悴

永押込赦免　山科出雲守（正恒）

追放赦免　鷹司家元家来　三國大學（直準）

永押込赦免　三條家家来　森寺因幡守（常安）

同

因幡守悴

追放赦免　森寺若狭（常邦）

青蓮院宮元家来

追放赦免　伊丹蔵人（重賢）

京都木屋町三條上ル上大坂町

久助元借屋

儒医

宇喜多一蕙（可為）

所払赦免　同人悴

同　松庵

松平丹波守領分

信州松本々町二丁目

元大名主

追放赦免　茂左衛門

一條殿元家来

追放赦免　入江雅楽（前賢）

洛中洛外ヲ構

若松杢（永福）

江戸払赦免

久我殿家来

永押込赦免　春日讃岐守（仲麗）

京都六角油小路西江入ル町

亀屋源太郎方借家罷在候

大覺寺門跡元家来

療病院

遠島赦免　六物空萬

（大河内信古、吉田藩主）松平伊豆守領分

奥州伊達郡金原田村

元名主

遠島赦免　八郎

御留守居番
古賀謹一郎元家来
藤森恭助〔天雅〕

紀州殿領分
勢州飯高郡板坂町
元百姓

江戸ヲ構、紀伊殿領分払御免　格太郎
伊達遠江守〔宗篤、宇和島藩主〕元家来
吉見長左衛門〔左善〕

追放赦免
松平讃岐守〔頼聡、高松藩主〕家来ニテ
出奔致シ候
長谷川宗右衛門〔秀麟〕

永押込御免
同人悴　長谷川速水〔秀雄〕
松平修理大夫〔島津茂久、薩州藩主〕家来
日下部伊三次〔翼〕悴
日下部裕之進〔信政〕

遠島赦免
小普請組
元熊田能登守家来

遠島赦免
古賀謹一郎元家来
豊作〔正道〕悴
勝野森之助

水戸殿領分
常州茨城郡鈴高野村
当山修験
寶壽院元厄介
と　き

追放赦免
水戸殿家来
伊豫之助悴
茅根熊太郎

遠島赦免
伊大夫悴
鮎澤力之助

追放赦免
同人次男
鮎澤大蔵

鷹司殿家来
民部悴
小林越前

追放赦免
水戸殿家来
吉左衛門次男

阿部十次郎家来

鵜飼喜三郎
同人三男
鵜飼貞五郎
同人四男
鵜飼清次郎

遠島赦免

右ノ者共、先達テ御婚礼相済候御祝儀ノ赦ニ可申付筈、但日下部裕之進・勝野森之助・茅根熊太郎・鮎澤力之助・鮎澤大蔵・小林越前・鵜飼喜三郎・鵜飼貞五郎・鵜飼傳次郎ノ外ハ赦免難成者ニ候得共、格別ノ御祝儀ニテ別段ノ訳ヲ以、赦免可被仰付筈、

水戸殿家老
安島帯刀（信立）

同　家来
吉左衛門倅
鵜飼幸吉（知明）
茅根伊豫之助（毅）
鵜飼吉左衛門（知信）

御小姓組
仙石左近組ノ節

曽我権右衛門家来
医師
春堂養父
飯泉喜内（友輔）
松平越前守家来（茂昭、福井藩主）
橋本左内（綱紀、景岳）
京都河原町三條上ル夷町
てる借家
儒者
頼三樹三郎（醇）
松平大膳大夫家来（毛利慶親、長州藩主）
杉百合之助江引渡（吉田松陰父）
蟄居申付置候浪人

右ノ者共、先達テ御仕置被仰付候処、今度御婚礼御祝儀ノ赦被行候ニ付、格別ノ訳ヲ以御仕置赦免、墓石共取建候共不苦旨、身寄ノ者共江可申渡筈、